

金山古墳群・金山横穴群 I・II

—袋井の群集墳と横穴群を考える(I)—

玄室

敷石

鉄刀

鉄刀

鉄刀

頭骨

骨

祭祠用土器群

玄門

鉄鏃

祭祠用土器群

羨道

閉塞石

1996

袋井市教育委員会

金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ

—袋井の群集墳と横穴群を考える(1)—

例 言

1. 本書は、昭和47年度と平成3年度に袋井市教育委員会が実施した、^{かなやま}金山古墳群・横穴群の第1次と第2次発掘調査報告書である。
2. 第1次発掘調査は袋井市教育委員会川井正一（当時）、第2次発掘調査を袋井市教育委員会早川保子・松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査、本書刊行に係る事務については、袋井市教育委員会生涯学習課文化財係が行った。
4. 本書の編集は松井一明が、挿図・図版の作成は松井・白澤崇・早川保子・水野かおり・鈴木美恵子・関西大学考古学研究室の学生諸君が、写真撮影については松井が行った。
5. 本書の執筆は松井・白澤が行い、文責を目次に記した。
6. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
7. 本書作成にあたっては下記の方々・関係機関にご教示、資料の提供を賜った。（敬称略）
川江秀孝 後藤健一 柴田稔 永井義博 高島好一 戸塚和美 前田庄一 向坂鋼二 米田文孝
関西大学考古学研究室
8. 題字については杉浦久子さんにお願いした。

目 次

第1章 はじめに	(松井一明)	1
第2章 周辺の古墳群	(松井一明)	1
第3章 遺構(古墳群・横穴群)		5
第1節 古墳群	(松井一明)	7
i) 墳丘 ii) 主体部		
第2節 横穴群	(松井一明)	12
i) 墓前域・小単位群 ii) 横穴内部と小単位群の特性分析		
第4章 遺物		28
第1節 須恵器・土師器	(白澤 崇)	28
i) 須恵器 ii) 土師器		
第2節 鉄製品・装身具	(松井一明)	39
i) 馬具 ii) 直刀 iii) 鉄鏃 iv) 刀子 v) 鉄鎌 vi) 耳環・玉類		
第5章 考察		45
第1節 原野谷川中流域における初期群集墳・後期群集墳の成立と展開	(松井一明)	45
i) はじめに ii) 初期群集墳の重層構造について iii) 後期群集墳・横穴群の成立について iv) まとめ		
第2節 古墳副葬土器の組成について	(白澤 崇)	62
i) はじめに ii) 古墳主体部副葬土器の組成 iii) 組成の特徴 iv) 各組成の年代 v) 時期による組成の変化 vi) 他地域の古墳との比較 vii) 金山横穴にみる土器副葬の状況 viii) 土器の器種による機能と組成 ix) まとめ x) おわりに		

挿 図 目 次

第1図 金山古墳群・横穴群位置図	2
第2図 金山古墳群・横穴群周辺の主要古墳・横穴群分布図	3
第3図 金山古墳群・横穴群第2次調査区地形図	4
第4図 2号墳・3号墳墳丘実測図	5
第5図 4号墳・5号墳墳丘実測図	6
第6図 2～5号墳主体部実測図	7
第7図 8号墳墳丘実測図	8
第8図 9号墳墳丘実測図	9
第9図 10号墳墳丘実測図	10
第10図 8～10号墳主体部実測図	11
第11図 金山横穴群全体図	13
第12図 A1号・A2号横穴実測図	14
第13図 A3号・A4号横穴実測図	15
第14図 A5号横穴実測図	16
第15図 B1号・B2号横穴実測図	17

第16図	B 3 号・B 4 号横穴実測図	18
第17図	B 5 号・B 6 号横穴実測図	19
第18図	B 7 号・B 8 号横穴実測図	20
第19図	B 9 号・B10号横穴実測図	21
第20図	B11号横穴実測図	22
第21図	横穴の群構成図	23
第22図	横穴の小単位ごとの副葬品・平面形態・敷石分類図	24
第23図	横穴内部の敷石・閉塞石・瓶類土器出土位置模式図	25
第24図	須恵器・土師器実測図(1)	30
第25図	須恵器・土師器実測図(2)	31
第26図	須恵器・土師器実測図(3)	32
第27図	須恵器・土師器実測図(4)	33
第28図	須恵器・土師器実測図(5)	34
第29図	須恵器・土師器実測図(6)	35
第30図	須恵器・土師器実測図(7)	36
第31図	須恵器・土師器実測図(8)	37
第32図	須恵器・土師器実測図(9)	38
第33図	鉄製品実測図(1)	39
第34図	鉄製品実測図(2)	40
第35図	鉄製品実測図(3)	41
第36図	鉄製品実測図(4)	42
第37図	鉄製品実測図(5)	43
第38図	大門大塚古墳墳丘・主体部・遺物実測図	48
第39図	団子塚9号墳墳丘・主体部・遺物実測図	49
第40図	雲座D古墳群墳丘・主体部・遺物実測図	50
第41図	5世紀後半～6世紀中頃の首長墓と初期群集墳の相関関係構造概念図	52
第42図	地藏ヶ谷・井守塚古墳群位置図	54
第43図	地藏ヶ谷古墳群・横穴群全体図	55
第44図	金山古墳群周辺の古墳・横穴群の消長・盛衰図	56・57
第45図	組成分類概念・瓶類内の占有率・瓶類内における時期による組成の変化図	65

表目次

第1表	静岡県内における古墳主体部の副葬土器の組成パターン表	63
第2表	時期別に見た組成表	67

写真図版目次

図版1	(1)B群横穴、2・8～10号墳遠景（北より） (2)B群横穴全景（南より） (3)A群横穴、3～5号墳遠景（南より）
-----	---

- 図版 2 (1)3号墳全景(西より) (2)3号墳主体部(東より) (3)4号墳全景(奥5号墳、東より)
- 図版 3 (1)4号墳主体部(西より) (2)4号墳主体部出土馬具・鉄鏃 (3)5号墳全景(東より)
- 図版 4 (1)5号墳主体部(東より) (2)2号墳全景(東より) (3)2号墳主体部(礫埦?、東より)
- 図版 5 (1)8号墳全景(西より) (2)2号墳主体部(南より) (3)9号墳全景(方墳?、西より)
- 図版 6 (1)9号墳主体部(小口礫積み、西より) (2)10号墳全景(南より) (3)10号墳主体部(南より)
- 図版 7 (1)A群横穴(手前1号横穴奥5号横穴、一つの墓前域からなる。) (2)A1号横穴内部(鉄刀や平瓶が出土) (3)A2号横穴内部(棺座石)
- 図版 8 (1)A3号横穴内部(フラスコ瓶や鉄刀出土) (2)A4号横穴内部(人骨多数遺存) (3)A5号横穴内部(須恵器多数出土)
- 図版 9 (1)B1～8号横穴全景(3つの墓前域からなる。南より) (2)B1・2号横穴全景(墓前域を共有する。南より) (3)B3・4号横穴(墓前域を共有する。南より)
- 図版10 (1)B5～7号横穴(墓前域を共有する。南より) (2)B6号横穴(1基単独で存在、南より) (3)B9～11号横穴(山頂部近くに存在、墓前域を共有する。南より)
- 図版11 (1)B1号横穴内部(鉄刀や甕出土) (2)B2号横穴内部(大きめの石の敷石) (3)B3号横穴内部(鉄刀や甕出土、小さめの石の敷石)
- 図版12 (1)B4号横穴内部(盗掘を受けている。) (2)B5号横穴内部(造り替えられており敷石も動いている。) (3)B5号横穴墓前域(大形甕や平瓶出土)
- 図版13 (1)B6号横穴内部(大きめの石の敷石、フラスコ瓶出土) (2)B7号横穴内部(土師器多く出土) (3)B7号横穴羨道部遺物出土状況(瓶と土師器坏出土)
- 図版14 (1)B7号横穴内部(敷石がほとんどない。平瓶出土) (2)B9号横穴内部(人骨や鉄製品多数出土) (3)B10号横穴内部(小形横穴、須恵器出土)
- 図版15 (1)A1号横穴出土土器 (2)A2号横穴出土土器 (3)A3号横穴出土土器
- 図版16 (1)A5号横穴出土土器 (2)B1号横穴出土土器 (3)B2号横穴出土土器
- 図版17 (1)B3号横穴出土土器 (2)B4号横穴出土土器 (3)B5号横穴出土土器
- 図版18 (1)B6号横穴出土土器 (2)B7号横穴出土土器 (3)B8号横穴出土土器
- 図版19 (1)B9号横穴出土土器 (2)B10号横穴出土土器 (3)4号墳出土土器
- 図版20 (1)9号墳出土土器 (2)A1号横穴出土鉄器 (3)A3号横穴出土鉄器
- 図版21 (1)A4・5号横穴出土鉄器 (2)A5号横穴出土玉類 (3)B2号横穴出土鉄器
- 図版22 (1)B3・7号横穴出土鉄器 (2)B9号横穴出土鉄器 (3)B3号横穴・9号墳出土玉類
- 図版23 (1)4号墳出土馬具 (2)4号墳出土鉄器 (3)B10号横穴・2・9・10号墳出土鉄器
- 図版24 (1)渋垂神社上古墳出土鏡 (2)愛野向山B古墳群(南より) (3)地藏ヶ谷横穴群(西より)

金山古墳群・金山横穴群第1次・第2次発掘調査報告書

第1章 はじめに

袋井市の遺跡の数は、現在判明している限りで約300箇所を数え、その内6割以上が横穴群・群集墳であり静岡県下でも有数な古墳群の所在地といえる。しかも、横穴群や群集墳ばかりでなく、大門大塚古墳や川会坊主山古墳などの地域の首長墳が存在し、首長墳と古墳群との関連を考えるうえでも興味深い地域であるといえる。今回調査を実施した金山古墳群付近には大門大塚古墳や団子塚古墳群など5世紀末～6世紀前半の有力な古墳が所在しているばかりでなく、地蔵ヶ谷横穴群・長者平古墳群なども発掘調査され、袋井市域の古墳文化を知るうえで非常に重要な地域となっている。しかしながら、この地区は袋井の市街地に近いせいか開発も進み、次第に古墳群が失われつつある現状となり極めて憂慮される事態となっていることも見逃せない。

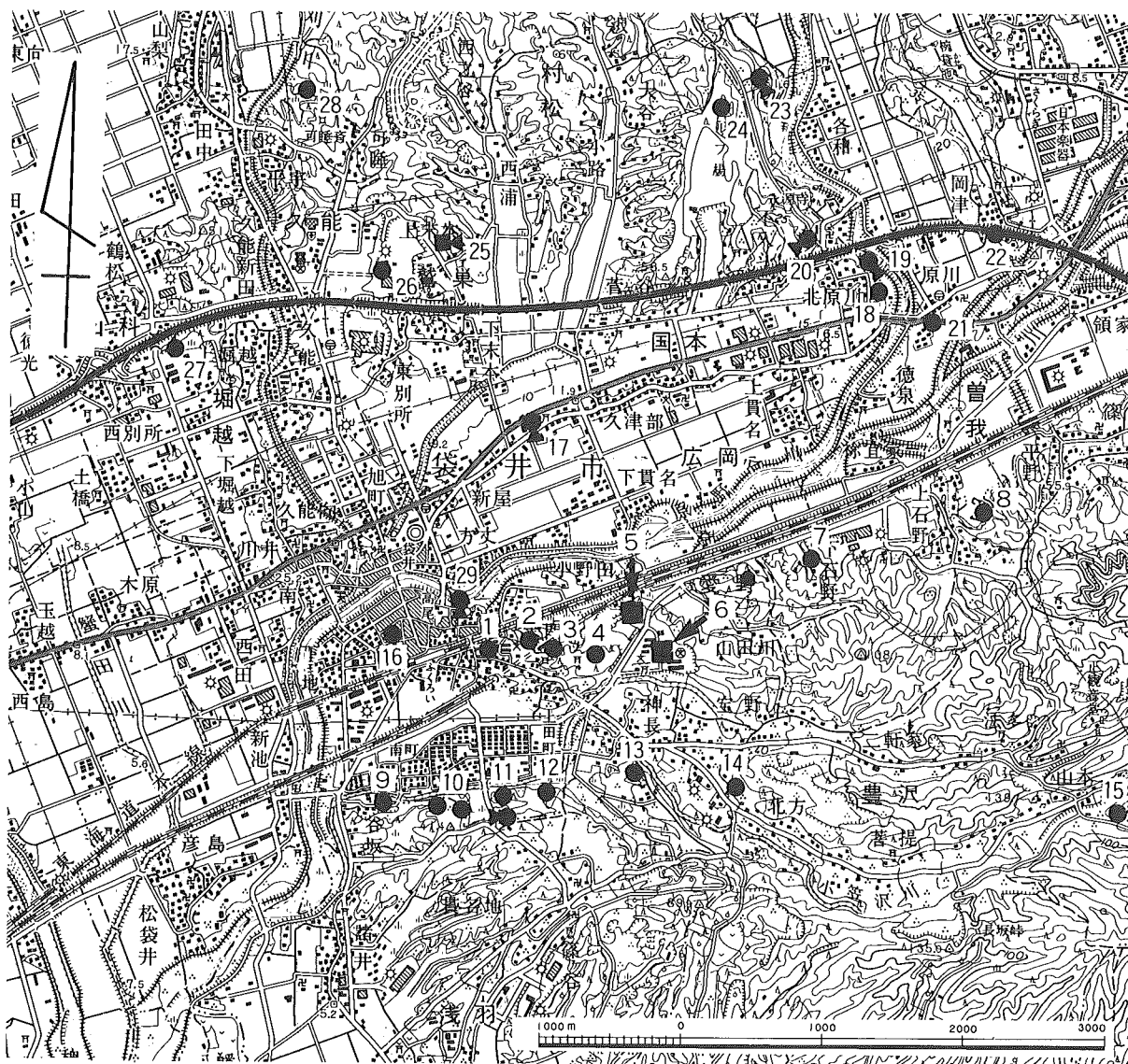
金山古墳群については現在の袋井高校及び現在の愛野公園予定地内丘陵の上に立地した木棺直葬墳と、丘陵斜面部に立地した横穴群とにわかれる。1972年4月～6月の3ヶ月間に実施された袋井高校・袋井南中学校の建設地に所在した第1次発掘調査地点では、木棺直葬墳3基と横穴5基が発掘調査された。1991年12月～1992年2月の3ヶ月間に実施された愛野公園の建設地に所在した第2次発掘調査地点では、木棺直葬墳4基と横穴11基が発掘調査された。

第2次発掘調査地点については1991年7月に実施した現地踏査で、丘陵上に3～4基程度の古墳と思われる地形が観察され、その形状から当地域に比較的好く見られる木棺直葬の古墳が工事予定地内に所在することが予測された。また、この地域に存在が予測される横穴群の所在状況については、丘陵斜面部の雑木が密集しており踏査での観察は不可能であったため、雑木伐採後に改めて踏査することとし袋井市都市計画課と協議した。その後、愛野公園の工事計画が進むなか教育委員会との協議がないまま、1991年10月斜面部で未発見の横穴群が見つかった情報が、工事関係者から袋井市教育委員会と都市計画課にもたらされた。そこで都市計画課と教育委員会が協議した結果、工事と発掘調査を並行しながら実施しなければならないという最悪の事態となってしまった。しかし、埋蔵文化財保護の立場から教育委員会は急遽発掘調査体制を整え、1991年12月から発掘調査を開始し、1992年2月には都市計画課と工事関係者の協力のもと発掘調査を無事終了することができた。

以上の発掘調査の経過から①開発行為に関わる埋蔵文化財の取り扱いが教育委員会と都市計画課と円滑かつ迅速に協議がなされていない点、②雑木の密集している丘陵地での現地踏査は横穴群や古墳群の発見を難しくしていることから雑木伐採後に改めて綿密に現地踏査を実施する必要性、③現場の工事と並行しながらの発掘調査の危険性などの問題点が明らかとなった。今後これらの問題点を教訓材料として発掘調査の円滑な調整が市役所内の他部局となされていくことを希望したい。

第2章 周辺の古墳群

金山古墳群の周辺部には袋井市でも有数な古墳群・横穴群が所在し、しかも発掘調査が実施されたものが数多く所在する。発掘調査が実施された5世紀後半～6世紀中頃の木棺直葬墳は愛野向山古墳A・B・C群で30基以上のほか、雲座古墳D群、高尾向山古墳群、高尾団子塚古墳群、地蔵ヶ谷古墳群、井守塚古墳群、谷坂古墳群などの各古墳群で2～4基程度発掘調査が実施されている。ほかに発

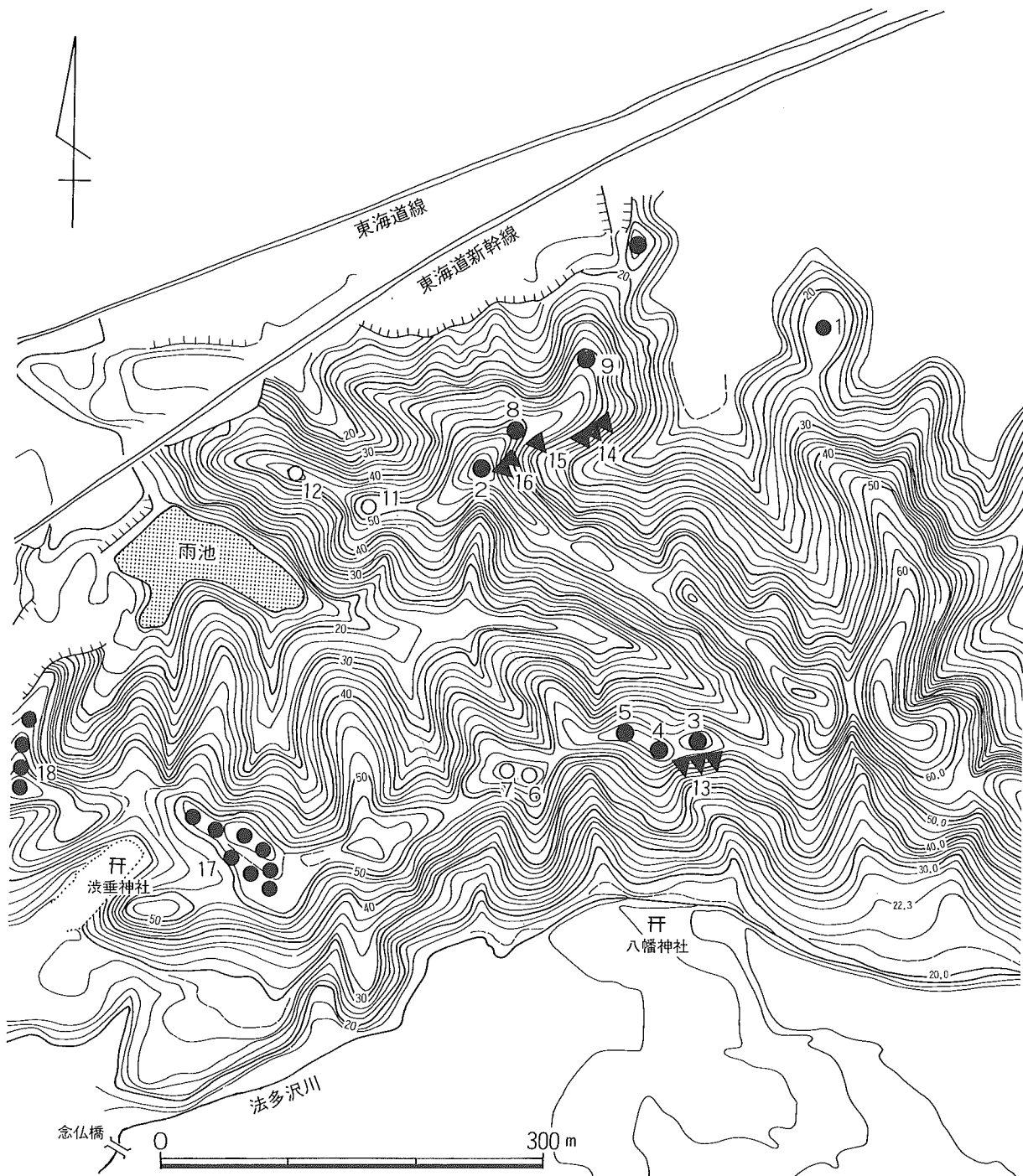


- | | | | | |
|--------------|--------------|-----------|---------------|--------------|
| 1 大門大塚古墳 | 2 地藏ヶ谷古墳・横穴群 | 3 大門山古墳群 | 4 渋垂神社上古墳群 | 5 金山古墳・横穴群B群 |
| 6 金山古墳・横穴群A群 | 7 愛野向山古墳群 | 8 若作古墳群 | 9 谷坂古墳群 | 10 団子塚古墳群 |
| 11 高尾向山 6 号墳 | 12 高尾向山古墳群 | 13 雲座古墳群 | 14 長者平古墳群 | 15 山本山古墳群 |
| 16 御所森古墳 | 17 久努大塚古墳 | 18 石ノ形古墳 | 19 宇佐八幡宮 1 号墳 | 20 権現山古墳 |
| 21 原川古墳 | 22 岡津横穴群 | 23 各和金塚古墳 | 24 菅ヶ谷横穴群 | 25 座王権現神社古墳 |
| 26 東山古墳群 | 27 ズン坂古墳群 | 28 川田古墳群 | 29 狐塚古墳 | |

第 1 図 金山古墳群・横穴群位置図

掘調査は実施されていないが、変形獣形鏡を出土したといわれる渋垂神社上古墳群や大門山古墳群も 5 世紀後半～6 世紀中頃の木棺直葬の古墳群と考えられる。

同時期の首長墓としては 5 世紀後半では全長 40m クラスの前方後円墳になる狐塚古墳、高尾向山 6 号墳、6 世紀前半～中頃では遠江で初期の横穴式石室を採用する直径 26m の大門大塚古墳、直径 20m クラスの御所森古墳や高尾団子塚 9 号墳等が知られている。首長墓のグループとしては古墳の分布から見ると狐塚古墳・大門大塚古墳・御所森古墳と高尾向山 6 号墳古墳・高尾団子塚 9 号墳の 2 グループに分けられそうであるが、高尾向山 6 号墳の年代については出土品が知られていないことから



- 1～12金山1～12号墳 13金山横穴群A1～5号横穴 14金山横穴群B1～B5・7・8号横穴
 15金山横穴群B6号横穴 16金山横穴群B9～B11号横穴 17波垂神社上古墳群 18大門山古墳群

第2図 金山古墳群・横穴群周辺の主要古墳・横穴群分布図

きりとした築造年代はわからないので、このグループわけについては確定できない。大門大塚古墳については主体部や周溝の範囲確認調査、明治時代の出土であるが鏡・馬具・直刀・玉類・須恵器など豊富な副葬品が知られ6世紀中頃の首長墓としてはこの地域では最も有力視してもよい古墳である。高尾団子塚9号墳は帽・振り環頭大刀・馬具・挂甲・鉄鏃・玉類・須恵器などが出土し首長墓としての豊富な内容の副葬品をもつが主体部は木棺直葬であり、墳丘規模や群集墳の古墳群形態を採用する



第3図 金山古墳群・横穴群第2次調査区地形図

ことから考え合わせると大門大塚古墳よりやや下位に位置付けられる古墳であろう。

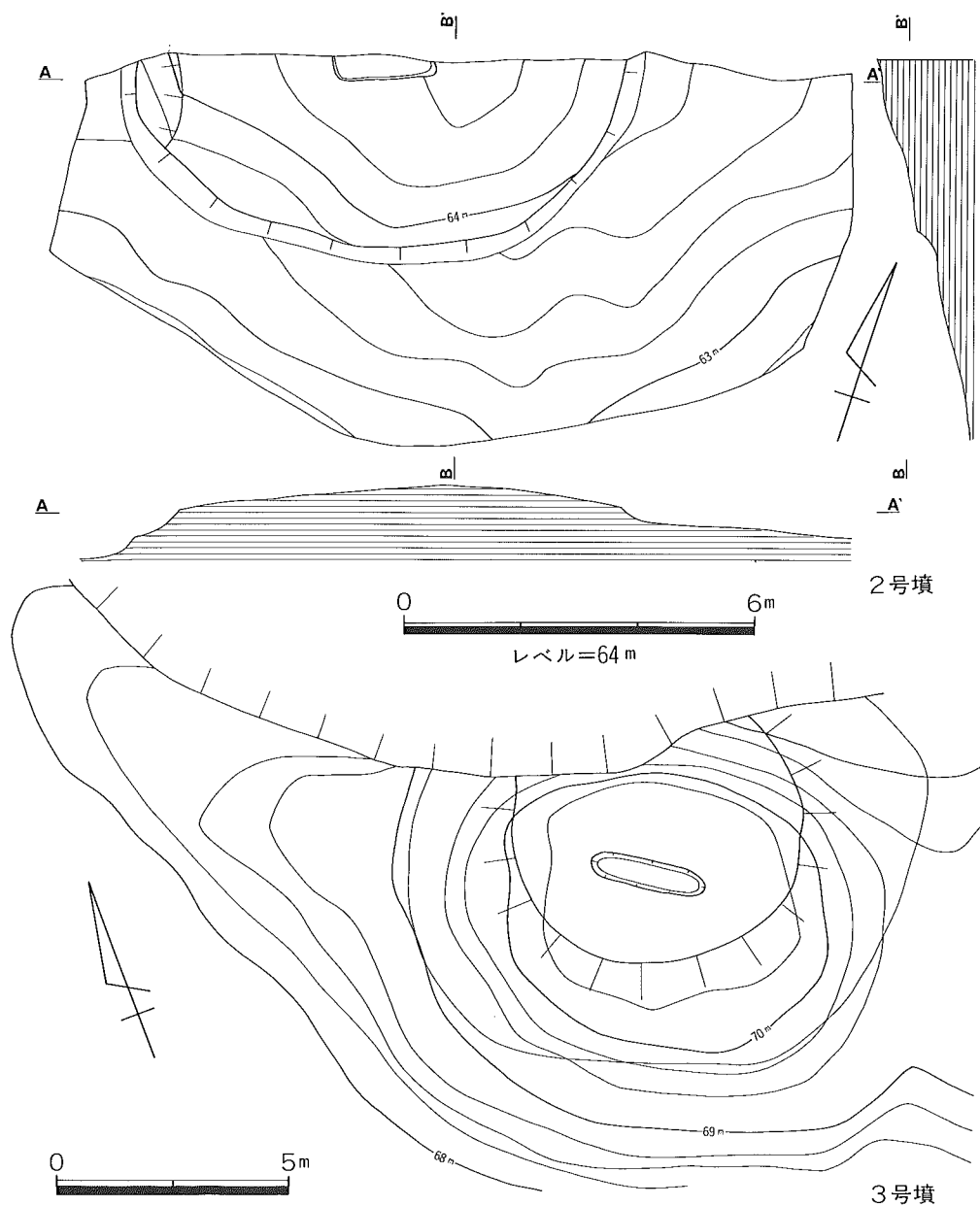
6世紀後半以降の横穴群としては地蔵ヶ谷横穴群や愛野向山横穴群が30基以上の群で存在する。小規模なものとしては山本山古墳群で、ほぼ同時期の横穴式石室の古墳と併存する形で4基程度からなる1単位の横穴群が見つかった。周辺部にも菩提山横穴群などの小規模横穴群がいくつか所在する。

横穴式石室を採用する古墳群は50基以上の規模を誇る長者平古墳群を中心として豊沢地区に山本山古墳群に見られたように小規模な横穴群を含みながらも数多く分布している。なお、北原古墳群・団子塚古墳群・高尾向山古墳群においては横穴式木室を採用した古墳が近年の発掘調査で多く見つかかり、磐田原台地の古墳群以東ではかなり集中的にみられる地域となってきた。横穴式木室古墳は首長墓である掛川市堀ノ内13号墳が近年の発掘調査でも見つかかり、これが横穴式木室古墳の東限になるかと思われたが、南東北地方のいわき市龍門寺古墳群（いわき市教育委員会他 1985）の中にも横穴式木室を採用するらしい古墳が発掘調査で見つかってきている。

以上のように金山古墳群の周辺部には5世紀後半～7世紀にかけての一大群集墳地帯を形成しており、しかもグループのなかに中規模の首長墓も存在していることから、群集墳の成立と首長墓との関係を知る上で重要な資料を提供している地域となっていることが理解される。

第3章 遺 構（古墳群・横穴群）

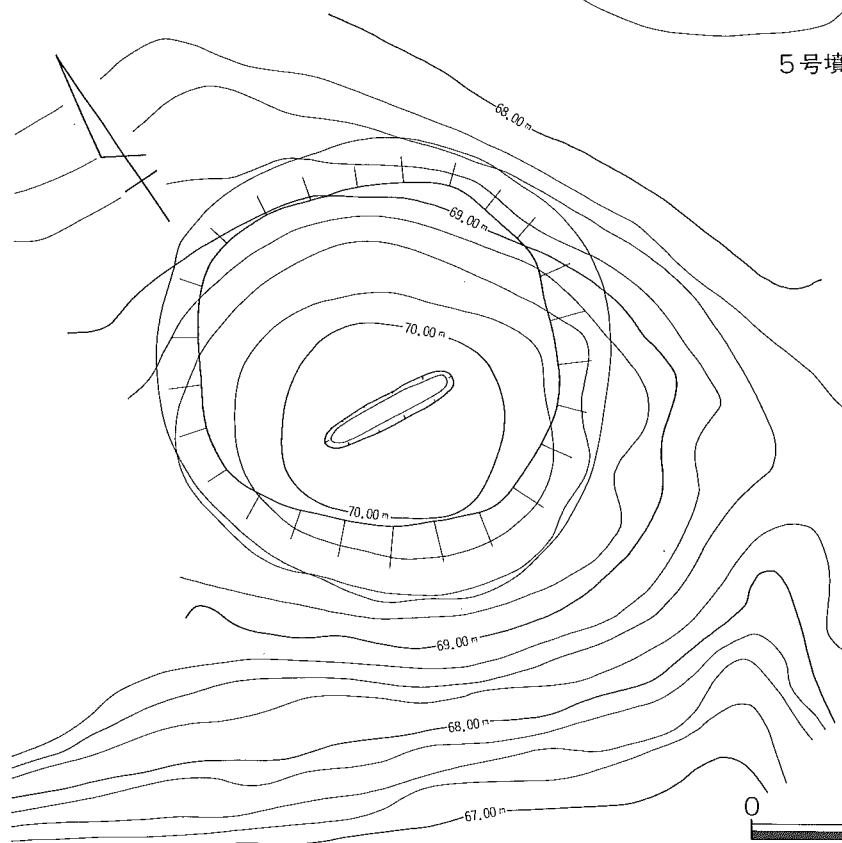
今回の調査で金山地区に所在する古墳・横穴群のほとんどを発掘調査することができた。発掘調査で発見された古墳は、第1次調査では木棺直葬を埋葬主体とする古墳3基（3～5号墳）、横穴は同一の前庭部を共有する横穴群1小単位（A1～A5号横穴）、第2次調査では木棺直葬を埋葬主体とする古墳4基（2・8～10号墳）、同一の前庭部を共有する横穴5小単位（B1～B2号横穴、B3～B4号横穴、B5・B7・B8号墳、B6号横穴、B9～B11号横穴）である。他の古墳については聞き取り調査や古い分布調査によると、木棺直葬を主体部とする古墳が古い時期の土石採集や道路建設のために既に破壊されたもの4基（6号・7号・11号・12号墳）と、愛野公園緑地帯のなかに1



第4図 2号墳・3号墳墳丘実測図



5号墳



4号墳



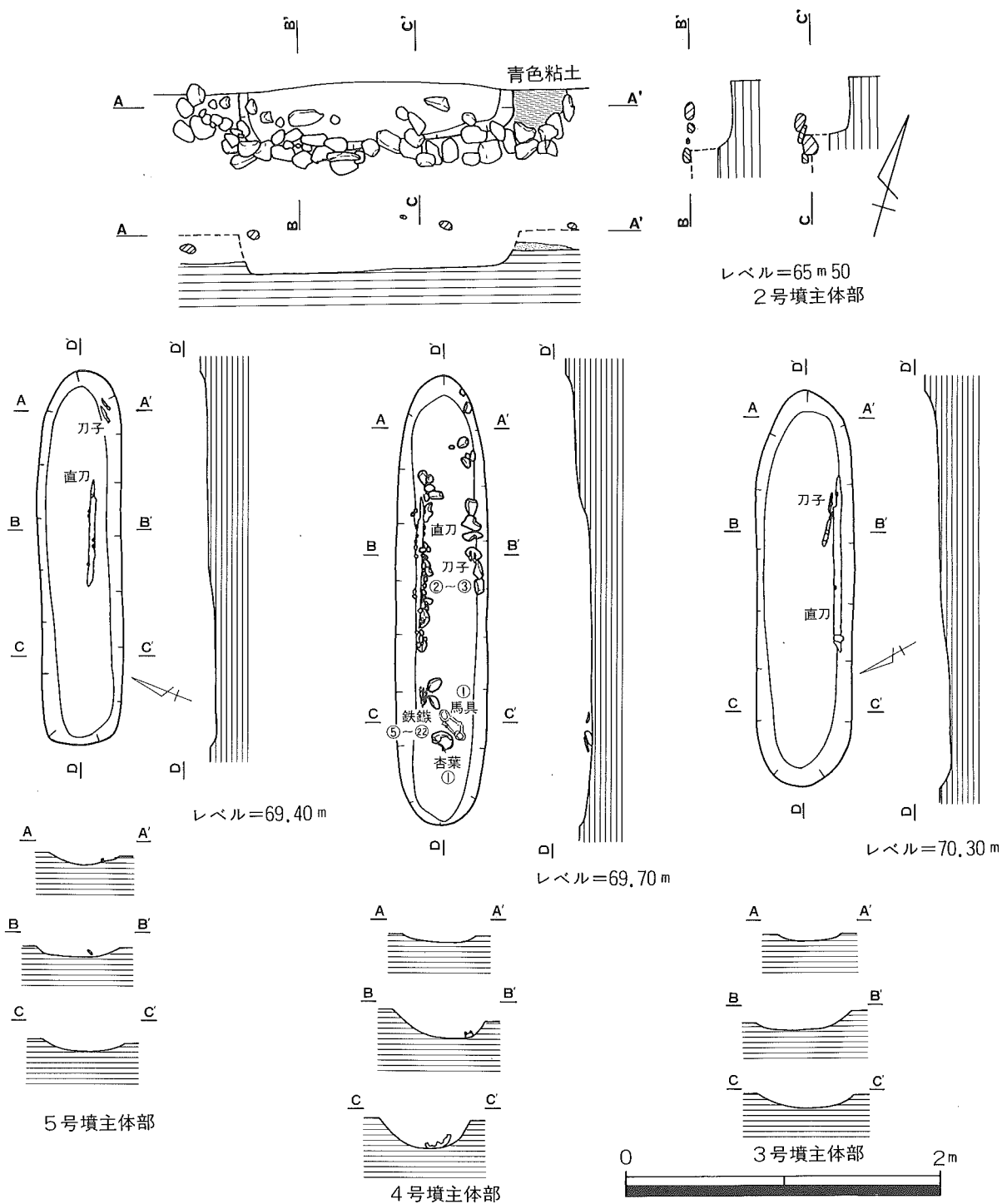
第5図 4号墳・5号墳墳丘実測図

基現存するもの（1号墳）がある。よって金山古墳群は木棺直葬を主体部とする古墳12基、横穴16基からなる古墳群であることが判明した。

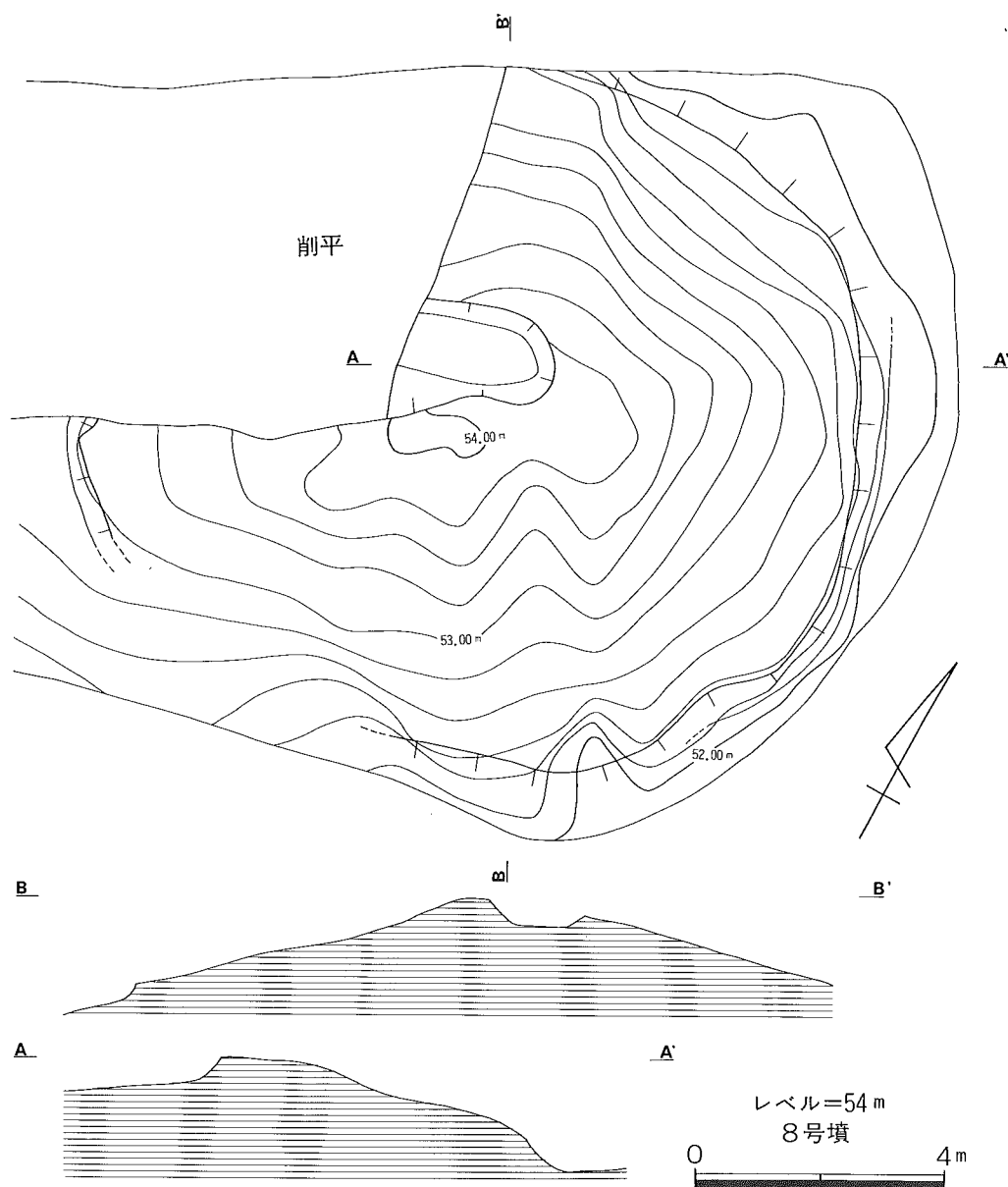
第1節 古墳群

i) 墳丘

墳丘規模は2号墳は径9m、3号墳は径11m、4号墳は径9m、5号墳は径9m、8号墳は径12m



第6図 2～5号墳主体部実測図

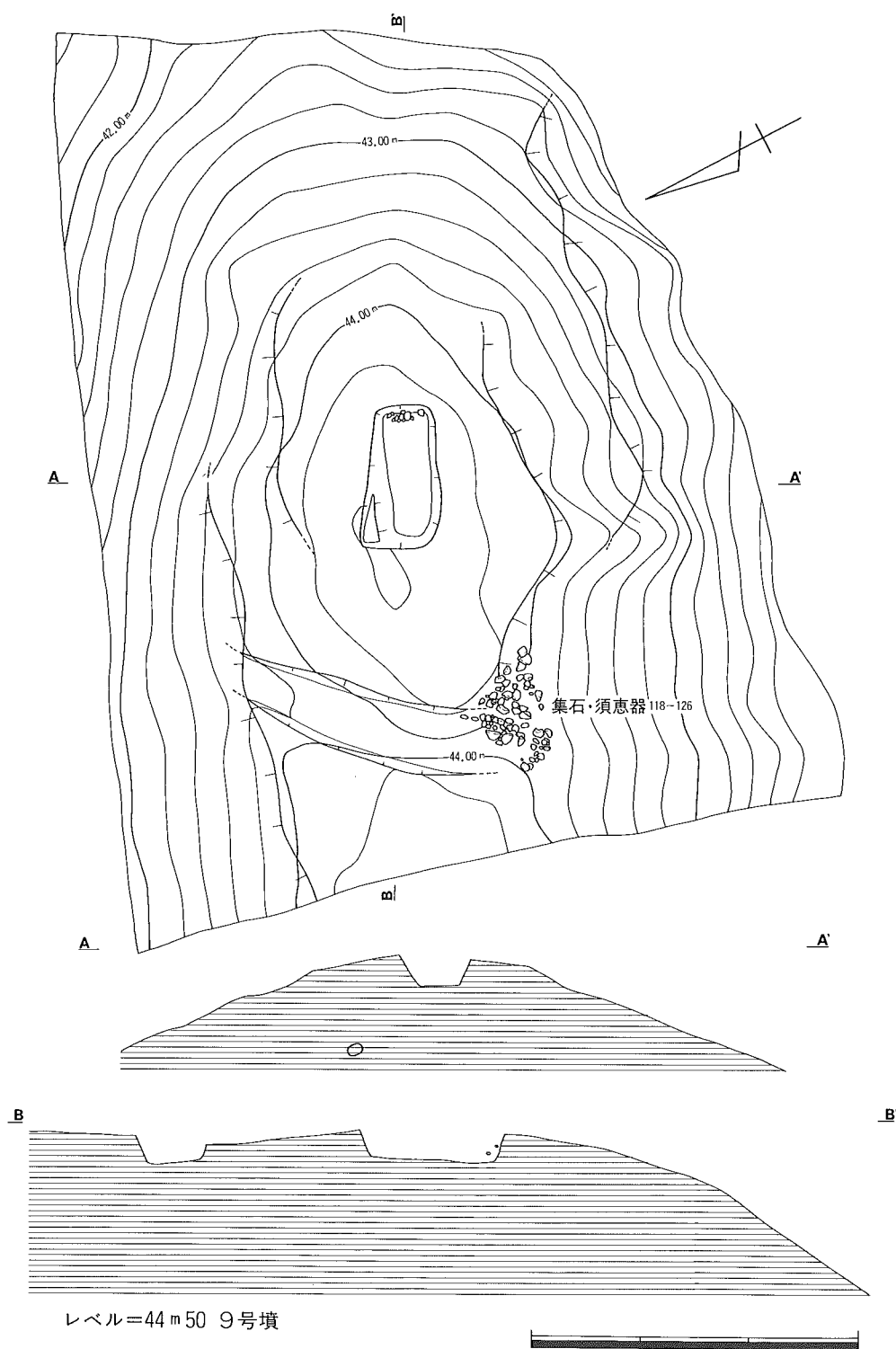


第7図 8号墳墳丘実測図

9号墳は径9m、10号墳は径9mを測り、何れも径10m前後の小規模なものである。墳形は2～4号墳・8号墳についてはほぼ円墳になると思われるが、10号墳は楕円形、5号墳と9号墳は尾根を切る周溝が直線的となりあるいは方墳に近い墳形となるかも知れない。

葺石・埴輪をもつものはないが、2号墳の墳丘裾から須恵器の甕の破片、4号墳の墳丘裾から須恵器の高坏、8号墳の周溝から礫とともに須恵器坏が出土している。

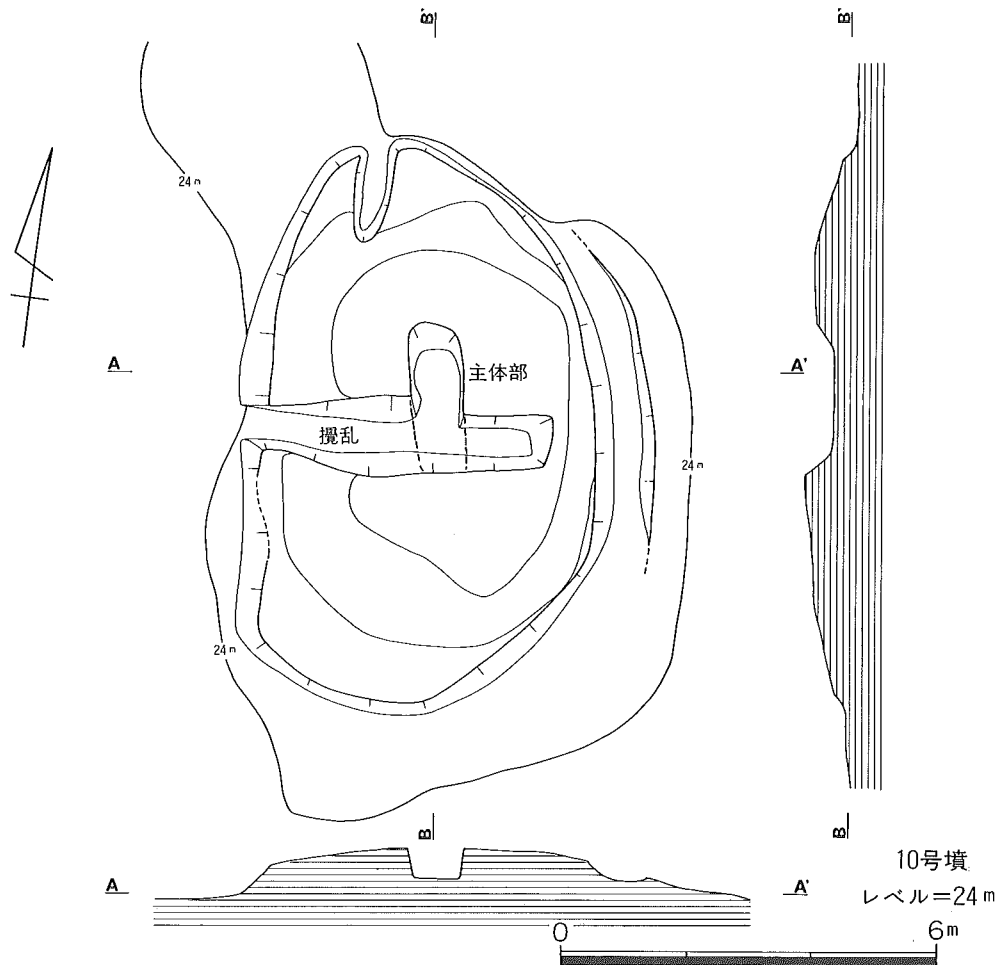
明確に全周する周溝をもつものはないが、5号墳と9号墳は尾根線を切る周溝が掘られ、10号墳は部分的な浅い周溝をめぐらしている。他の古墳については墳丘裾部を削り込み若干の平坦部を設けることにより墳丘裾を造り、明確な盛土と周溝により墳丘を築造しているものはない。周溝を入れる場所については古墳を築造した地形に大きく左右されていると思われる。すなわち、丘陵の自然の膨らみを利用しているほとんどの古墳の場合については無理をして周溝を掘削しないで墳丘を築造している。尾根の高まりの変換点に造られた5号墳や9号墳は、高さが墳丘とほぼ同じ尾根線側を切るよう



第8図 9号墳墳丘実測図

に周溝を掘削し墳丘を造り出している。比較的平坦な地形を示した場所に築造された10号墳は周溝をめぐらすことで墳丘を造ることが可能になったと思われるのである。

ii) 主体部

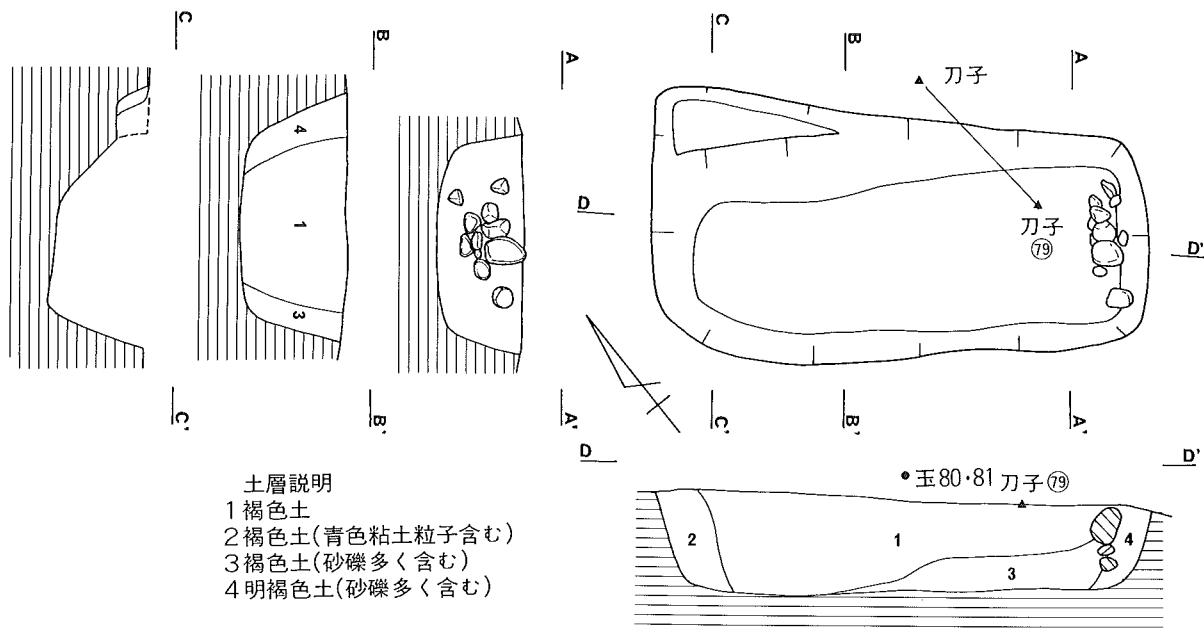


第9図 10号墳墳丘実測図

主体部は、小形の箱式木棺になると思われる2号墳・8～10号墳、小形の短い割竹形木棺になると思われる3～5号墳がある。2号墳の主体部は側面と上面部分を礫で覆う礫槨で、被葬者の頭位方向を現すと思われる東側小口部に顕著な青色粘土が認められた。9号墳にも被葬者の頭位方向を現すと思われる東側小口部に礫積みが認められる。9号墳の主体部については棺外や棺の埋土上層より鉄鏃や小玉が出土しており、もう一つ古い段階の主体部が存在した可能性がある。主体部北東コーナー部分に1段張り出しがあり、これが古い段階の主体部の残存部分となる可能性があるだろう。

副葬品は馬具・直刀・刀子・鉄鏃が出土した4号墳、直刀・刀子が出土した3号墳・5号墳、直刀片・鉄鏃が出土した2号墳で認められた。それ以外の古墳では主体部の中ではないが刀子・玉の出土した9号墳と、攪乱より鉄鏃を出土した10号墳で副葬品らしいものが見られた。その他の古墳については主体部が半壊状態のものもあることから、副葬をもたない古墳であったかどうかかわからない。何れにしても、馬具を副葬した4号墳以外の古墳の副葬品は極めて貧弱なものであったといえよう。

次に、単位群ごとに副葬品の傾向を見ると、3～5号墳の単位群では何れも刀を持っているが、2・8～10号墳では2号墳で直刀を持つ可能性がある以外は刀子や鉄鏃といった貧弱な内容となっており、単位群ごとに武器の保有傾向が異なっていることが判明した。また、3～5号墳の単位では4号墳が馬具を持ち、2・8～10号墳では2号墳が礫槨の主体部で直刀を持つことから、各単位群ごとに1基やや優勢な副葬品を持つ古墳が存在することも判明した。



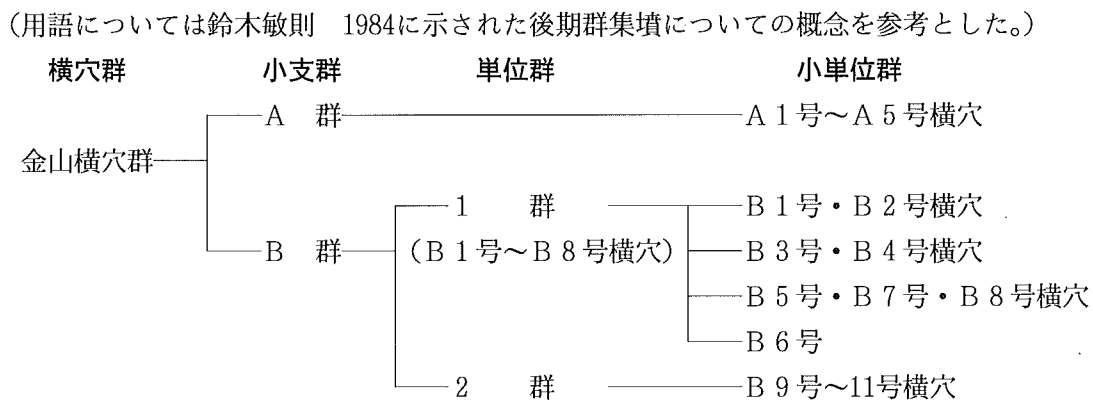
第10図 8～10号墳主体部実測図

古墳群の時期については、須恵器の出土した2～4号墳・9号墳などからみて田辺編年TK10を中心として一部MT15型式の時期を含みそうな時期、すなわち6世紀中頃を中心として一部6世紀前葉に遡りそうな古墳を含む時期の古墳群と考えておきたい。

第2節 横穴群

i) 墓前域・小単位群

金山横穴A・B群ともに平面形態が長方形を呈する墓前域をもつものであった。一つの墓前域で横穴の共有基数は多いものでA1～5号横穴の5基1単位群で一つの墓前域を形成するもの、B5・7・8号横穴、B9～11号横穴のように3基1単位群のもの、B1・2号横穴、B3・4号横穴の2基1単位群のもの、6号横穴のように1基で1単位群を形成するものなどのバラエティーがある。本報告書ではこの墓前域を共有する横穴群を最小単位群として認識すると、以下の通り6つの小単位群に分別することが可能となる。さらにその小単位群を一つの谷ごとにまとまりを認めるとするならばA群とB群に大きく大別され（小支群）、さらにB群は各小単位群の位置関係からB1～8号墳とB9号～B11号横穴に分けられること（単位群）から、以下のように3段階の単位群に整理できようか。

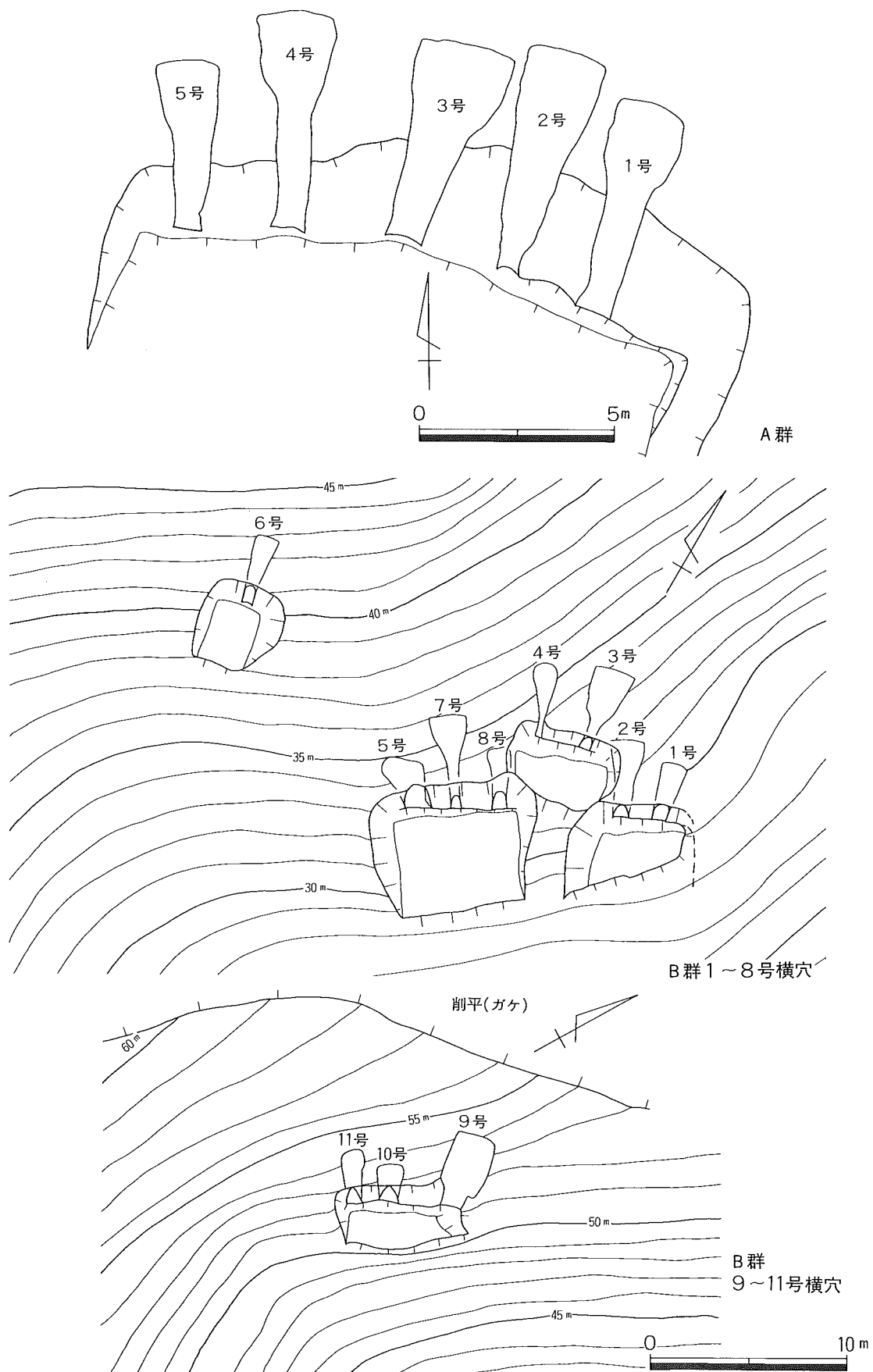


墓前域からは遺物の出土はほとんどないが、わずかに5号横穴の入り口部分に中形の甕が閉塞石に使われた礫を利用して設置されていた。ほかには、各横穴の入り口周辺に閉塞石として利用したと思われる礫が散乱しているがその範囲は狭い。

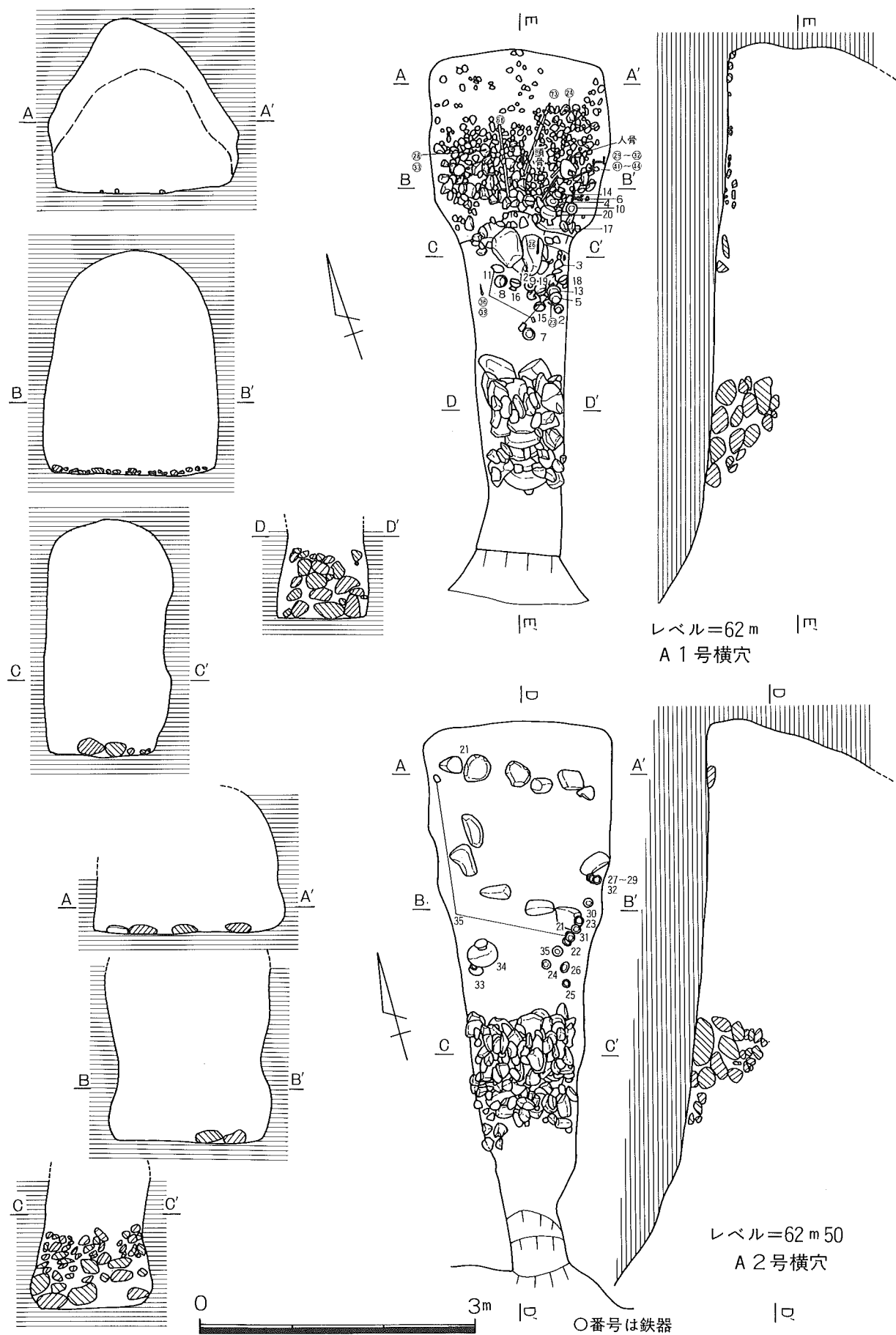
各小単位群内の築造順位をしてみると築造時期の不明瞭なものもあるが、基本的には第21図に示したように各小単位のなかに最初に1基築造され、その後順次横穴が造墓されていったことがわかる。この状況は、遠江における後期群集墳の分析で示された単位群の在り方（鈴木敏則 1984 松井一明 1994）と全く同一のものであると理解される。また、出土土器等から築造時期の始まりを検討すると、墓前域を共有する各小単位群は概ね6世紀後半代から築造を始めていることがわかるが、B3・B4号横穴の小単位群だけは7世紀代から築造が始まっていると思われややばらつきが見られる。

追葬については、土器を検討したかぎりではA3号横穴で7世紀中頃の1回、A5号横穴で7世紀中頃の1回、B1号横穴で7世紀前半の1回、B2号横穴で7世紀前半の1回、B7号横穴で8世紀初頭の1回、B9号横穴で7世紀前半の1回が認められた。ただし、人骨の個体数で検討するならばA4号横穴で見られたように頭骨が4体分確認された例もあることから、土器にあらわれた追葬回数と埋葬者の数が必ずしも一致するとは限らない問題を留意しておきたい。

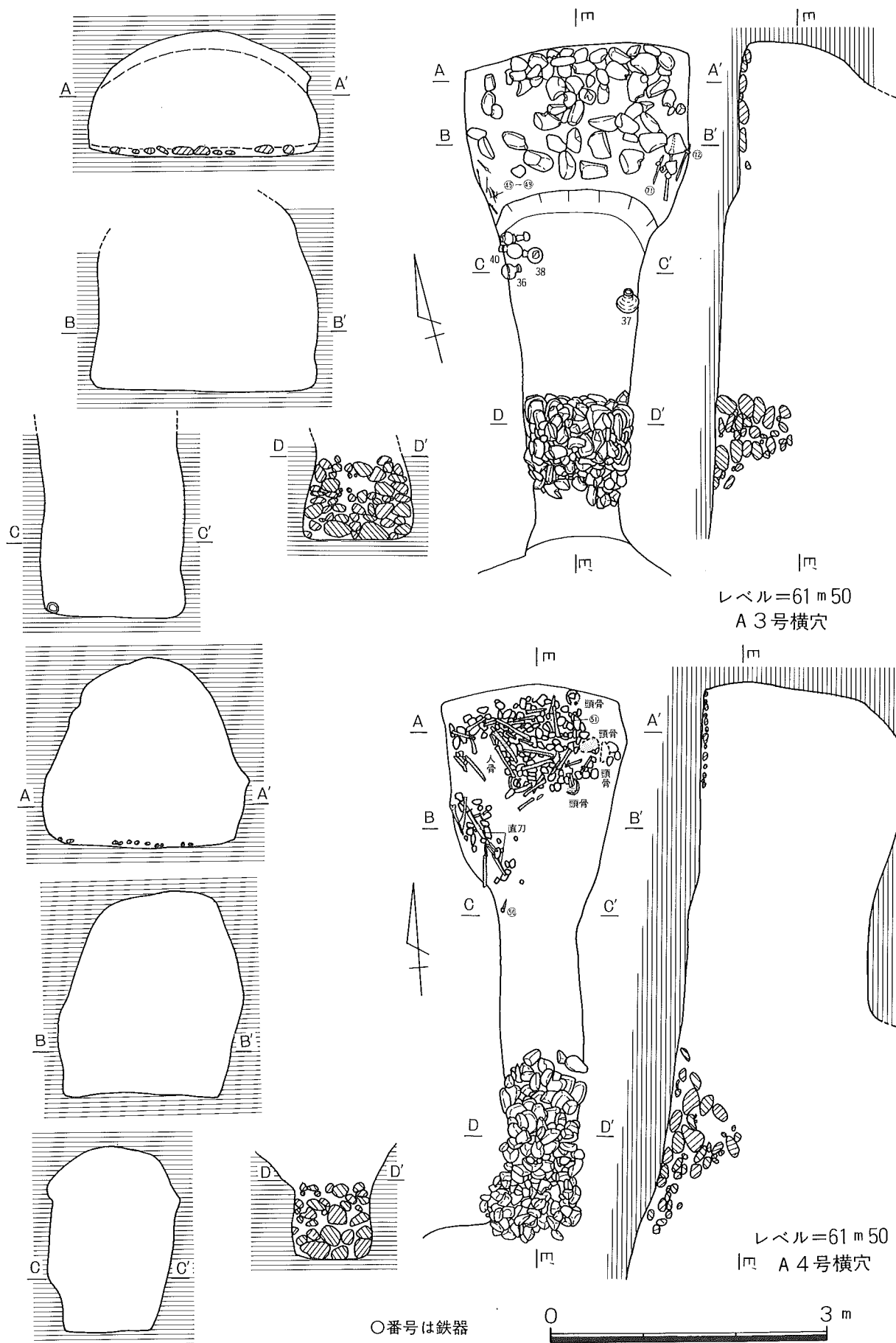
以上の点から金山横穴群の築造時期を検討するならば、A群・B群ともに6世紀後半に築造が始まり7世紀前半には築造が終了し、7世紀後半～8世紀初頭まで追葬時期が認められる、遠江では一般的な築造パターンとなる横穴群に分類できる（1b類に分類したものに該当。松井一明 1994）。



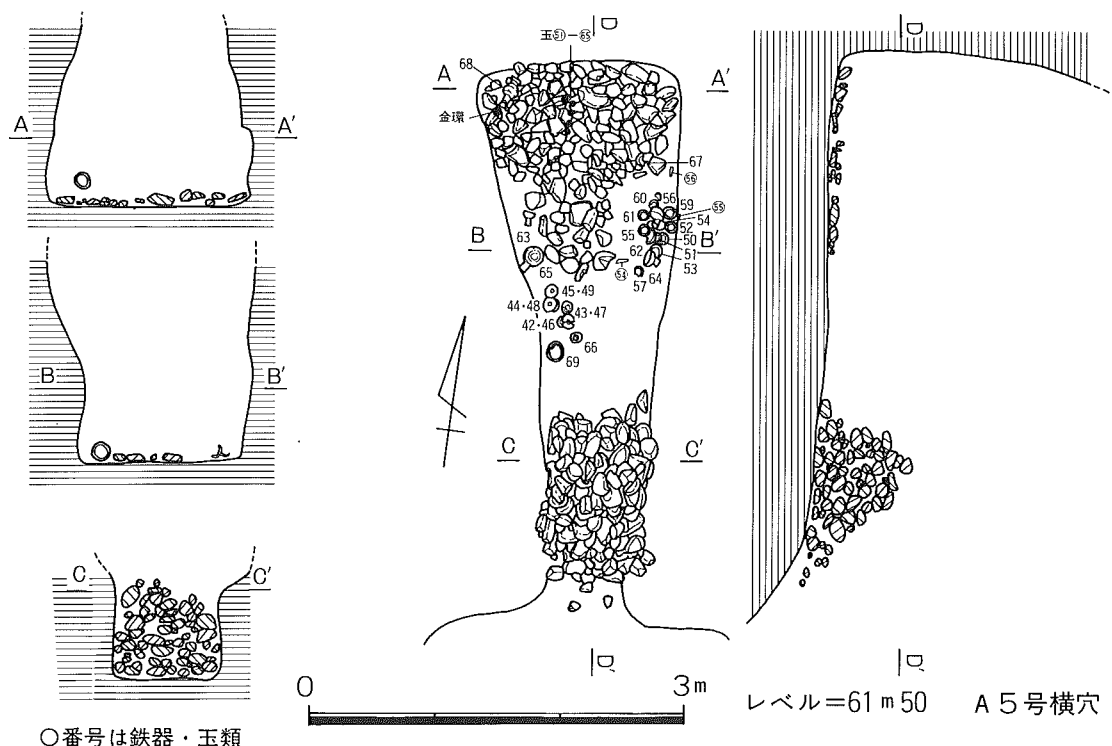
第11図 金山横穴群全体図



第12図 A1号・A2号横穴実測図



第13図 A 3号・A 4号横穴実測図



第14図 A 5号横穴実測図

ii) 横穴内部と小単位群の特性分析

平面形態については、いくつかのバリエーションが認められる。以下の通り分類してみた。

A類＝玄室は長方形をなし、羨道との境に明確な袖をもつもの。A 1号・B 3号・B 9号横穴が該当する。

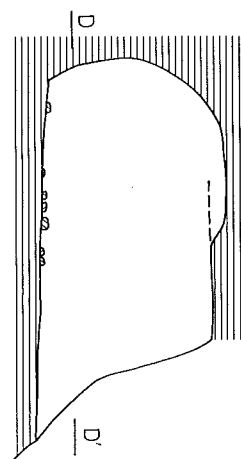
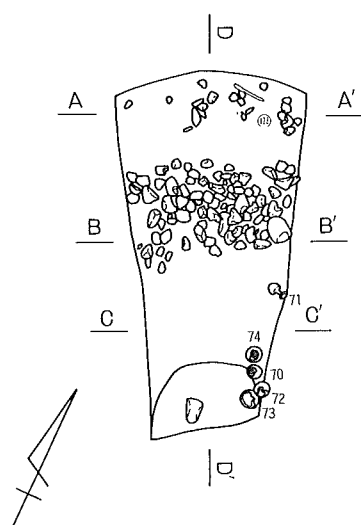
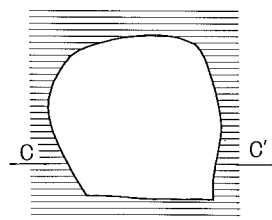
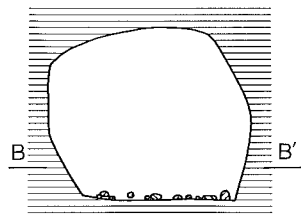
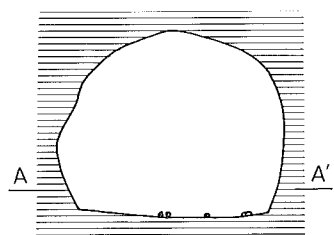
B類＝玄室は長方形ではなく、奥壁のほうが最大幅をもつため台形に近い形態となっている。羨道との明確な境としての袖部はないが、玄室と羨道部の幅の差は大きく玄室と羨道は明瞭に区別されている。A 3号・A 4号・B 4号・B 7号横穴が該当する。

C類＝最大幅は奥壁部分となるが、玄室と羨道の境が明確でなくなり、玄室と羨道の区別が曖昧になったもの。A 2号・A 5号・B 1号・B 2号・B 5号・B 6号・B 8号・B 10号・B 11号横穴が該当する。

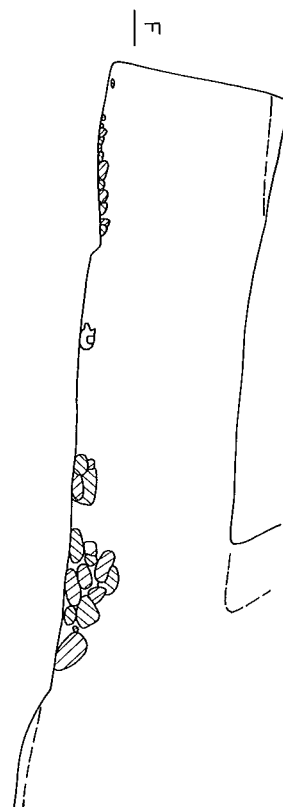
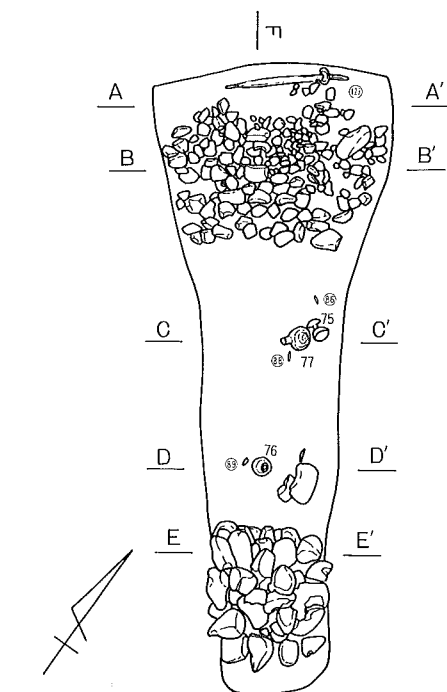
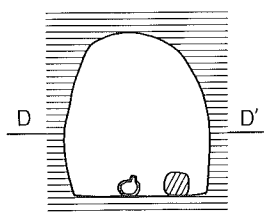
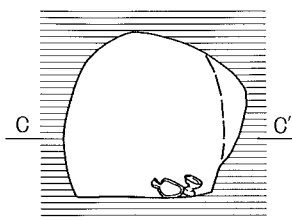
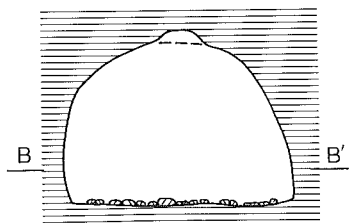
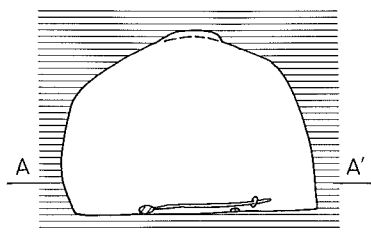
以上の平面形態の玄室における断面形態について見てみると、A類は尖頭アーチ型、B類は尖り具合がやや鈍くなった尖頭アーチ型。C類については尖頭型がほとんどなくなりむしろドーム型に近い形態に変化している。

平面形態と断面形態で型式差を見てみたが、その型式変化から考察するとA類からB類そしてC類に変化したとも考えられる。しかし、各横穴から出土した土器や小単位群の分析（第21図・第22図参照）から見ると、6世紀後半段階からC類形態をする小単位群（B 2号・B 6号横穴）もあるので、この型式変化については有力な小単位群についてのみ見られ、あまり有力でない中・小形の横穴からなる小単位群については当初から省略形態のC類を採用していたと見られる。

次に棺の位置を推定しうる玄室の敷石について検討してみたい。明確な敷石が存在する横穴は、A 1号・A 3号～A 5号・B 1号～B 3号・B 5号・B 6号横穴で、B 4号・B 11号横穴については盗掘を受けており当初から敷石の存在の有無についてはわからない。A 2号・B 10号横穴については棺



レベル=29 m 80
B 1 号横穴

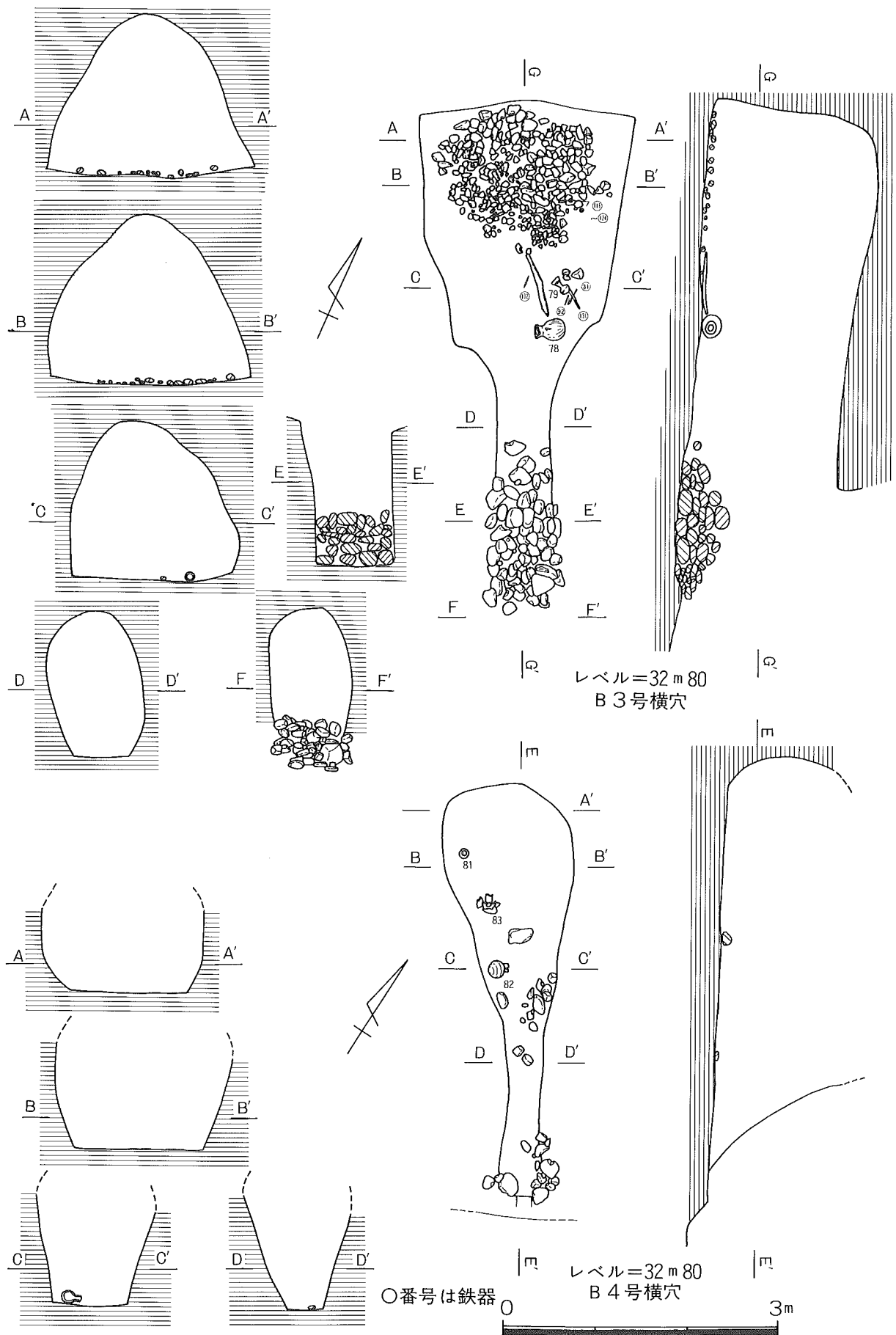


レベル=29 m 80
B 2 号横穴

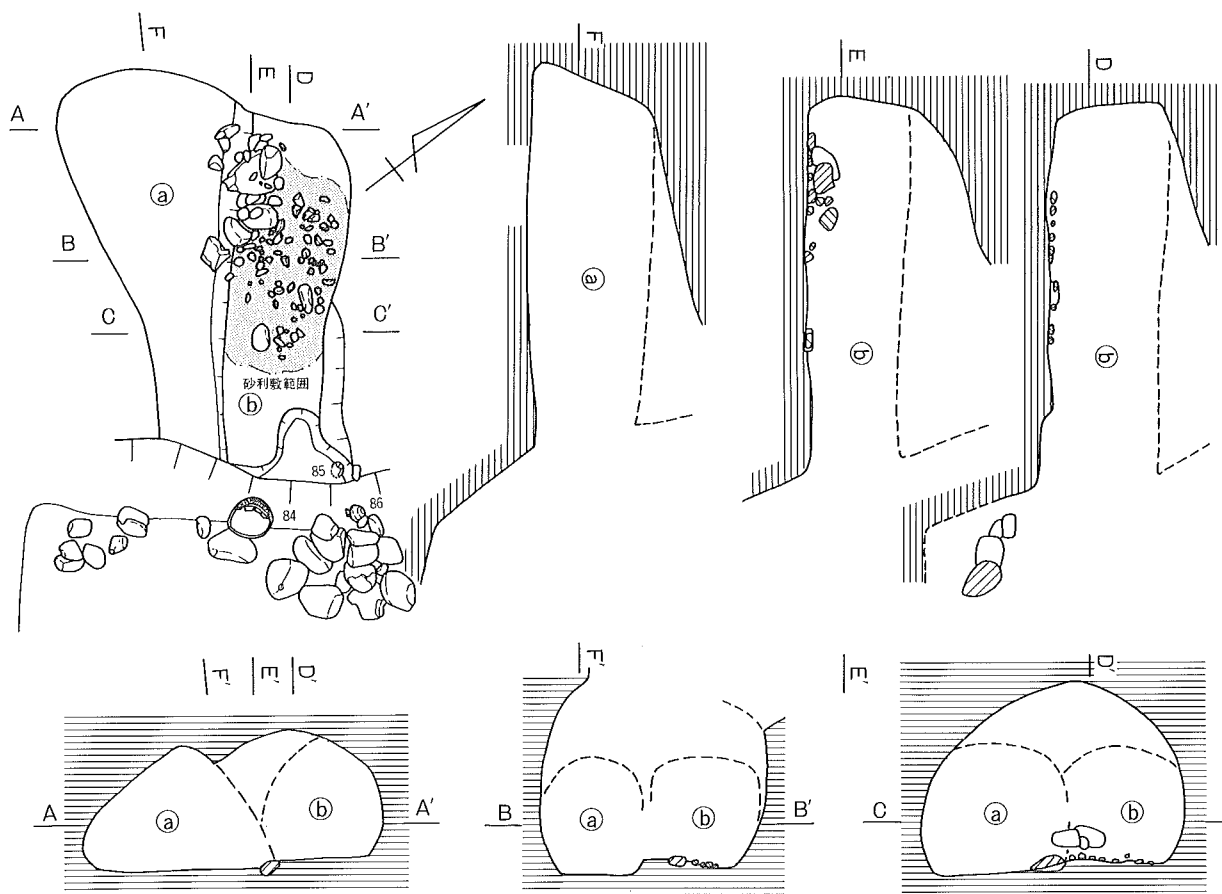
○番号は鉄器

0 3m

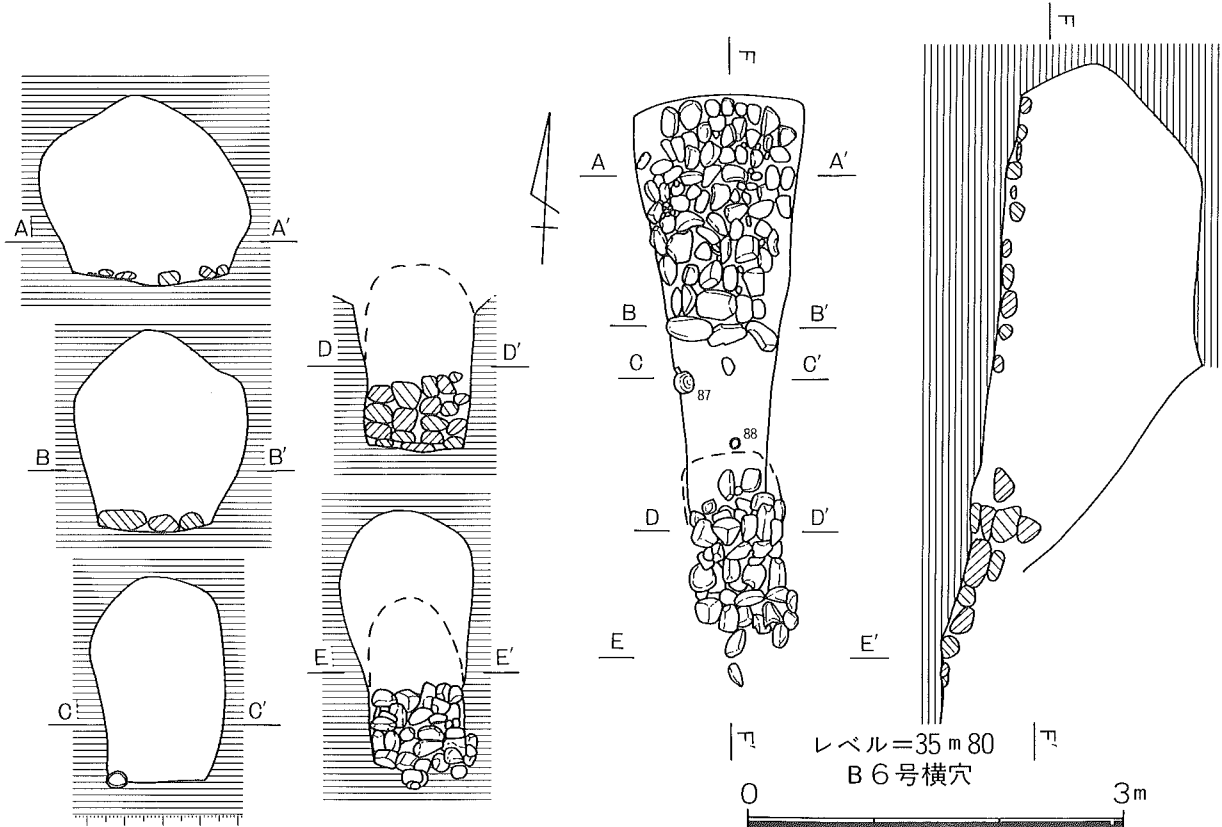
第15図 B 1 号・B 2 号横穴実測図



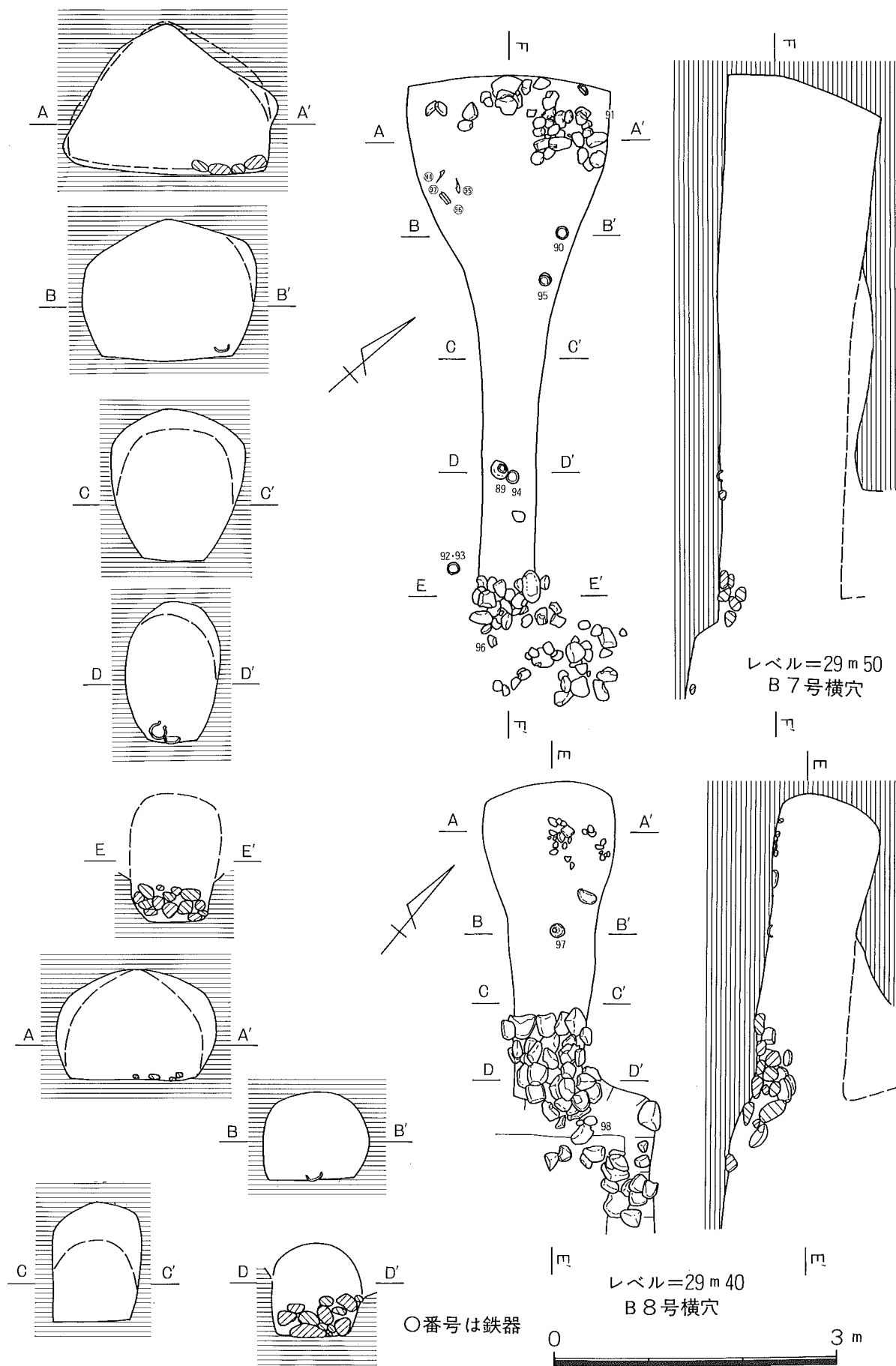
第16図 B 3号・B 4号横穴実測図



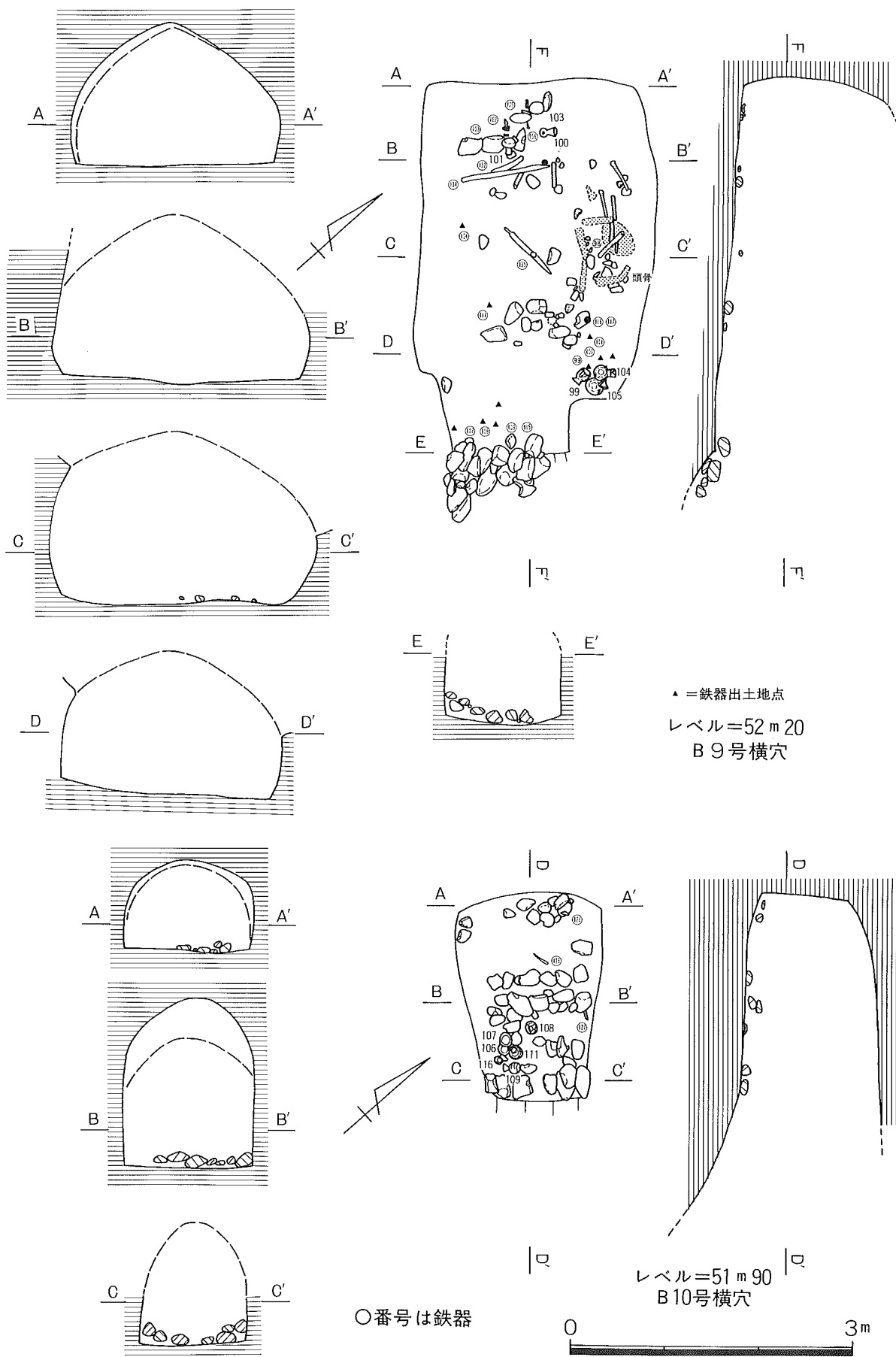
レベル=29 m 90 B 5号横穴



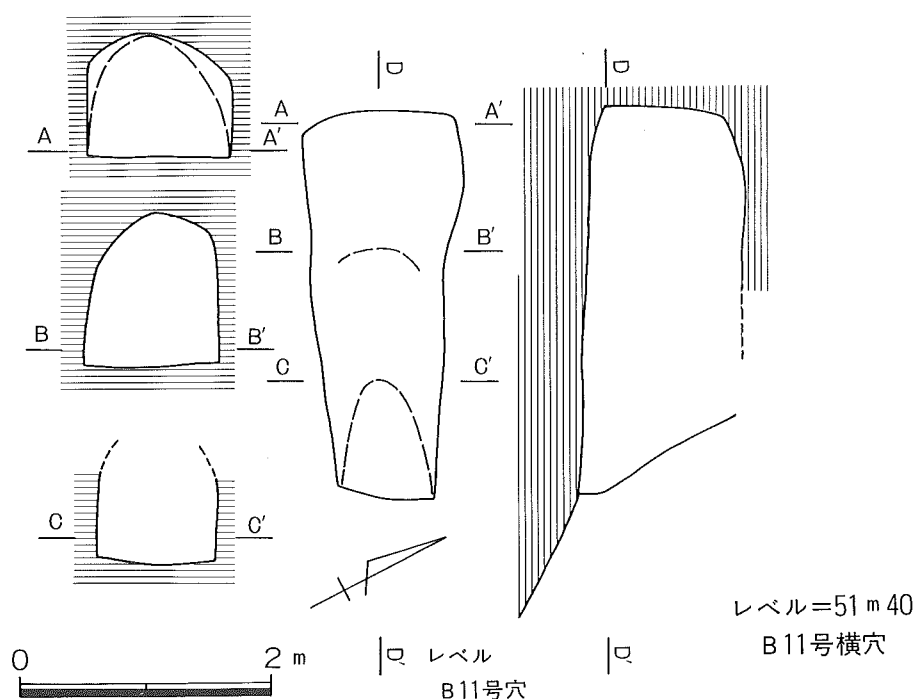
第17図 B 5号・B 6号横穴実測図



第18図 B 7号・B 8号横穴実測図



第19図 B 9号・B10号横穴実測図



第20図 B11号横穴実測図

座石らしい礫の配置が見られる。以上の敷石の形態について次の通り分類してみた。

A類＝拳大前後の比較的小さな礫を使い敷石としたもの。A1号・A4号・A5号・B1号～B3号横穴が該当する。

B類＝拳大以上の大形の礫を使い敷石としたもの。A3号・B6号横穴が該当する。

C類＝砂利のような細かな礫を使い敷石としたもの。B5b号横穴が該当する。

D類＝拳大以上の大形の礫を並べ棺座石のように配置したもの。A2号・B10号横穴が該当する。

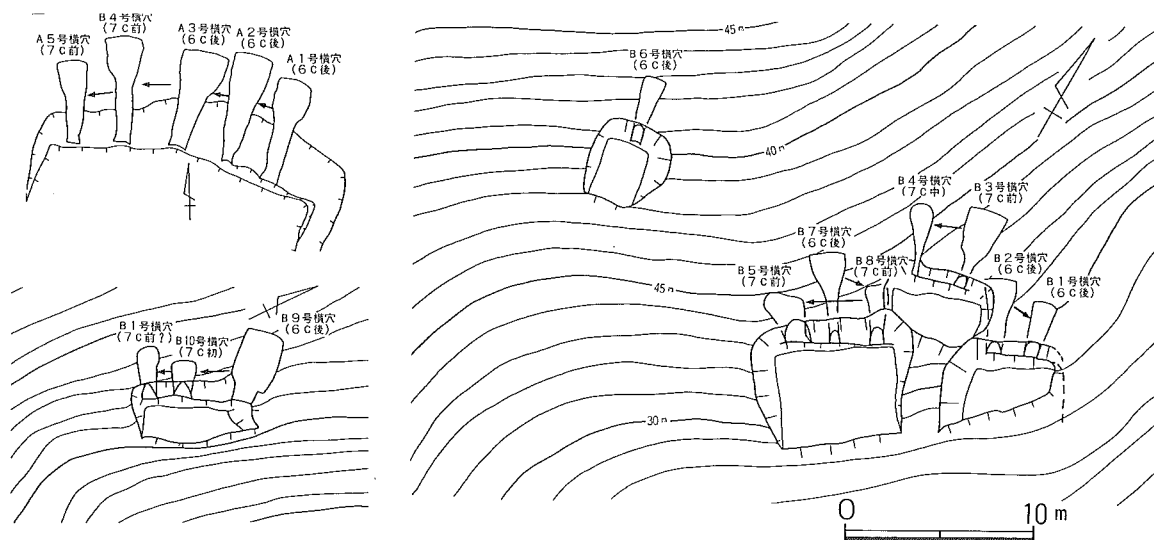
E類＝明確な敷石をもたないもの。B5a号・B7号・B8号横穴が該当する。

不明＝盗掘のため敷石の有無が不明なもの。B4号・B11号横穴が該当する。

以上の中でさらに、玄室を一段高く棺座状に造り出しているものをあげると、A1号（A類敷石）・A3号横穴（B類敷石）が該当する。いずれも、A類ないしB類敷石に該当し、敷石施設を強く意識していると思われる横穴に採用されている。

さて、以上の分類から見てみると各類の敷石の採用傾向を小単位群ごとに見てみたい。A類はB1号・B2号横穴とB3号・B4号？横穴の小単位で採用されている。敷石をもたないE類はB5a号・B7号・B8号横穴で小単位群の中で一貫して見られるものと、B9号横穴のようにD類（B10号横穴）と混在している例がある。B類については単独のB6号横穴やA群でも6世紀後半代築造のA3号横穴で採用されている。このように、敷石の採用傾向は時期差と考えるよりも、各横穴の小単位群ごとの差として現れているようである。とくにA類とE類にその傾向が高い。たとえば、A群の敷石を検討してみると、最初の築造横穴であるA1号横穴はA類で出発し直後築造のA2号横穴ではD類、A4号横穴ではB類を採用するものの、7世紀前半築造のA4号・A5号横穴はA類に統一されるのである。

いっぽう敷石の意識の弱いE類を採用したB9号横穴の小単位群を見てみると、B11号横穴の敷石



第21図 横穴の群構成図

の状況はわからないものの、B10号横穴では敷石としては省略化が進んだD類を採用していることから見て、B9号横穴の小単位群もE類を採用するB5号・B7号・B8号横穴の小単位群との関連が指摘できるのである。

このように、金山横穴群の敷石の状況を見てみると、敷石の意識が強いと思われるA類ないしB類敷石を主体とするグループ（A1号～A5号横穴、B1号・B2号横穴、B3号・B4号横穴、B6号横穴の4つの小単位群）と、敷石の意識が弱いと思われるE類ないしD類敷石のグループ（B5号・B7号・B8号横穴、B9号～B11号横穴の2つの小単位群）に分けられそうである。

つぎに、敷石や横穴の平面形態から第22図に示したような木棺の位置を推定してみると、大きく2類型に大別された。

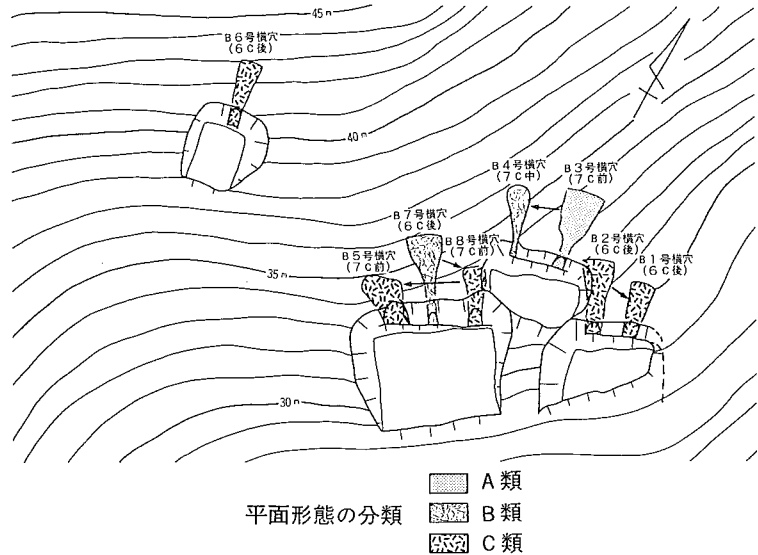
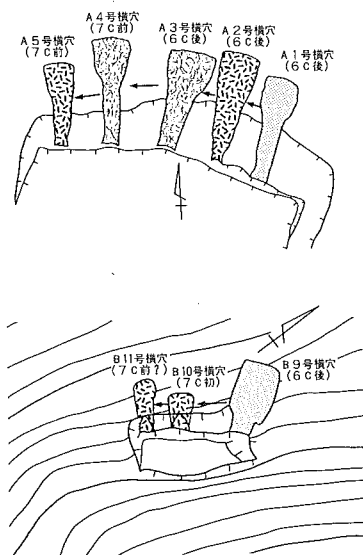
A類＝横穴の主軸方向に対して交差する位置になり、横置型ともいえるもの。A1号～A4号横穴、B2号・B3号・B7号・B9号横穴が該当した。

B類＝横穴の主軸方向に対して並行する位置になり、縦置型ともいえるもの。A5号横穴、B1号・B4号～B6号・B8号・B10号・B11号横穴が該当した。

A群ではほぼA類の横置型が一貫して採用されるが、最後のA5号横穴のみでB類の縦置型に変化するのである。ただし、A5号横穴の敷石の状況を見ると、当初の埋葬は横置型で追葬段階で縦置型になった可能性もある。反対に、初葬を横置型とすると棺の大きさは1.5mをきくと思われるため横置型にするについては無理がある。どちらにしろ、A群ではA類の横置型が重視されていたことがわかる。

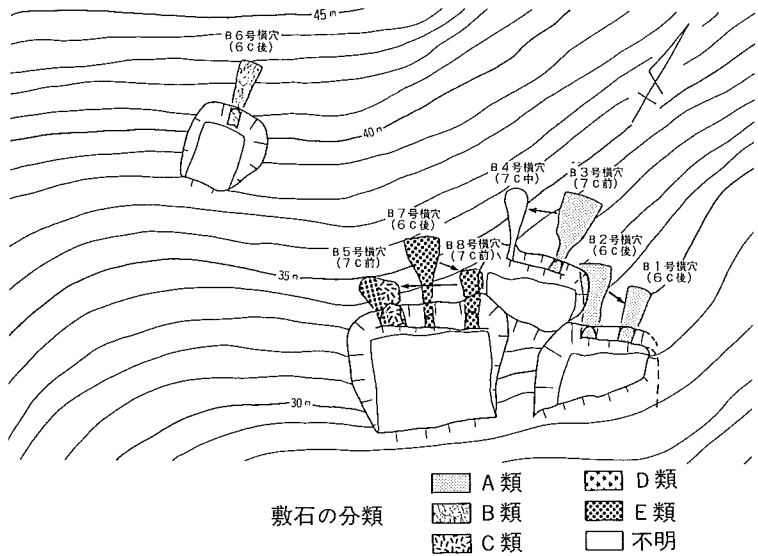
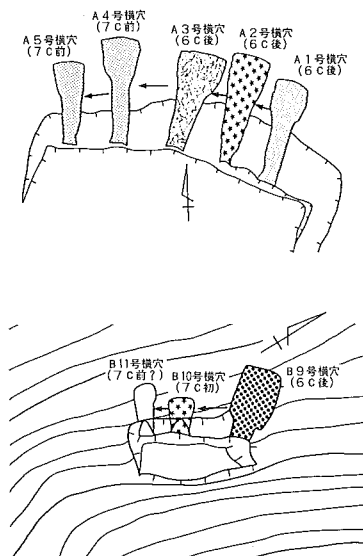
いっぽうB群については小形の部類に入るB6号横穴を除いて、各小単位群で最初に築造された横穴にA類の横置型が採用され、その後はB類の縦置型に統一されるようである。明らかにA群とは異なる傾向である。この2つの異なる傾向は、時期差と捉えることは先に示した小単位群の分析からできないため、各群の築造集団に原因があると思われる。

この点を解明するには、横置型・縦置型横穴の地域的な分布についての前田庄一氏の指摘が参考となる（前田庄一 1983）。前田庄一氏によると尖頭アーチ形の横長タイプ（横置型）の横穴は袋井市東部域から掛川市南部域に分布が集中していることから、掛川市南部から小笠郡下に分布しているドーム形横穴（横置型）との係わりを示唆している。たしかに、金山横穴群の位置は小笠群下に分布の中



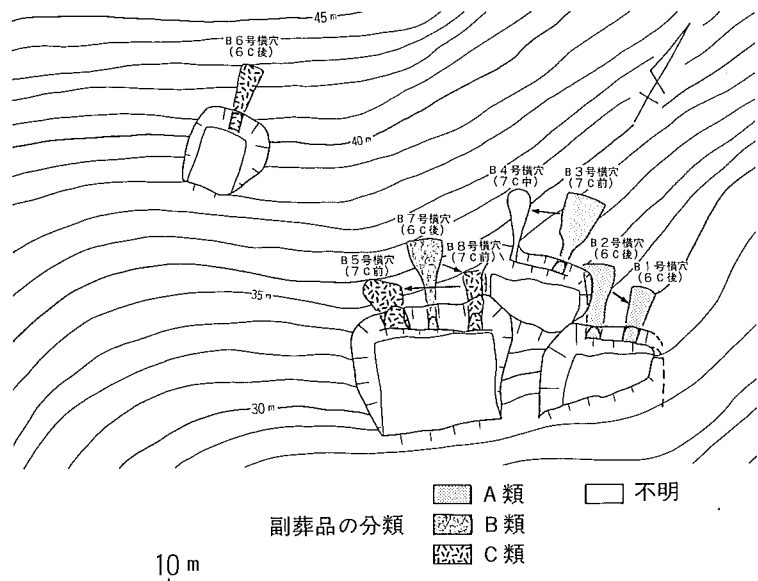
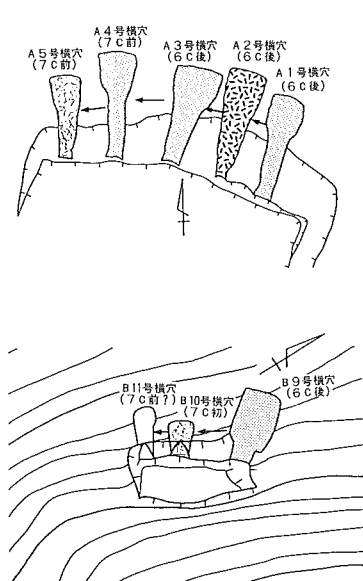
平面形態の分類

■	A類
■	B類
■	C類



敷石の分類

■	A類	■	D類
■	B類	■	E類
■	C類	□	不明

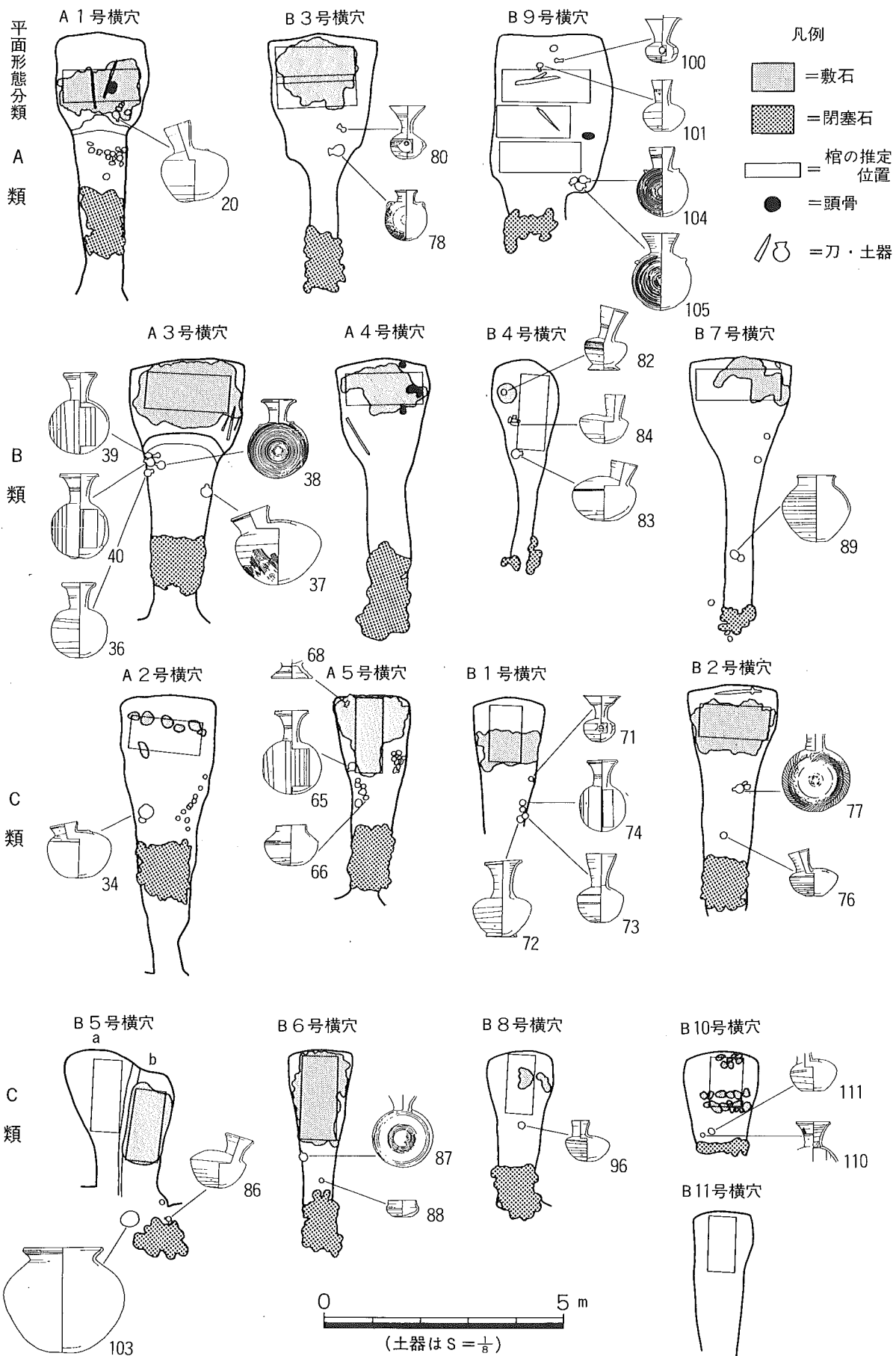


副葬品の分類

■	A類	□	不明
■	B類		
■	C類		

0 10 m

第22図 横穴の小単位ごとの副葬品・平面形態・敷石分類図



第23図 横穴内部の敷石・閉塞石・瓶類土器出土位置模式図

心を持つドーム形横穴との接点にあたり、宇刈横穴群など森町から袋井市・掛川市北部域に分布する尖頭アーチ形横穴との折衷形と見られなくもない。断面形態についても検討してみると、本来の袋井市域北部に分布する縦置型の尖頭アーチ形横穴と比べると天井の高さが玄室の幅に対して低いため、ドーム形横穴に近い形態をなしているともいえる。

ただし、縦置型の尖頭アーチ形横穴の中心地域でも、宇刈横穴群N群のように小単位群の当初に築造された82号横穴は横置型になると思われる正方形の玄室をもつものに対し、その後築造されたと思われる83号・84号横穴は縦置型の小形横穴に変化している小単位群が確認されている（袋井市教育委員会 1985）。すなわち、縦置型の尖頭アーチ形の横穴の中にも横置型の尖頭アーチ形横穴が存在していることから、金山横穴群の横置型の尖頭アーチ形横穴が横置型を基本とする小笠郡下のドーム形横穴の影響だけで成立したとは一概にいえない状況も存在する。とはいえ、今のところ縦置型の尖頭アーチ形横穴分布域内での横置型の横穴の確認例はそれ程多いものでもないため、金山横穴群の横置型の尖頭アーチ形横穴の成立は、小笠郡下のドーム形横穴との関係で考えたほうがより無難であろう。

以上の傾向が正しいならば、A群の横穴は従来の金山横穴群の特徴を良く残したのに対し、B群の横穴は7世紀代に入ると縦置型の尖頭アーチ形横穴の影響をより強く受けた結果、縦置型の中・小形横穴に変化してくるものと思われる。とするならば、A群の横穴築造集団は掛川市南部域の集団とより強い関係があり、反対にB群の横穴築造集団は7世紀代になると袋井市・掛川市北部域の集団との関係がでてきたといえるのではあるまいか。A群の立地が小笠沢川水系に連なる谷になるのに対し、B群は原野谷川水系に連なる谷に立地することからも、両者の違いがでてきた理由となろうか。ちなみに、金山横穴群の至近距離にある、原野谷川水系に連なる谷に立地した地藏ヶ谷横穴群についても縦置型と横置型の横穴が混在するらしく金山横穴B群と似た傾向が伺える。

つぎに閉塞石について検討してみたい。閉塞石は盗掘されて閉塞石が失われたと思われるB11号横穴と工事ために羨門部が削平されて閉塞石が失われたと思われるB1号横穴以外のすべての横穴から検出されていることから、基本的には礫を使う閉塞施設を採用していたと思われる。ただし、B5号横穴については追葬時に造り替えをしている状況があり、追葬時に前段階の横穴（B5b号横穴）の閉塞石を前庭部に掻き出しており、その後B5a号横穴段階に閉塞石を用いていない可能性が指摘できる。閉塞石の礫積みは横穴の主軸方向と並行するように正面から見てある程度小口積みにし、最終の石積みは乱れていることが多い。この積み石の乱れは追葬時における乱れと考えられることから、追葬時には閉塞石をすべてはずしたとは考えられない。おそらく、1/3ないし1/2程度はずした段階で追葬を行ったと考えられる。

最後に土器を始めとした副葬品の出土状態について検討してみたい。土器以外の副葬品の傾向を検討すると次の通りの傾向を読み取ることができた。

A類＝鉄製品のうち直刀の副葬が認められたもの。A1号（直刀2本・鉄鏃20本以上・刀子2本）・A3号（直刀3本・鉄鏃5本以上）・A4号（直刀1本・鉄鏃2本・刀子2本）・B1号（小刀1本・刀子1本）・B2号（直刀1本・鉄鏃2本・刀子3本）・B3号（直刀2本・鉄鏃2本・ガラス小玉・勾玉）・B9号（直刀2本・鉄鏃14本・刀子3本・耳環）横穴が該当する。

B類＝鉄製品の副葬があるが直刀がないもの。A5号（刀子1本・鉄鏃2本・耳環・ガラス小玉・勾玉・管玉）・B7号（刀子2本・鉄鏃2本・鉄鏃1本）・B10号（刀子2本・鉄鏃1本）横穴が該当する。

C類＝土器類のみの副葬しかないもの。A2号・B5号・B6号・B8号横穴が該当する。

不明＝盗掘にて副葬品の内容が不明なもの。B 4 号・B 11 号横穴が該当する。

ここで、直刀が副葬される横穴を有力な被葬者が葬られたと考える視点から、各小単位群について分析をしてみたい。まず A 群を見てみると、小単位群の最初に築造された A 1 号横穴が有力で次に築造される A 3 号・A 4 号横穴の段階でも数は少なくなるもののなお直刀が副葬され、その次の A 5 号横穴段階で直刀の副葬がなくなることが看取され、A 群については総じて有力な集団の小単位群であったことが理解される。

いっぽう B 群を見てみると、有力な小単位群は B 3 号・B 9 号横穴が A 群に匹敵するような状況であるが、直刀の副葬があるものの B 2 号横穴は直刀 1 本で、次に築造された B 1 号横穴では小刀が 1 本ある以外、B 7 号横穴と B 6 号の小単位群は直刀の副葬がない。また、有力と考えられる B 9 号横穴の小単位群にしても次に築造される B 10 号横穴は直刀の副葬がなくなる。

このように副葬品の在り方から見ると B 群を A 群と比較するならば、あまり有力でない小単位群を含み、しかも有力な小単位群も 7 世紀初頭という早い時期に直刀の副葬がなくなり没落が始まると理解される。これに対し A 群は比較的有力な勢力を 7 世紀前半ぐらいまで温存するが、A 5 号横穴築造時になると直刀の副葬がなくなり没落が始まる。

また、直刀が複数副葬される横穴は A 群で A 3 号横穴の 1 基、B 群では B 3 号横穴と B 9 号横穴の 2 基となることからみて、横穴群のなかでみると小支群単位ではなく単位群としたクラスのなかでの 1 つの有力な盟主が存在していたとも理解できる。

最後に須恵器を始めとした土器の出土状態について見てみたい。特徴的なのは、羨道部や玄室内部に比較的原位置を保っていると思われる、瓶類等の出土状態である。第 23 図に示した出土状況を見ると、A 群では A 2 号・A 3 号・A 4 号横穴、B 群では B 1 号～B 4 号・B 6 号・B 9 号・B 10 号横穴について、玄室袖部に提瓶・平瓶・フラスコ瓶・長頸瓶などがあたかもかたづけられたようにまとめられて置かれていた。また、A 1 号横穴の 20 の平瓶、A 3 号横穴の 36 の長頸壺、B 4 号横穴の 81～83 の長頸壺・平瓶、B 6 号横穴の 87 の提瓶、B 9 号横穴の 100 の甕、101 の長頸瓶などが木棺推定位置の近くから出土しており、これらの瓶類の本来の位置を暗示させられるものがある。すなわち玄室内における、葬送儀礼のなかでこれら瓶類の役割は木棺の近くで執り行われた儀式に関係したものと推察されるのであり、これら瓶類は追葬時あるいは儀式終了時に玄室袖部にかたづけられるものと考えられる。また、時期的な器種変化を見てみると 6 世紀後半では提瓶と甕、7 世紀前半代になると長頸瓶やフラスコ瓶・平瓶、8 世紀初頭では長頸瓶となる変化が見られるようである。

つぎに B 2 号横穴の 76 の平瓶、B 6 号横穴の 88 の埴、B 7 号横穴の 89 の広口壺、B 8 号横穴の 97 の平瓶などの羨道部中央に故意に置かれた瓶類や埴形の須恵器が注目される。これらの須恵器類は玄室内儀礼とは分離され、羨道内で執り行われた玄室と外界とを画する儀礼に関係したものとして注目される。今のところ A 群の横穴では確認できていないため、どの横穴でも行われた儀礼であったか検討を要するが、玄室袖部や B 5 号横穴の前庭部出土の 86 などの平瓶や 84 などの大形甕なども、こうした羨道内儀礼に関与したものと考えられるのである。

以上のほか、A 1 号横穴のように土師器の高杯が多数副葬される例、A 3 号・A 5 号横穴のように多数の埴類が副葬される例、また B 8 号横穴のように土師器の埴類が多数副葬される例など注目すべき点は多くあるが、これらの器種組成の問題点については第 5 章にて検討する。

第4章 遺物

第1節 須恵器・土師器

i) 須恵器

A 1号横穴 主体部内から21点の土器が出土しているが、このうち須恵器が3点（第24図20以外の2点は所在不明。調査当時の写真で見る限り1点は平瓶である。）、土師器が残りの18点を占めている。出土位置の明らかな第24図の20は全体に丸みを持った器形の平瓶である。体部上面には円形の粘土粒を貼付しており、口頸部は斜め上方に取り付き、単純口縁の端部へと至る。第24図の1の坏身は前庭部より出土しており、口径は8.8cmと比較的小型である。

A 2号横穴 坏身と坏蓋が大半を占め、大型の平瓶と短頸の脚台付の壺が1点ずつ伴う。坏身は口径8.6cm前後と小さく、器高も3cm前後と浅い。口縁端部の形状は、全体に内傾するたちあがり有し、中位からやや上方へつまみ上げている。大型平瓶の肩部のボタン状つまみは、二箇所にある。

A 3号横穴 前庭部出土の第26図39のフラスコ形瓶を除くと主体部内出土の土器は全部で6点である。（このうち所在不明の2点は調査時の写真で見る限り台付短頸壺と長頸壺である。）第26図38の提瓶は両肩に所謂ボタン状の耳が付されており、頸部の長さは6.6cmと比較的短い。第26図の39・40はフラスコ形瓶で胴部の形状は球形である。頸部の長さは39が7.8cm、40が8.4cmと若干長い。口縁端部は二段になるタイプ（第26図39）と単純口縁のタイプ（第26図38・40）の二者がある。第25図の36は壺であるが、全体のプロポーションはフラスコ形瓶を意識したかたちである点が注目される。

A 5号横穴 出土状態より横穴の奥壁から、開口部に向かって右側の一群（便宜的にa群と呼ぶ）と、左側の一群（b群と呼ぶ）に分けることが可能で、a群からは第27図の42・49・63・65・66・69がb群からは第27図の50・64が出土している。これらとは別に1点のみ奥壁隅から第27図の67・68の台付長頸壺が出土している。a群の坏蓋は扁平なつまみを付し、たちあがりも形骸化している。これに対し、b群の坏身は口径8.2cm前後と小型で、口縁端部のたちあがりも短く、内傾の度合いも大きい。第27図の65のフラスコ形瓶の頸部のは長さ8.6cmと細長く、口縁端部は単純口縁の形態である。

B 1号横穴 第28図の70の壺は胴部最大径が口縁部最大径より若干広く、張りを持った肩部を有している。胴部やや上方の位置に上方から下方に向かって穿孔がなされ、周辺部には指圧による凸部をつくっている。第28図の73のフラスコ形瓶は胴部がほぼ球形で、口縁端部は二重の段を形づくっており、頸部長は7.2cmと平均的である。

B 2号横穴 第28図の74の高坏は、脚部の径に対してより大きな坏部を有し、緩やかな弧を描きながら外反する坏部の形態を特徴とする。第28図の75の平瓶は肩部に明瞭な稜線を有するほどの張りを持ち、胴部全体の形状はやや扁平な感を受ける。

B 3号横穴 第29図の78は大型の提瓶で胴部はほぼ球形である。両肩には円形の把手が付く。頸部長は6cmと比較的短い。第29図の79の壺は肩部の張りが少なく、楕円形の胴部である。胴部の中央付近に上方から下方にかけて穿孔がなされ、孔の周辺部は上方に突出している。頸部は細長く、基部から口縁にかけては明瞭な段を有さず外反する。

B 5号横穴 第29図の85の平瓶は肩部が明瞭に張り、口縁端部が内側にカギの手状に内傾している特徴を有す。

B 9号横穴 第30図の100の壺は頸基部から口縁にかけて大きく外反して、頸部の上方では、一旦受けを有する。第30図の102の平瓶は全体に丸みを帯びた胴の形状で、底部は平底である。第31図の104・

105の提瓶は共にカギ状の把手を両肩に付している。頸部長は5.4～6 cmと比較的短い。

4号墳 第32図の117の高坏は、所謂短脚で一段の方形のスカシを三方向に有している。坏部のやや下方には一条の波状文を施している。

9号墳 第32図の123・124の坏蓋は外面に天井部と口縁部の境に明瞭な稜を有している。123は天井部が非常に平らな形状を呈し、124は稜から口縁端部にかけてはハの字状に外反することを特徴とする。第32図の118・119の坏身は共に口径に比して器高が低く、扁平な感を受ける。118の口縁端部は内傾する稜を持ちながら上方へと真っすぐたちあがる。

ii) 土師器

A 1号横穴 出土状態によって横穴中央部の一群（a群）と羨道部側の一群（b群）に分けることができる。a群は第24図の4・6・10・14・17・20、b群は第24図の2・3・5・7・9・11・12・13・15・16・18・19である。これを更に器形から分類すると、やや深く球形に近い坏部に短い脚の付く1類（16・17）。坏部と脚との接合部が太く、坏部口径幅と同程度の脚の付く2類（12・13）。脚部径が坏口径より若干小さく、比較的高い脚部を有する3類（15・19）。坏部に比して脚部径が小さいが、1類と比べて脚部が高く坏部口縁端に強いヨコナデを有する4類（14・18）に大別できる。しかし、各分類がa・b両群内に混在する状況からすれば、同一時期の一括資料の可能性が高い。

A 2号横穴 土師器は2点出土しており（内1点は所在不明）、先のA 1号横穴出土の3類（第24図の15～19）と形態的には近似する。坏部外面には斜方向から横方向へのハケメを、脚部外面には縦方向へハケメを施している。

A 5号横穴 第27図の68は坏と言うよりはむしろ碗で、球形に近い器形は底部から口縁部へと、弧状を呈している。底部から胴部にかけては不正方向のハケ調整が見られ、口縁端部付近はヨコナデを行っている。

B 5号横穴 第29図84の高坏は脚部に比して坏部が非常に大きく、先のA 1号横穴で触れた4類に近い形状を呈する。

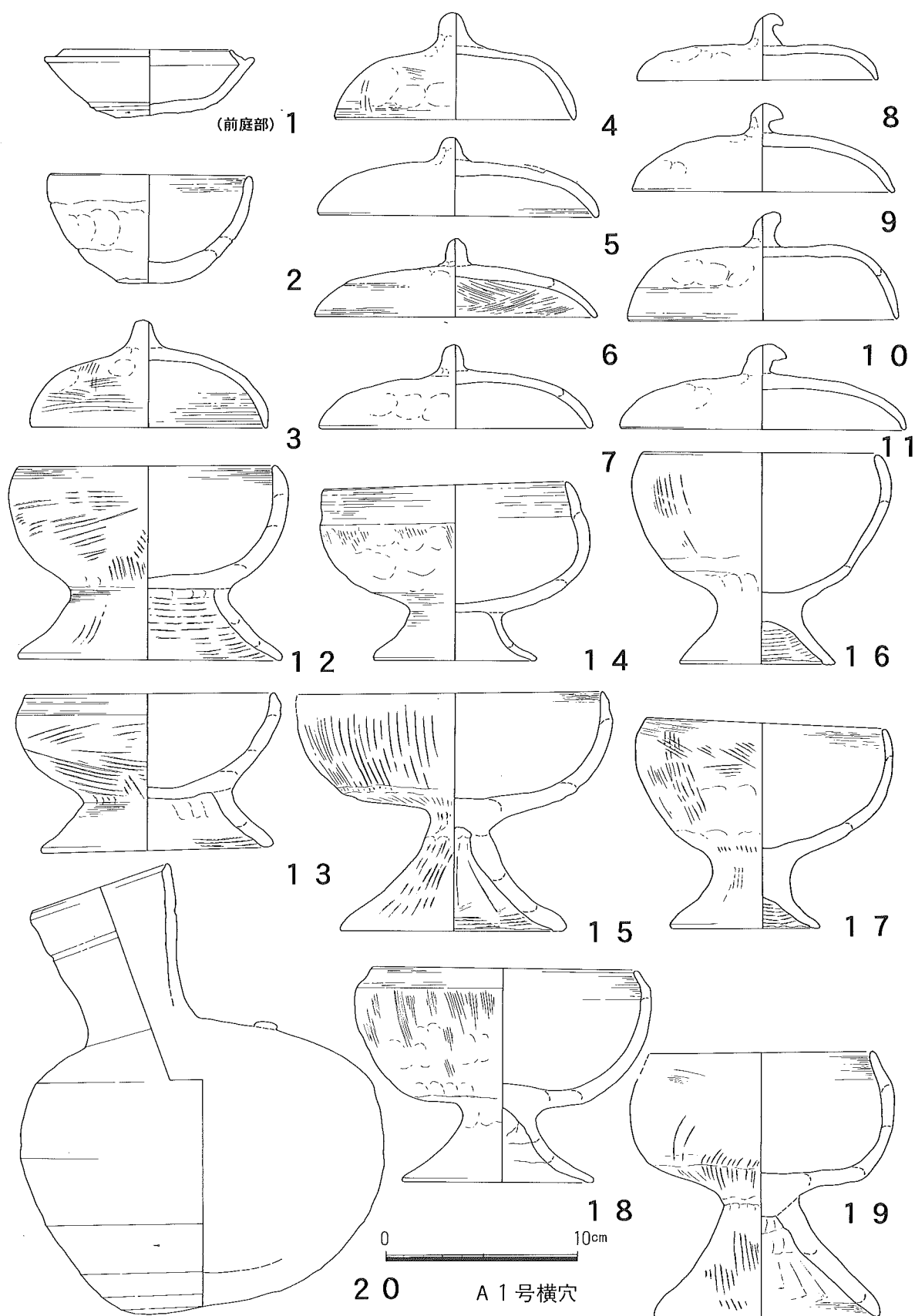
B 9号横穴 碗状を呈する第30図の94・95と浅い坏部を有する90～93に分けることができる。外面を中心に指頭圧痕が認められ、粘土とモによって数段に積上げて成形された様子が観察できる。

10号墳 第32図の127・128は坏蓋で127の天井部には指頭圧痕が残る。127・128両者ともに口縁部付近をヨコナデ調整している。

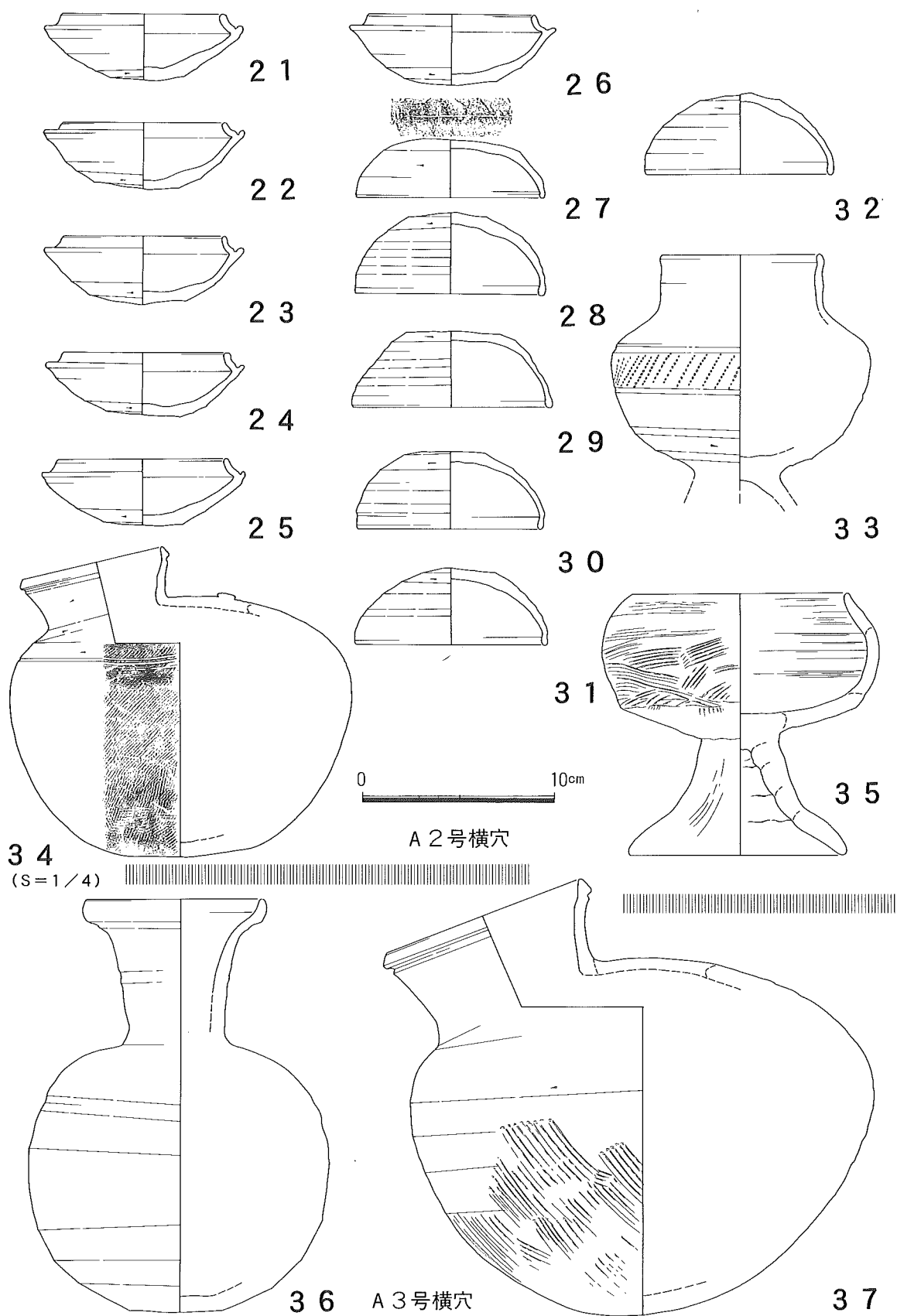
以上、出土土器を須恵器と土師器に分けて、特徴的なものについて概略を述べた。最後にこれらの観察から導き出される土器の年代観について概念図を示しまとめとする。

6世紀前葉								
中葉							B 9古	2. 3. 4. 9号墳
後葉	A 1→A 2→A 3古		B 2古→B 1古		B 7古	B 6	B 10	(10号墳)
7世紀前葉		A 4→A 5古	B 2新	B 3	B 8→B 5		B 9新	
中葉	A 3新	A 5新	B 1新	B 4				
後葉								
8世紀前葉					B 7新			

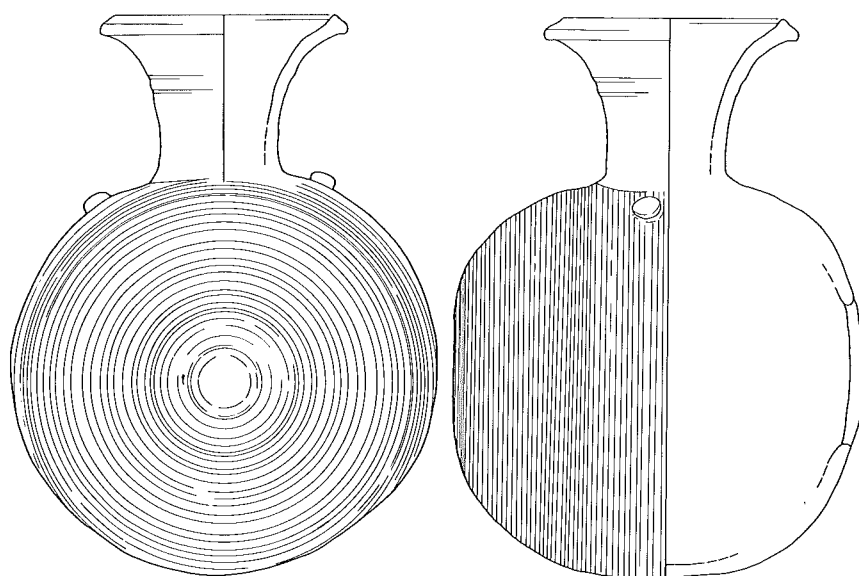
(※ 矢印は築造順序を表す。但し、土器からだけではなく他の要素も加味している。)



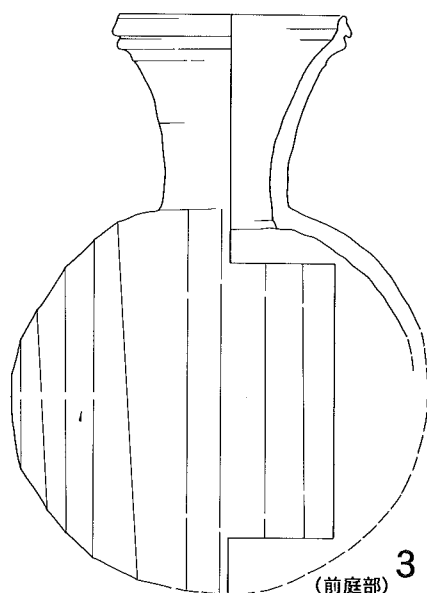
第24図 須恵器・土師器実測図 (1)



第25図 須恵器・土師器実測図 (2)



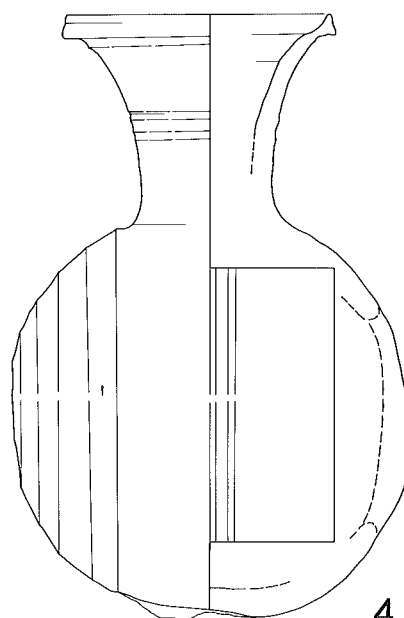
38



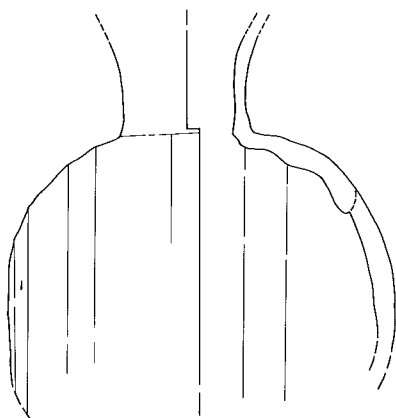
A 3号横穴

39

(前庭部)



40



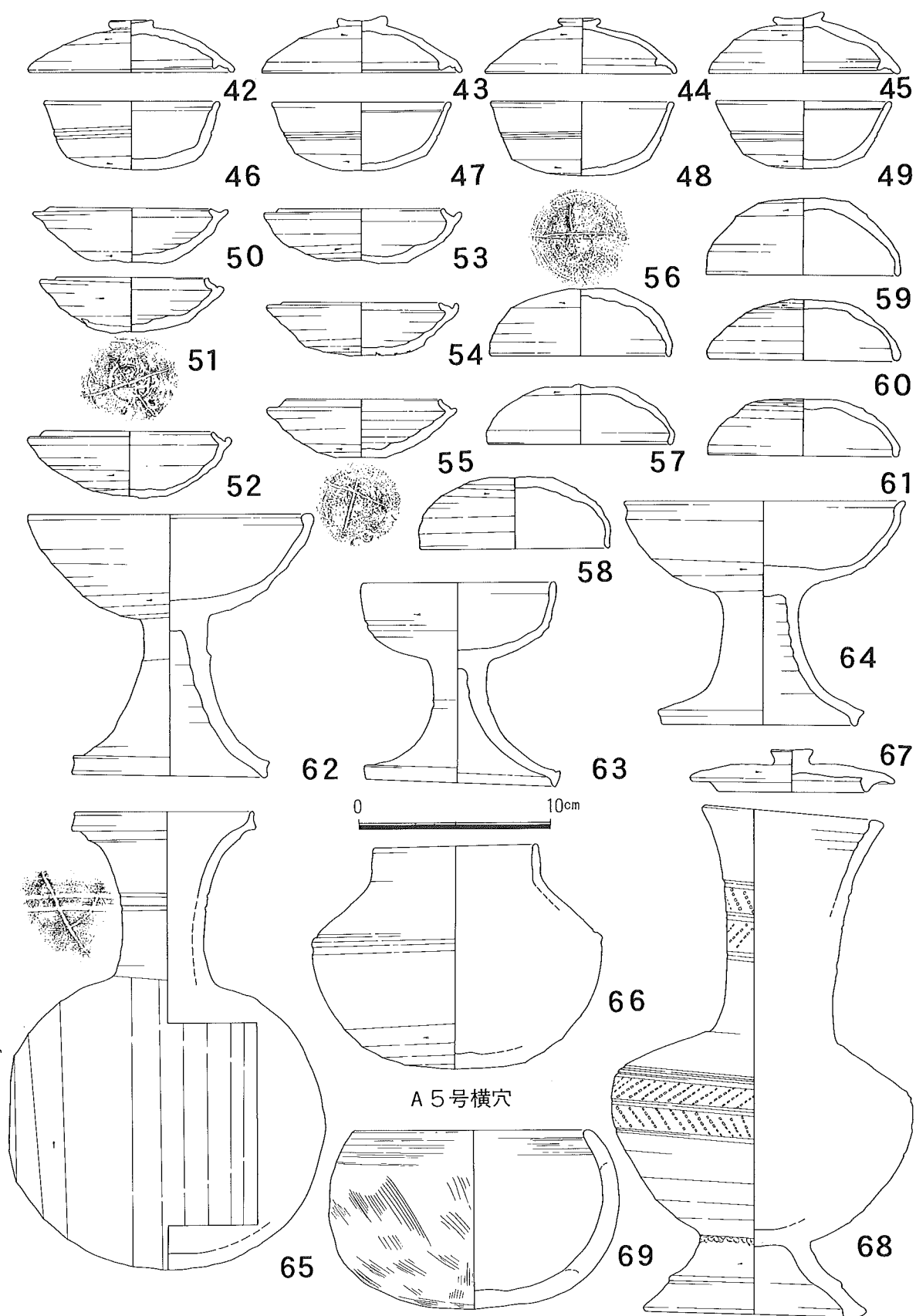
41

A 4号横穴

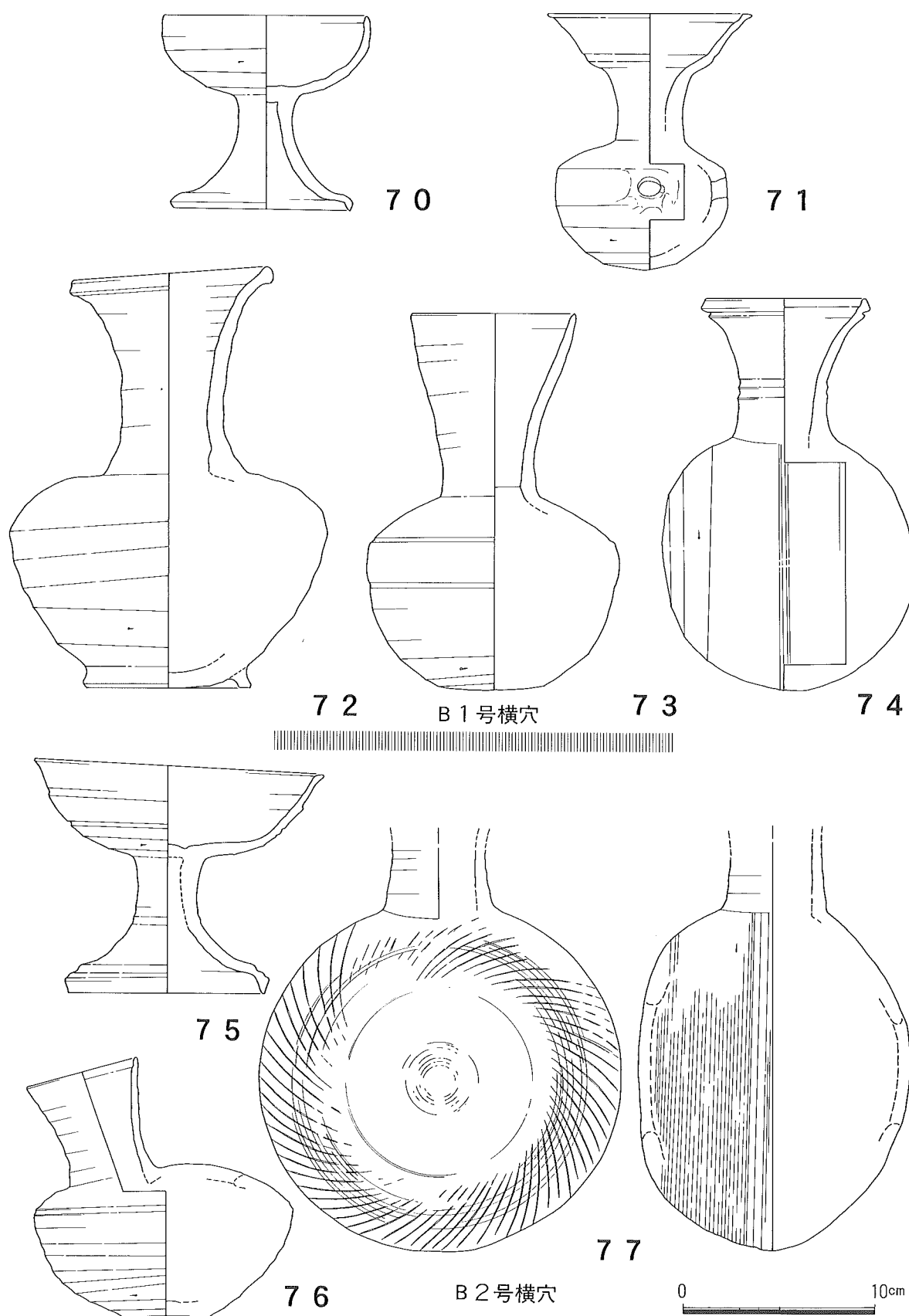
(閉塞・前庭部)

0 10cm

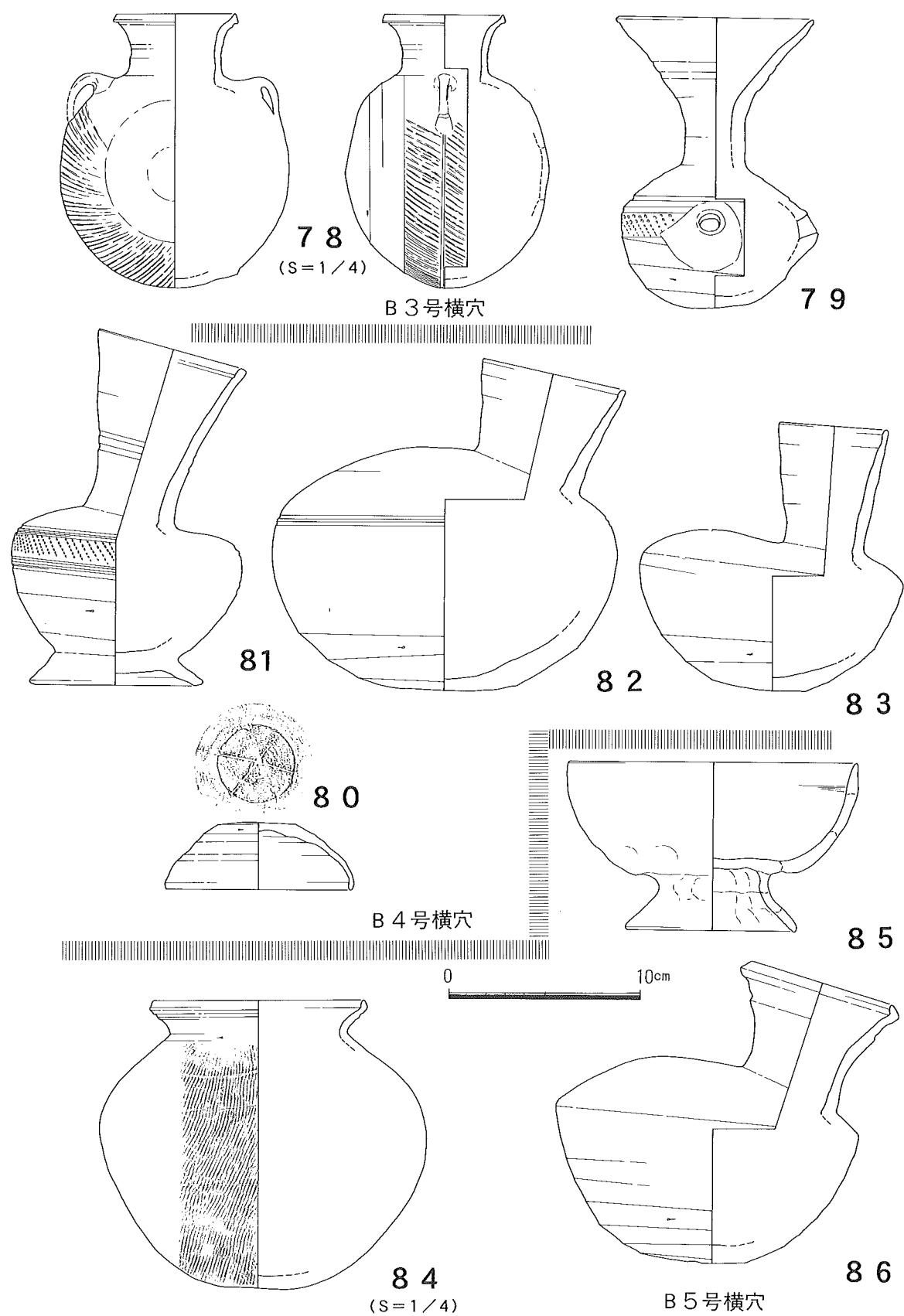
第26図 須恵器・土師器実測図 (3)



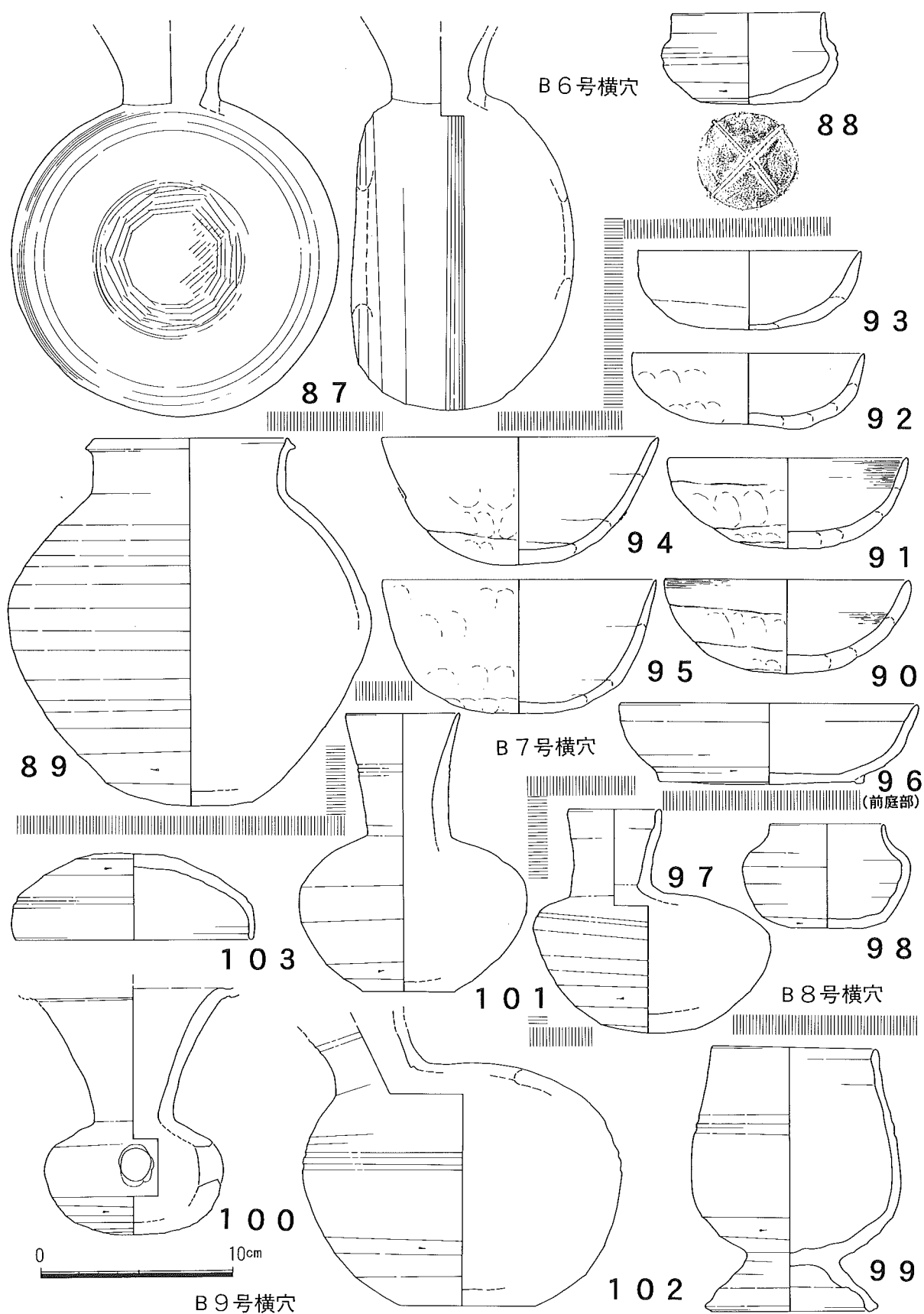
第27図 須恵器・土師器実測図 (4)



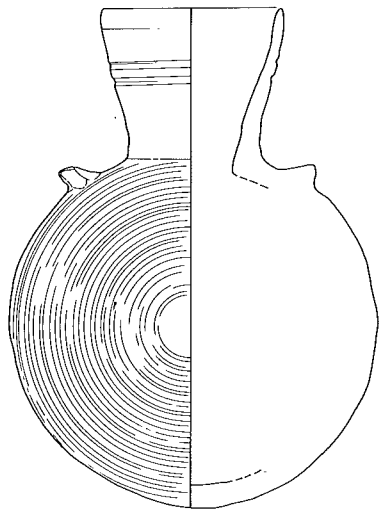
第28図 須恵器・土師器実測図 (5)



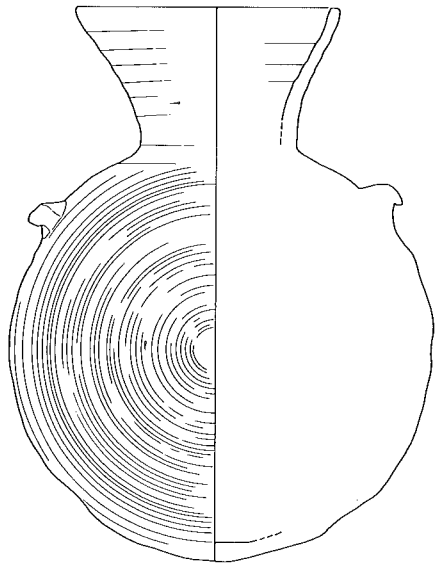
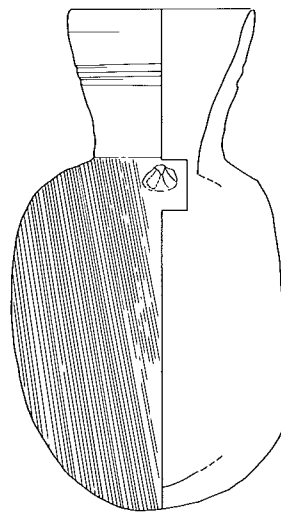
第29図 須恵器・土師器実測図 (6)



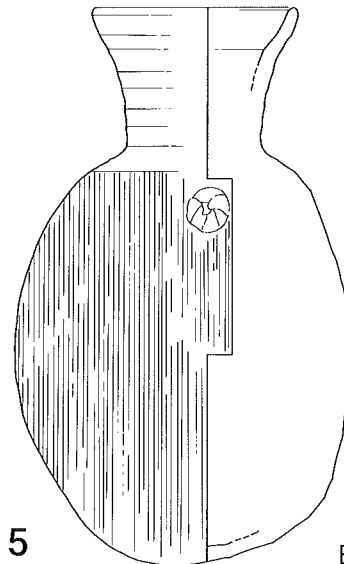
第30図 須恵器・土師器実測図 (7)



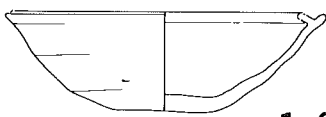
104



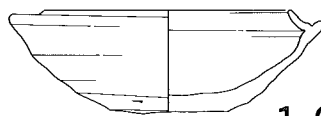
105



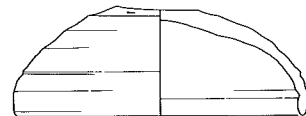
B9号横穴



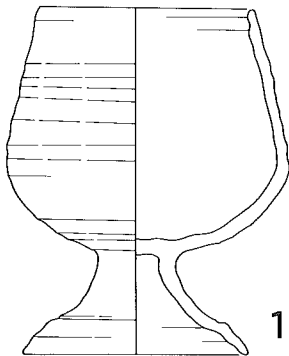
106



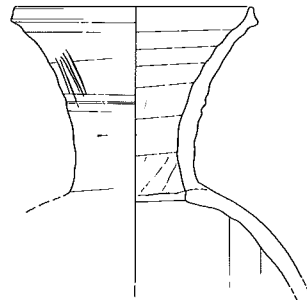
107



108

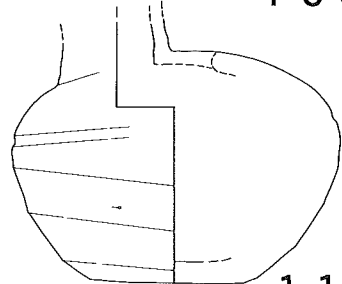


109



110

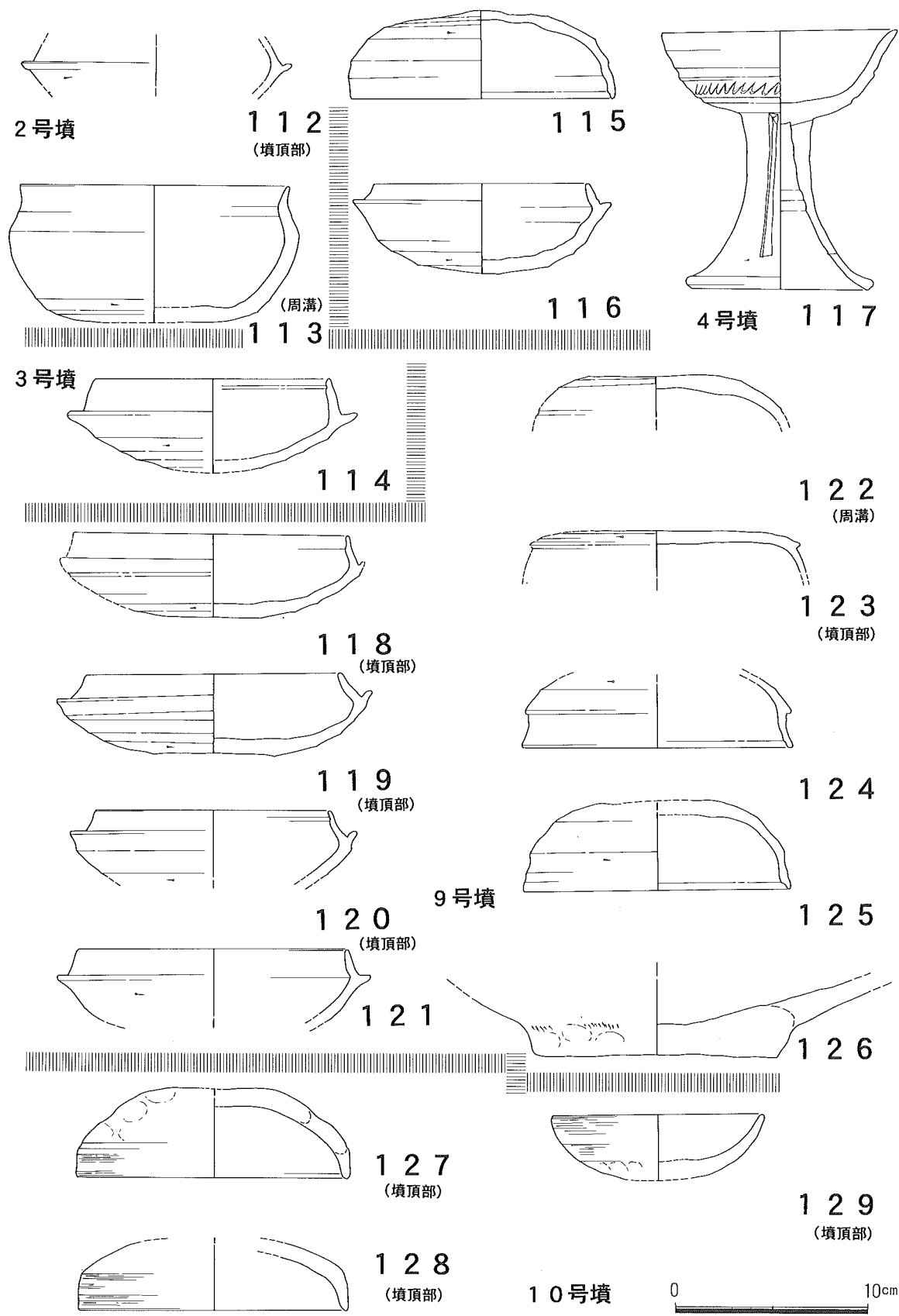
B10号横穴



111

0 10cm

第31図 須恵器・土師器実測図 (8)



第32図 須恵器・土師器実測図 (9)

第2節 鉄製品・装身具

鉄製品は6世紀前～中頃の木棺直葬の古墳群と、6世紀後半～7世紀前半になる横穴群のいずれからも出土している。本報告書では一括して報告し検討することとしたい。

i) 馬具 (第33図1・第34図1)

4号墳から鉄製素環鏡板付轡と鉄製の杏葉が出土している。辻金具や雲珠は出土していないため、すべての組み合わせは充足していないものと思われる。

轡は、径9cmの大形の素環の鏡板が付けられ、立間に付けられる金具については接合痕も含めて良く観察できなかった。おそらく金属性のものではなく、皮等の有機質のものが直接面繫のベルトに付くタイプのものと思われる。引手金具には丸い横長の引手壺が付けられている。

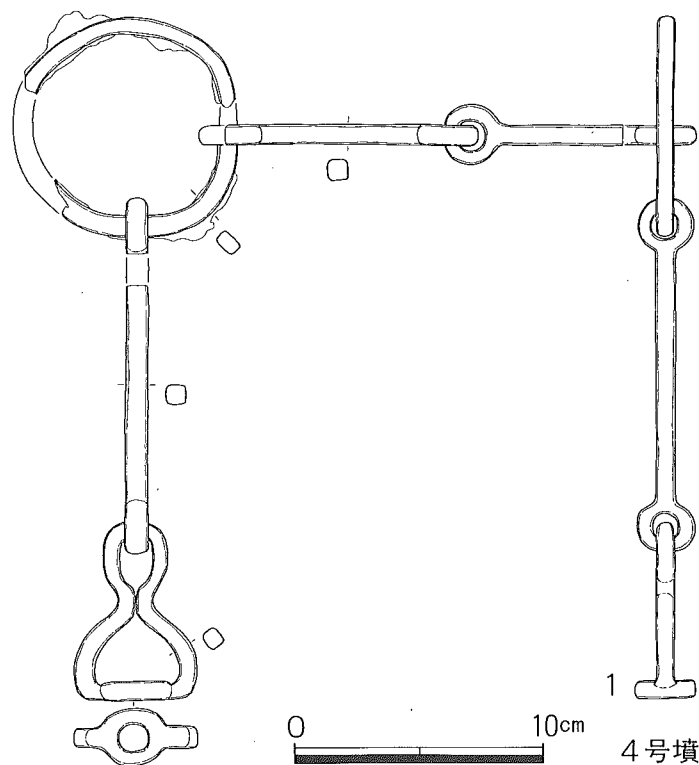
杏葉は出土状態を検討すると割られて出土しているらしく、全体の形はわからないが残存部分から見て剣菱形の杏葉と見て間違いのないものと思われる。なお、鉄板の裏側より打ち出しにより形式的な鋳の表現がなされており、このタイプの鉄製剣菱形杏葉は現在日本で知りうるかぎり類例はない。僅かに袋井市雲座D古墳群1号墳から出土している鉄製楕円鏡板付轡の鏡板に付けられた表現と同じものである(第40図参照)ため、本来この馬具との組み合わせであったものと考えられる。

馬具については古墳に伴い出土した須恵器と雲座D群1号墳の馬具の年代から、6世紀前～中頃の時期と考えられる。

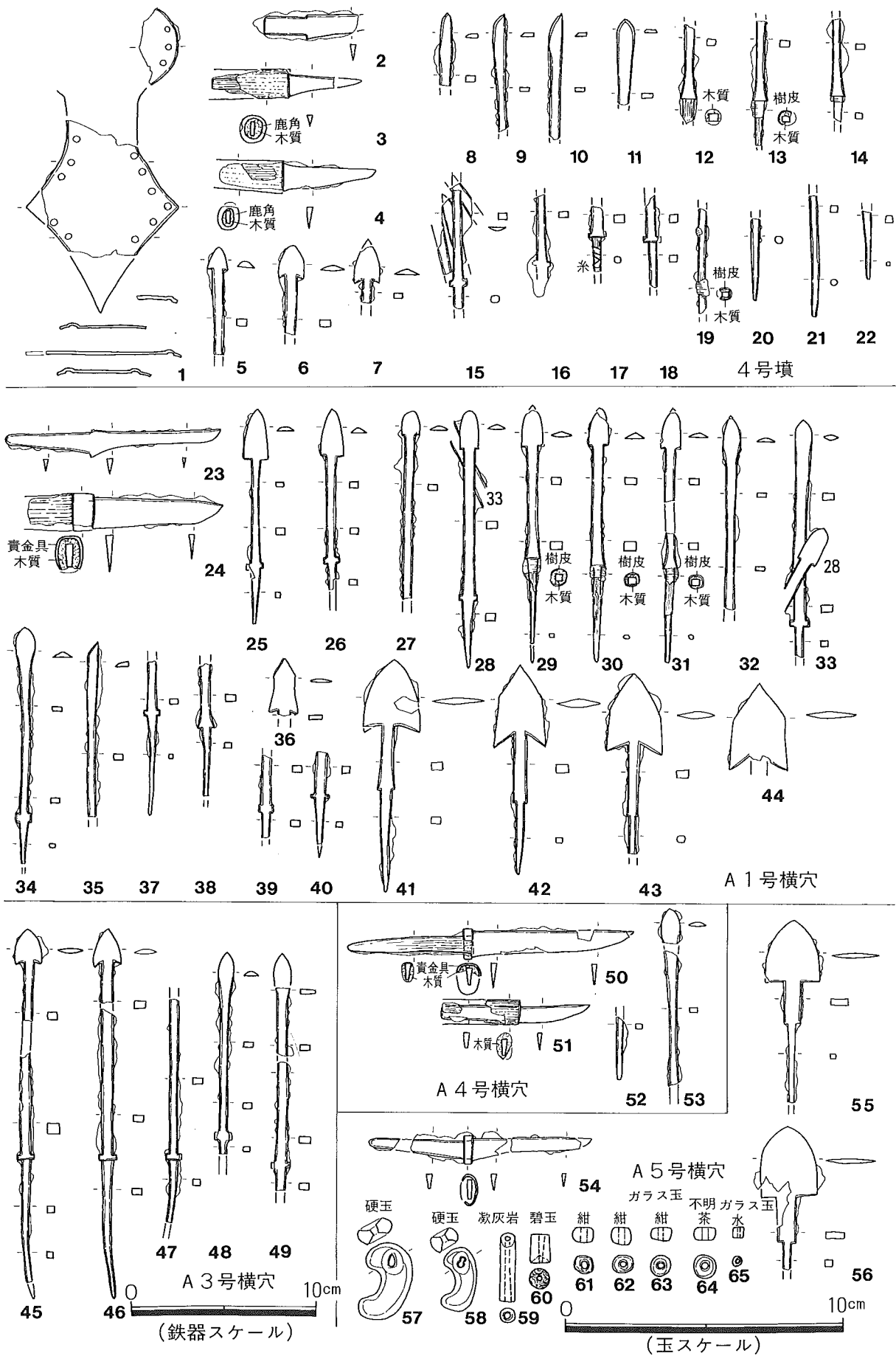
ii) 直刀 (第35図～第36図)

古墳・横穴群ともに出土している。

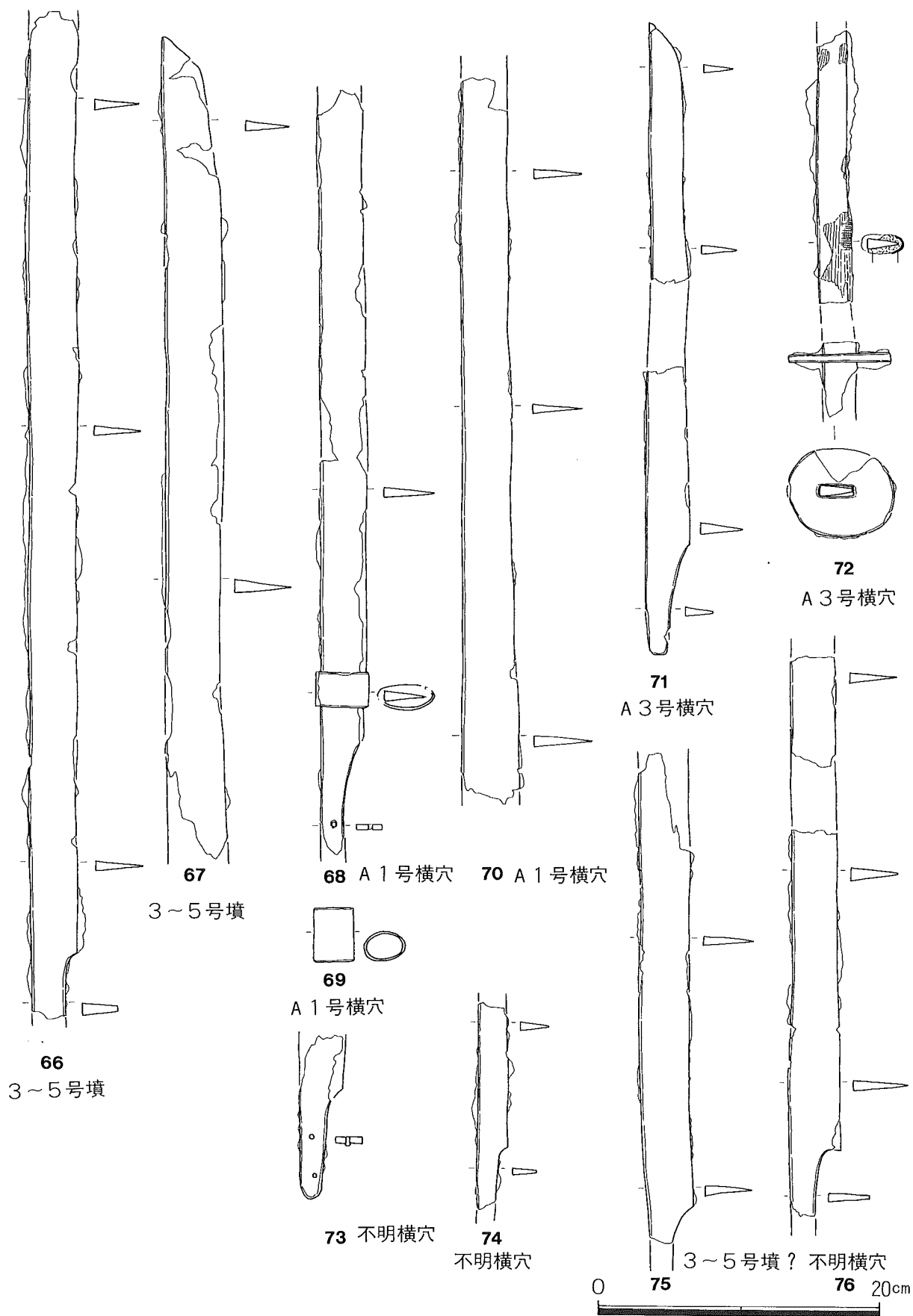
関の造りで2つに分類できた。すなわちA類=片関造りの66・68・71・72・74～76・129・131・132と、B類=両関造りの128・134・135、不明なもの67・70・73である。このうち全長40cmに満たない小形の直刀としては71・74・128がある。



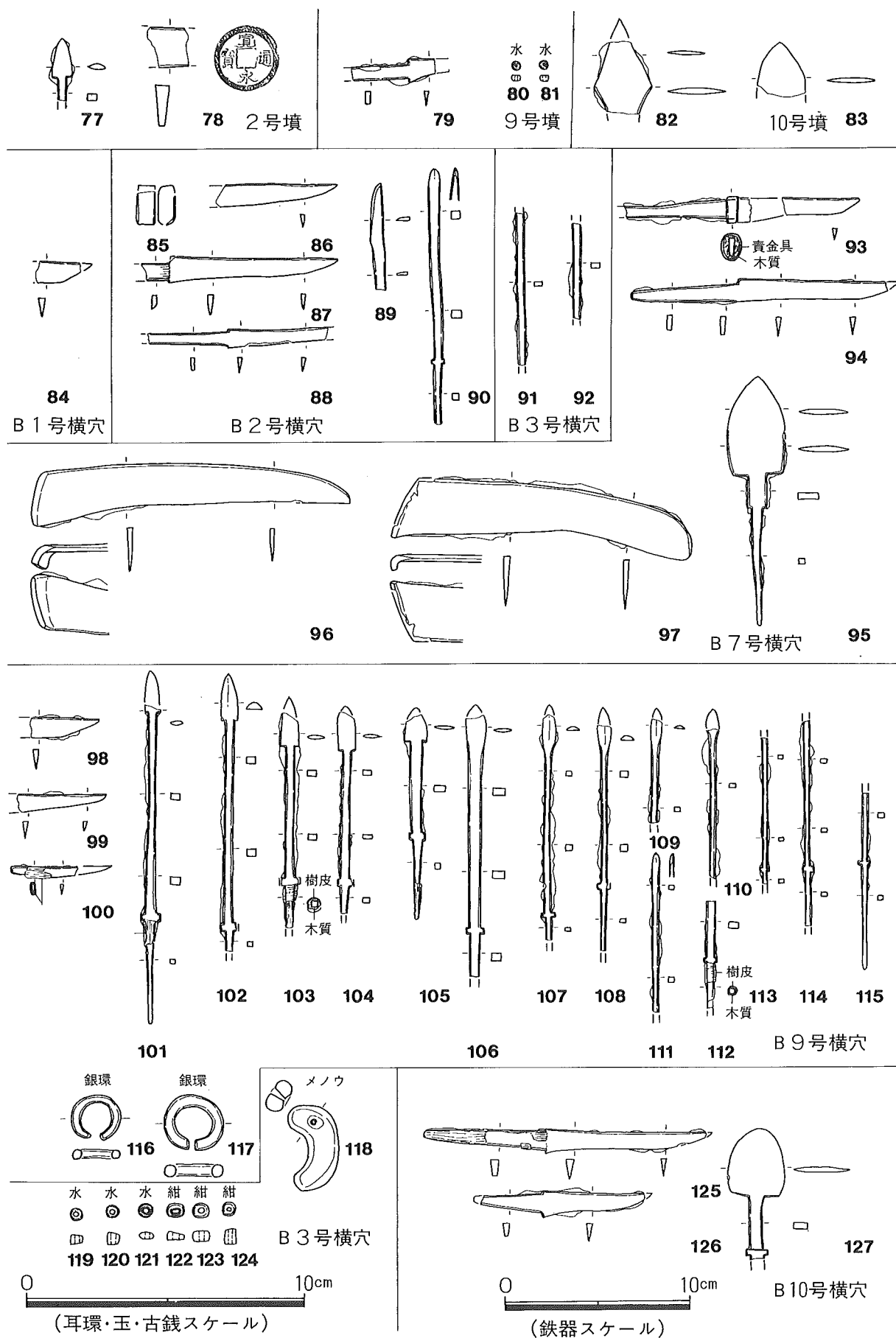
第33図 鉄製品実測図 (1)



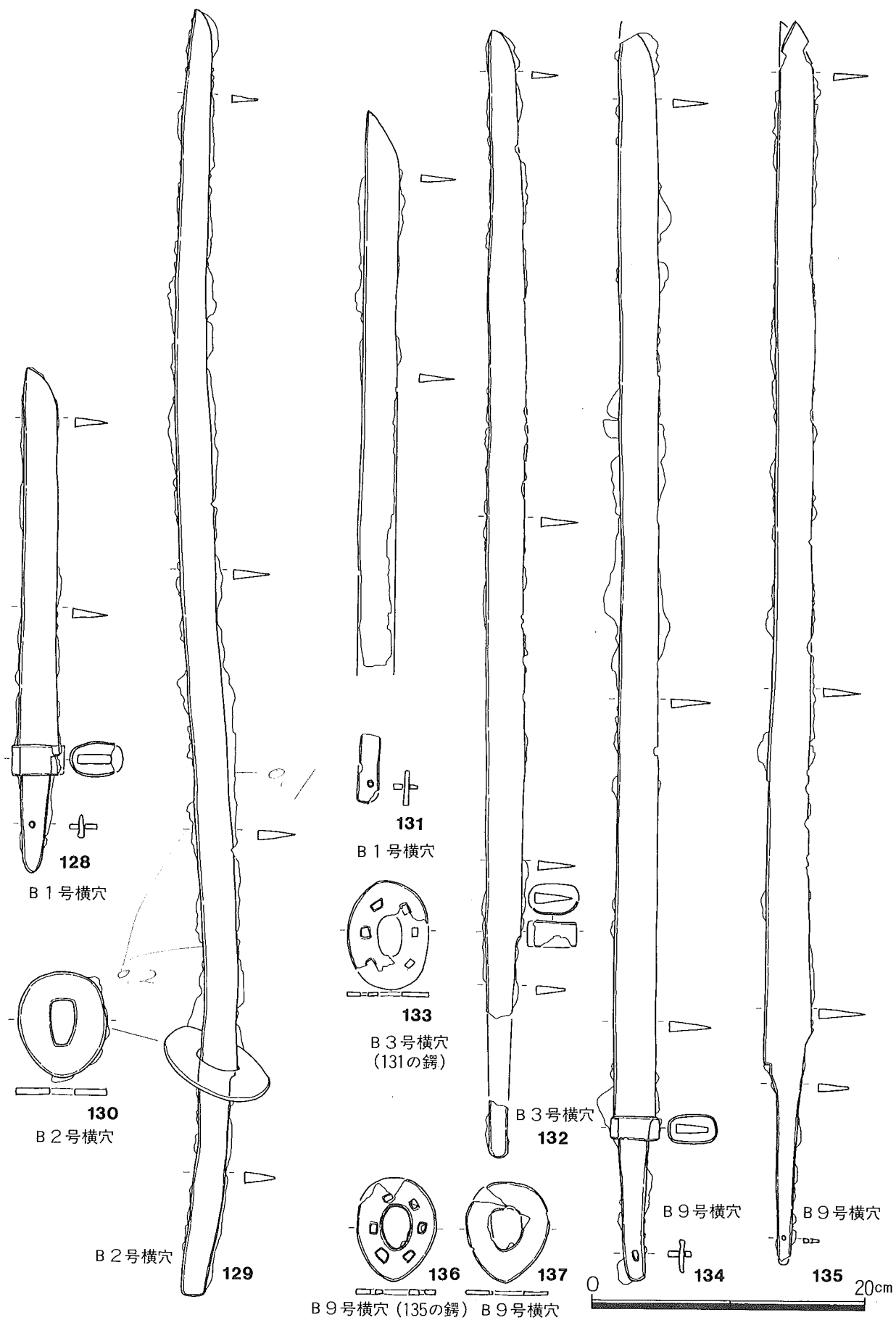
第34図 鉄製品実測図 (2)



第35図 鉄製品実測図 (3)



第36図 鉄製品実測図 (4)



第37図 鉄製品実測図 (5)

刀装具のあるものは鐔が伴う72・128・131・131と、柄の貴金具の伴う68・128・132・134、鞘尻金具が伴う68などがある。

古墳と横穴から出土した直刀の形態差はほとんど見られないが、幅が横穴のものは3 cm前後を計り細身のものが多いのに対し古墳出土のものは幅4 cm前後を計り太身となる感じがする。また、横穴では鐔や柄の貴金具など多様な刀装具が見られるが、古墳出土のものは金属製の刀装具が見られない。

iii) 鉄鏃 (第34図・第36図)

平根式のものと尖根式のものの2種類に大別される。

平根式のものは箆被部が四角に収まる41～44・55・56・95と、棘箆被となる127とがある。関部の造りは逆刺となる41～44、逆刺とはならない55・56・95・127がある。いずれも横穴出土のもので、95が6世紀後葉になる可能性がある以外は、何れも7世紀前半に属するものと思われる。古墳出土のものについて6世紀中頃になるとと思われるものに82・83があるが、全体の形態はわからない。

尖根式のものは箆被部が台形となる12～14・29～31・38と、棘箆被となる15～18・25・26・33～34・39・40・45～49・90・101～108・112～115がある。関部や刃部の形態は逆刺になる5～7・45・46、逆刺とはならない25～31・77・101～105、逆刺のない11・32～34・48・49・53・90・106～110、片刃になる8～10・35・89がある。頸部は長いもので10 cmになるものもあるが、8～6 cm程度のものが多い。また、107～115は非常に細身の形態をなした一群で、はたして実用品であるかどうか検討を要するであろう。4号墳出土の尖根式鉄鏃は供伴須恵器から6世紀前～中頃となると考えられる。しかしながら、4号墳の尖根式鉄鏃の形態は横穴出土のものとはほとんど変わらない。また、A1号横穴出土の尖根式鉄鏃のなかにも箆被部が台形になるものが含まれており、他の横穴の尖根式鉄鏃と異質なものを感じられる。推測ではあるがそれぞれ資料整理・保管段階で混入した可能性が高いと思われ、8～11はA1号横穴出土、29～31は4号墳出土のものであると考えられる。ただし15～18については台形のものとは錯着しているものもあるため、6世紀前～中頃に棘箆被が存在していた可能性も否定しきれない。横穴出土の尖根式の鉄鏃は棘箆被になるものがほとんどで、ほぼ7世紀初頭～前葉の時期に該当し、一部6世紀後半に遡るものがあると思われる。

iv) 刀子 (第34図・第36図)

刀子も関のつきかたで、A類＝両関造りになる2～4・23・24・50・79・87・88・94・125・126と、B類＝片関造りの51・54・93・100にわけられた。B類には51・100に見られるように小形品がある。刀装具としては柄金具として鉄製の貴金具が、24・50・86・93で確認された。3・4の柄は鹿角が使用されていたが、その外については木装であると思われる。

v) 鉄鎌 (第36図96・97)

B7号横穴から2点出土している。長さ16～17 cm・幅2～3 cmの中形の鉄鎌である。刃部形態は直刃の両刃であり、柄と刃部の角度は96で105°、97で110°を計り、6世紀後半の時期に該当するものと思われる。

vi) 耳環・玉類 (第36図116・117 第34図57～65・第36図118～119)

B9号横穴から2点出土しており、何れも銀装の耳環である。116は直径1.7 cm、117は直径2 cmを計り、117のほうがやや大形の製品である。6世紀後半～7世紀前半の時期になるとと思われる。

玉類としては9号墳でガラス小玉、A5号横穴で勾玉・管玉・ガラス丸玉と小玉、B3号横穴で勾玉・ガラス小玉が出土している。57・58の勾玉はまず浅く大きく穿孔し、つぎに小さな穴を穿つ特徴的な穿孔方法でつくられている。59は細身の管玉で後期古墳である横穴出土のものとしては珍しい。

(※ 第2章～第3章の参考文献については第5章第1節を参考のこと)

第5章 考 察

第1節 原野谷川中流域における初期群集墳の終末と後期群集墳（横穴群）の成立について

i) はじめに

今回報告し得た金山古墳群及び金山横穴群は、古墳時代後期を特徴づける群集墳と横穴群の成立および初期群集墳の終末を考えるうえで、興味深い資料を提供し得たと思われる。そのうえ本古墳群の周辺部地域での初期群集墳や後期群集墳および横穴群の在り方は、大門大塚古墳等の地域首長墓の存在を考え合わせると、更に奥行の深い歴史的展開を垣間見せている。本節では、まず金山古墳周辺部での初期群集墳の動向及び首長墓との関係を検討した後、さらに当地域における後期群集墳および横穴群の成立の過程を考察してみたい。

ii) 初期群集墳の重層構造について

金山古墳群周辺での初期群集墳の成立状況は、すでに5世紀後半に成立するもの（初期群集墳Bタイプ）と、6世紀前半～中頃に成立するもの（初期群集墳Cタイプ）に分けられることを明らかにしておいた（松井一明 1994）。本考察ではさらに首長墓との関係や、当地域的においてさらに細かな初期群集墳の動向について検討してみたい。

さてまず、以前検討した初期群集墳の基準を示しておきたい。

初期群集墳の類型化（松井一明 1994）

A類 4世紀後半に造墓の中心があり、5世紀初頭に造墓が停止するものをA-1類とした。遠江では未発見、駿河では南新屋古墳群が該当する。4世紀後半に造墓が始まり、5世紀前半に造墓の中心があり、5世紀末に造墓を停止するものをA-2類とした。遠江では未発見、駿河では藤枝市若王子古墳群・女ヶ池古墳群・東浦古墳群等が該当する。A-1・2類の初期群集墳については古墳個々には鉄製品や鏡等が比較的多く、古墳間に階層差が見られるものが出現する。古墳の群構成はかなりの密集形を呈し、一見弥生時代以来の墳墓の群構成をなしているようにも見えるが、副葬品が階層差を示す単位群も見て取れることから、初期群集墳として位置付けてみた。目下のところA類の初期群集墳は、金山古墳周辺域及び遠江全域を見ても確認されていない。

B類 5世紀中頃に造墓が始まり、5世紀後半に造墓の中心があり、6世紀初頭に造墓を停止するものをB-1類とした。遠江では浜北市神明社上古墳群、掛川市高代山古墳群、駿河では確実な例は未発見であるが静岡市川合遺跡の低墳丘墓が該当する可能性がある。5世紀後半に造墓の中心があり、6世紀中頃に造墓を停止するものをB-2類とした。遠江では掛川市水垂二ツ岩古墳群、袋井市愛野向山B古墳群・若作古墳群・東山古墳群、磐田市後山古墳群、駿河では静岡市上ノ山古墳群が該当する。B-1・2類の初期群集墳についてはA類同様に古墳個々には鉄製品や鏡等が比較的多く、古墳間に階層差が見られるものが出現している。古墳群としての群構成もA類同様にかなりの密集形を呈するがやや分散化してきており、さらに副葬品を検討すると2～3基の単位群を見て取れるので、初期群集墳として位置付けた。遠江では新屋原古墳群など磐田原に集中する傾向、金山古墳周辺域では愛野向山古墳群B群B地区など原野谷川水系の古墳群が該当する。

C類 6世紀前半から造墓が始まり、6世紀中頃に造墓の中心があり、6世紀後半に造墓を停止するものをC類とした。遠江では今回報告する金山古墳群を始め袋井市雲座D古墳群、地藏ヶ谷古墳群、駿河では確実な例は未発見である。C類の初期群集墳についてはB類に引き続き古墳個々には鉄製品

や馬具等が比較的多く見られ、古墳間に階層差が見られるものが出現する。古墳群の群構成は分散傾向がさらに進み、2～3基の単位群を明らかに形成していることがわかる。

つぎに、当地域における首長墓の動向について見てみたい。5世紀後半代の首長墓と考えられる古墳としては狐塚古墳あるいは高尾向山6号墳などがあげられる。狐塚古墳は1974年に前方部の発掘調査が実施され、後円部がすでに原野谷川の侵食で失われていたものの全長40mクラスの前方後円墳になると予測された（袋井市教育委員会 1993）。前方部の調査からTK208～TK47段階の須恵器が出土しているが、明確な周溝からの出土ではないため今一つ年代決定できていない。ここでは出土須恵器の年代観を尊重して5世紀後半～末の築造時期と推定しておきたい。

高尾向山6号墳は地形測量すら行われていないため詳細はよくわからない古墳ではあるが、目測では全長40m近くになる付近に古墳群を伴わない単独の前方後円墳であることが判明している（袋井市教育委員会 1993）。該当時期は狐塚古墳の前後で大門大塚古墳より以前の5世紀後半～6世紀初頭の時期に位置付けうる首長墓と考えられている。

さて5世紀後半に成立する初期群集墳の調査として、原野谷川水系に属する愛野向山B古墳群（松井一明 1994）と若作古墳群（袋井市教育委員会 1990）があげられる。愛野向山B古墳群では鏡や武器（直刀）等が副葬されたB27号墳（TK208段階）と、鏡・三環鈴や鉄製楕円鏡板付轡・鉄製剣菱形杏葉？・木芯鉄板張輪鍔・辻金具等の馬具、直刀、鉄鏃、玉類等が副葬されたB12号墳（TK23～47段階）が盟主墳クラスの古墳で、それ以外だと、直刀や剣の副葬があったB29号墳・B30号墳・B32号墳、鉄鏃や刀子などの少量の鉄製品しか副葬品の無いものB20号墳・B21号墳・B22号墳などがある。すなわち、副葬品を見る限り3つのクラスに分けられそうな状況が見て取れる。

若作古墳群では愛野向山B古墳群で見られた鏡と武器を副葬する古墳は見られなかった。小形の直刀を副葬したC3号墳、鉄鏃・刀子や玉類等の僅かな副葬品をもつものB9号墳・B7号墳・D2号墳・B4号墳・C1号墳・C5号墳以外は、副葬品をもたない古墳が12基も存在している。愛野向山B古墳群と比較するならば鏡や武器を副葬する明らかに盟主墳として位置付けられる古墳はなく、次のクラスである直刀・剣を副葬する古墳も僅か1基でしかも小形の直刀であった。

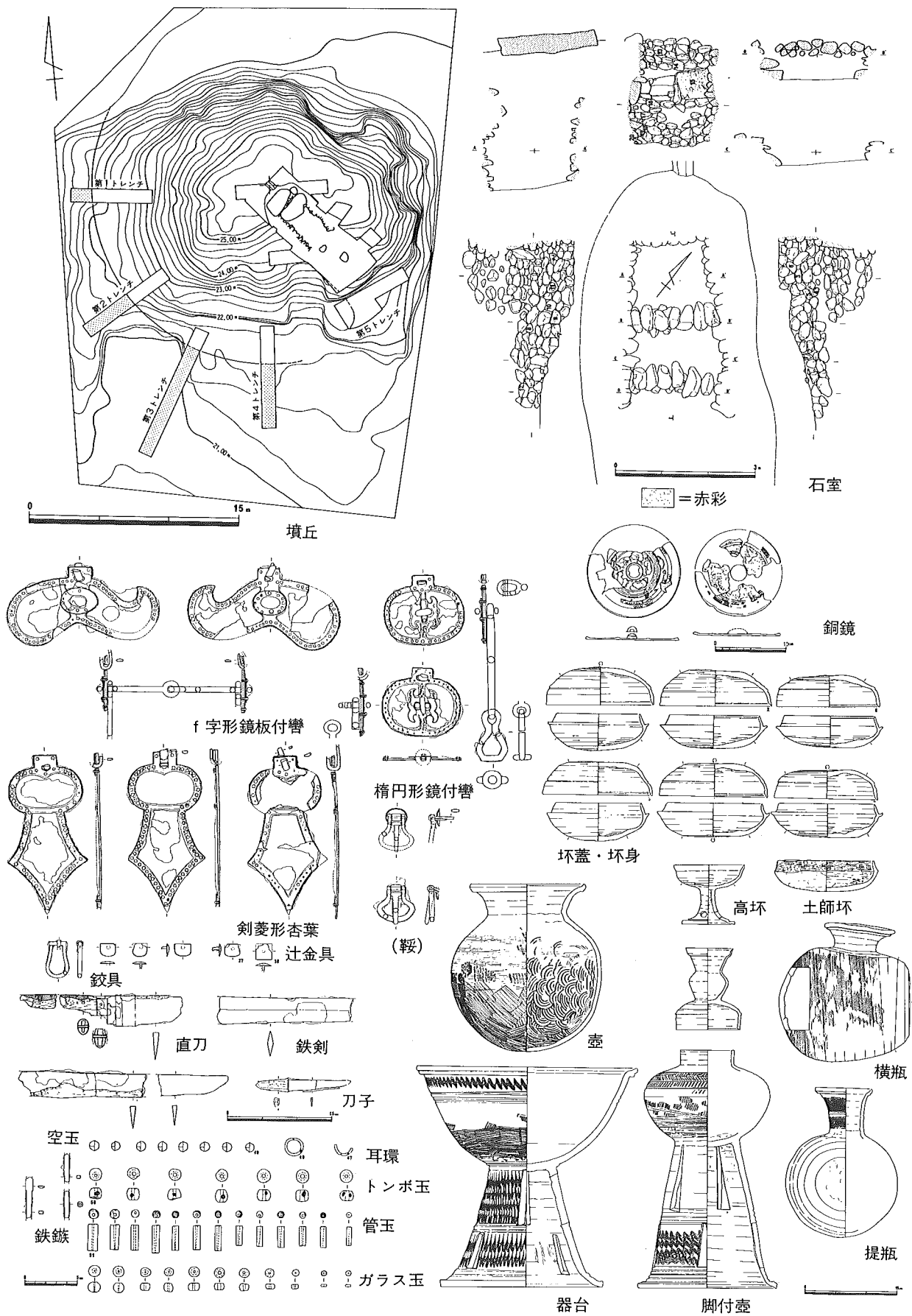
以上5世紀後半成立のB類の初期群集墳は金山古墳群の周辺部でみる限り、原野谷川水系の愛野向山B古墳群と若作古墳群のみ知られている。ただし地蔵ヶ谷古墳群より5世紀後半の須恵器が出土したことが報告されており（白澤崇 1995）、波垂神社上古墳群より変形獣形鏡が出土していること（図版24—(1)）から、あるいは愛野向山B古墳群以外で原野谷川水系南岸域に5世紀後半成立の初期群集墳が存在する可能性もある。しかし、その規模は現在の古墳群の分布を見る限り、さほど大きなものではない。さて、若作古墳群での副葬品の内容は貧弱で、被葬者間の階層差あるいは武人的性格を指摘しうる内容を示していない。一方、愛野向山B古墳群においては副葬品に見る3つのクラス階層差が確認され、しかも付近には狐塚古墳などのさらに上位に位置付けしうる首長墓が確認される。おそらく若作古墳群の被葬者層は狐塚古墳の被葬者の元、直接の武人集団として組織されていない農民集団の要素がより強い階層の人々であったと位置付けることが可能であろう。反対に、愛野向山B古墳群の被葬者層は狐塚古墳の被葬者の元に組織された武人集団的性格が強い人々であることが想定される。この想定が正しいならば第41図に示した通り、当地域の5世紀後半の初期群集墳の姿は圧倒的優位に立ち武人集団としての性格が強い愛野向山B古墳群を基本としてその支配層として狐塚古墳が存在し、さらに劣勢の農民集団の若作古墳群などが組織される重層的な構造が想定されよう。ただし、その構造は下部組織の初期群集墳に不均衡が見られ安定したものとはいえず、一つの群集墳の被葬者集団に頼っていた姿を見ることができる。

また、主体部が省略形態の礫槨となるB12号墳の副葬品を見ると、首長墓に副葬されうる馬具や三環鈴などの希少価値の高いものも含まれていることから、狐塚古墳よりさらに上位の古墳の被葬者とも関係をもち得た古墳と考えられる。さて、その上位の古墳の特定であるが、遠江全体で見ると5世紀後半の首長墓のなかで一番有力視しうる古墳としては、磐田原東南古墳群に属するの二子塚古墳があげられる。二子塚古墳は全長64mを測る前方後円墳で、墳丘には人物埴輪を始めとした埴輪が葺かれている古墳である。主体部は伝聞であるが小石が多数出土したことから礫槨ではないかとの推測がある（磐田市史編さん委員会 1993）。明治17年の発掘では銅鏡、三環鈴、鈴杏葉・馬鐸・剣菱形杏葉等の馬具や玉類などが採集されている。築造時期は埴輪や墳丘出土の須恵器から、TK208段階に該当すると考えられている。二子塚古墳の主体部が礫槨である点、三環鈴の型式が愛野向山B12号墳と同じものである点などから共通点が見られる。おそらく、二子塚古墳と愛野向山B12号墳の被葬者は直接の関係をもちえたのではないかと推測される。すなわち、下部組織である初期群集墳の盟主と遠江最上位の古墳の被葬者と直接関係を持ち得たという不安定な要素もそこに見ることができようか。

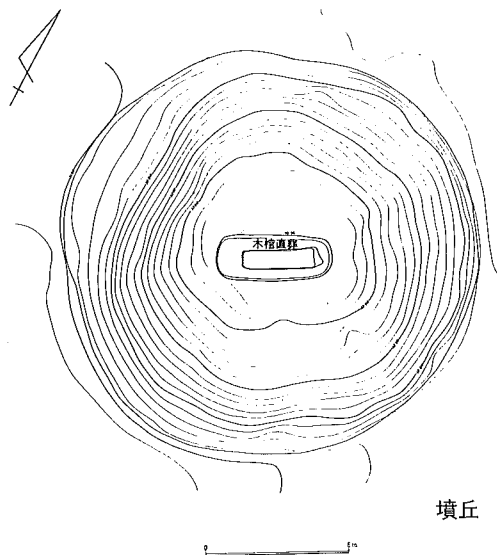
なお、二子塚古墳周辺部でも5世紀後半に成立する初期群集墳である新屋原古墳群が知られており（磐田市史編さん委員会 1993）、狐塚古墳と愛野向山B古墳群に見られた重層的な関係が、二子塚古墳にも存在している可能性が指摘しうる。

つぎに、金山古墳群と同じ6世紀前半～中頃に成立する初期群集墳と、首長墓との関係について検討してみたい。6世紀前半～中頃になると大門大塚古墳が段丘南縁に成立する。大門大塚古墳は第38図に示した通り、当時の最新の墓制である横穴式石室を有し、しかも前方後円墳ではなく直径26mの円墳であることが判明している（袋井市教育委員会 1987）。さらに、明治時代の発掘で出土した遺物が残されており、金銅装の馬具が2組、鞍金具である鞍金具、銅鏡2枚、直刀、剣、鹿角装の刀子、銀製の耳環、銀製の空玉、ガラス製のトンボ玉、ガラス玉、凝灰岩製の管玉、須恵器も器台や小形壺付蓋をもつ脚付壺をはじめとし、横瓶、提瓶、高坏、坏蓋・坏身など極めて優れた副葬品の内容を示している。古墳の年代は出土した須恵器からTK10段階すなわち6世紀中頃の築造と想定されている。当時の最新の墓制である横穴式石室の採用と、残されていない副葬品の内容からも考えあわせると、原野谷川水系での6世紀中頃の首長墓としては最高の位置に属する古墳であると断定しうる。

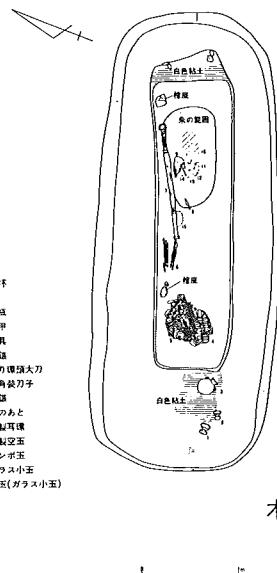
一方、大門大塚古墳と対峙するかのように、古笠西池をはさんで一つ南側の段丘北縁に団子塚5号墳・9号墳が出現する。直径19mを測る団子塚5号墳は既に後世の削平がなされていたが、9号墳については主体部が完存しており、副葬品の内容が判明した。団子塚9号墳は第39図に示した通り主体部は5世紀以来の木棺直葬であり、墳丘規模は一般的な初期群集墳を構成する古墳（直径10m前後が主体）よりやや大きく、大門大塚古墳より半分以上の直径15mを測る円墳であることが判明している。さらに、主体部からは鉄製の素環鏡板付轡と辻金具などの馬具が1組、挂甲1領、振り環頭大刀、鹿角装の刀子、銀製の耳環、銀製の空玉、ガラス製のトンボ玉、ガラス玉、凝灰岩製の管玉、冠帽の飾り金具、須恵器も主体部堀方内より小形の高坏と甕、提瓶、墳丘より坏蓋・坏身などが出土し、鏡の副葬はないものの大門大塚古墳に次ぐ内容をもつ首長墳である。古墳の年代は出土した須恵器からTK10段階すなわち6世紀中頃の築造と想定され、大門大塚古墳と同時期である古墳であることが明らかとなった。なお、5号墳については周溝内より須恵器の器台、坏身が出土しており、その時期はMK15段階すなわち6世紀前半の築造と想定され、大門大塚古墳・団子塚9号墳に1段階先行する時期の9号墳と同程度の規模を有する古墳であることも判明している（袋井市教育委員会 1992・1994）。このように6世紀前半～中頃に時期が求められる団子塚5号墳・9号墳は直径20mを切る小形の部類に入る古墳であるが、初期群集墳を構成する古墳よりは墳丘規模は大きく、副葬品の内容、各段階で



第38図 大門大塚古墳墳丘・主体部・遺物実測図（袋井市教育委員会 1987・1993より）

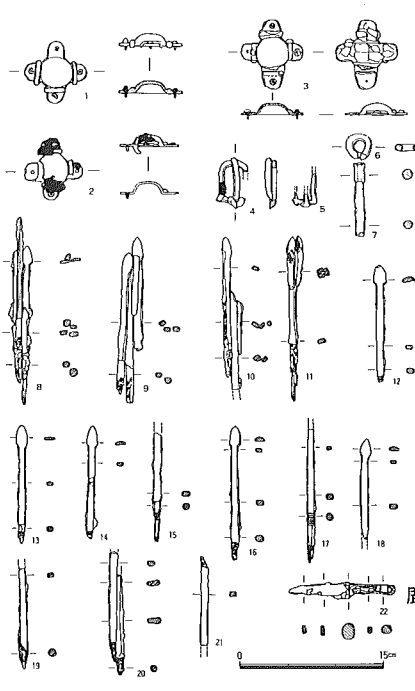
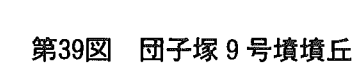
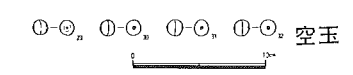
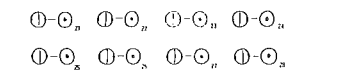
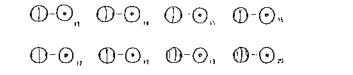
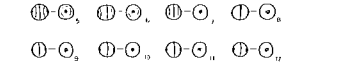
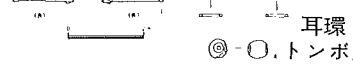
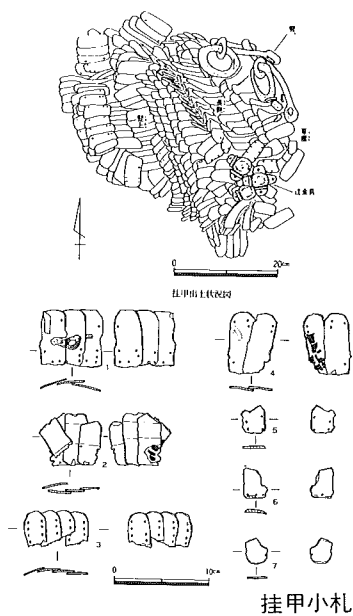


墳丘



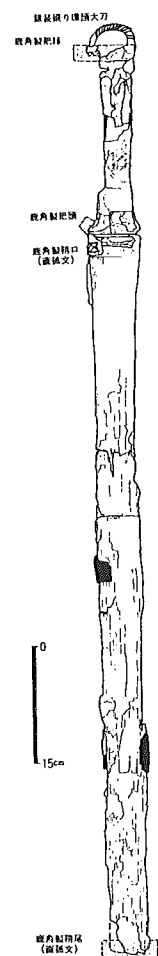
木棺

1. 高坏
2. 冠
3. 提瓶
4. 提瓶
5. 提瓶
6. 鉄鍬
7. 振り環頭大刀
8. 鹿角装刀子
9. 鉄鍬
10. 櫛のあと
11. 鉄製耳環
12. 鉄製空玉
13. トンボ玉
14. ガラス小玉
15. 手玉(ガラス小玉)

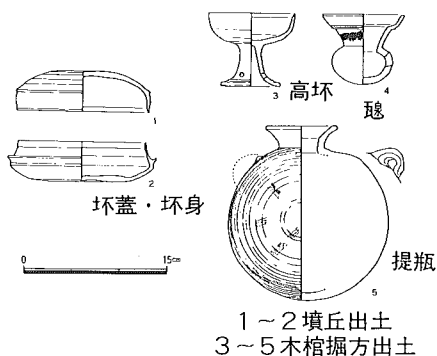


鉄鍬

鹿角装刀子

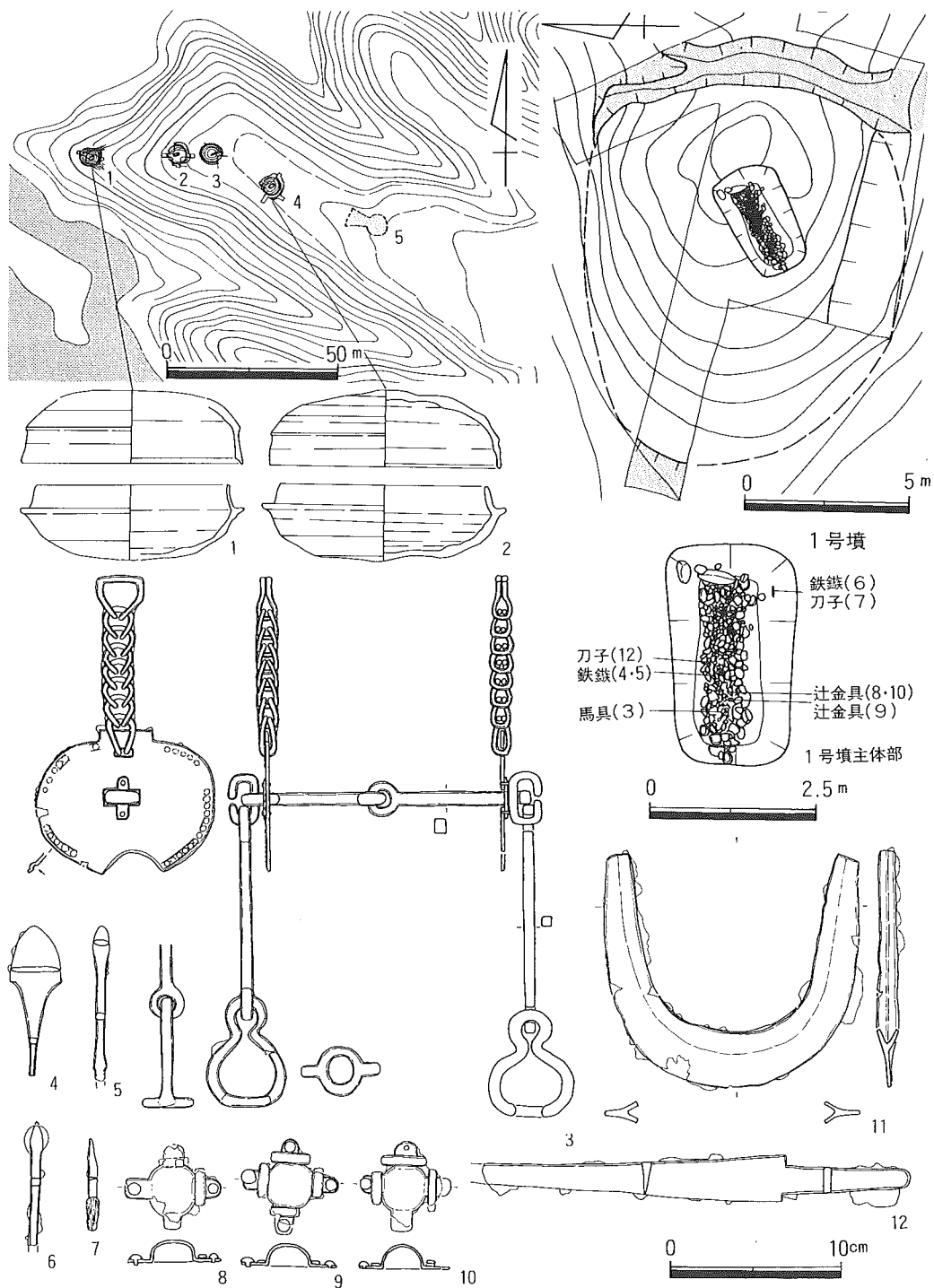


振り環頭大刀



1~2 墳丘出土
3~5 木棺掘方出土

第39図 団子塚 9号墳墳丘・主体部・遺物実測図 (袋井市教育委員会 1992・1994より)



第40図 雲座D古墳群墳丘・主体部・遺物実測図（松井一明 1994より）

単独墳を形成することなどから見て首長墓として位置付けてもよい古墳であると考えられる。ただし、大門大塚古墳よりは下位のランクに位置付けられるものであろう。

金山古墳群以外の6世紀前半～中頃に位置付けられる初期群集墳の典型例として、雲座D古墳群をあげてみたい。雲座D古墳群は前方後円墳（5号墳）1基のほか4基の円墳からなる単位群の初期群集墳である。発掘調査は1～4号墳の円墳に実施され、前方後円墳の5号墳は現存していない（袋井市教育委員会 1972 松井一明 1994）。主体部はいずれも箱式や短い棺身の割竹形木棺を有する木棺直葬であるが、特に1号墳は棺底に礫が敷かれ簡略化した礫槨といえる主体部を有していた。墳丘規模は径10m前後を測る小形の墳丘の古墳であることがわかる。副葬品については第40図に示した通り、礫槨の主体部をもつ1号墳から鉄製楕円鏡板付轡・辻金具等の馬具、小形の直刀、刀子、鉄鏃等のほか、周溝からU字鋤先が出土している。しかし、他の古墳からは副葬品の出土は全くないこと、1号墳のみに礫槨を採用する点から見ると、1号墳は単位群中盟主的な位置を占める古墳であると推定され、さらに他の古墳はそれに対して劣勢な立場を示すような在り方を呈する古墳群であると理解される。なお、古墳群の築造時期は1号墳と4号墳から須恵器の坏蓋・坏身が出土しており、それらはほぼTK10の段階に該当するものと考えられることから、6世紀中頃をあてておきたい。

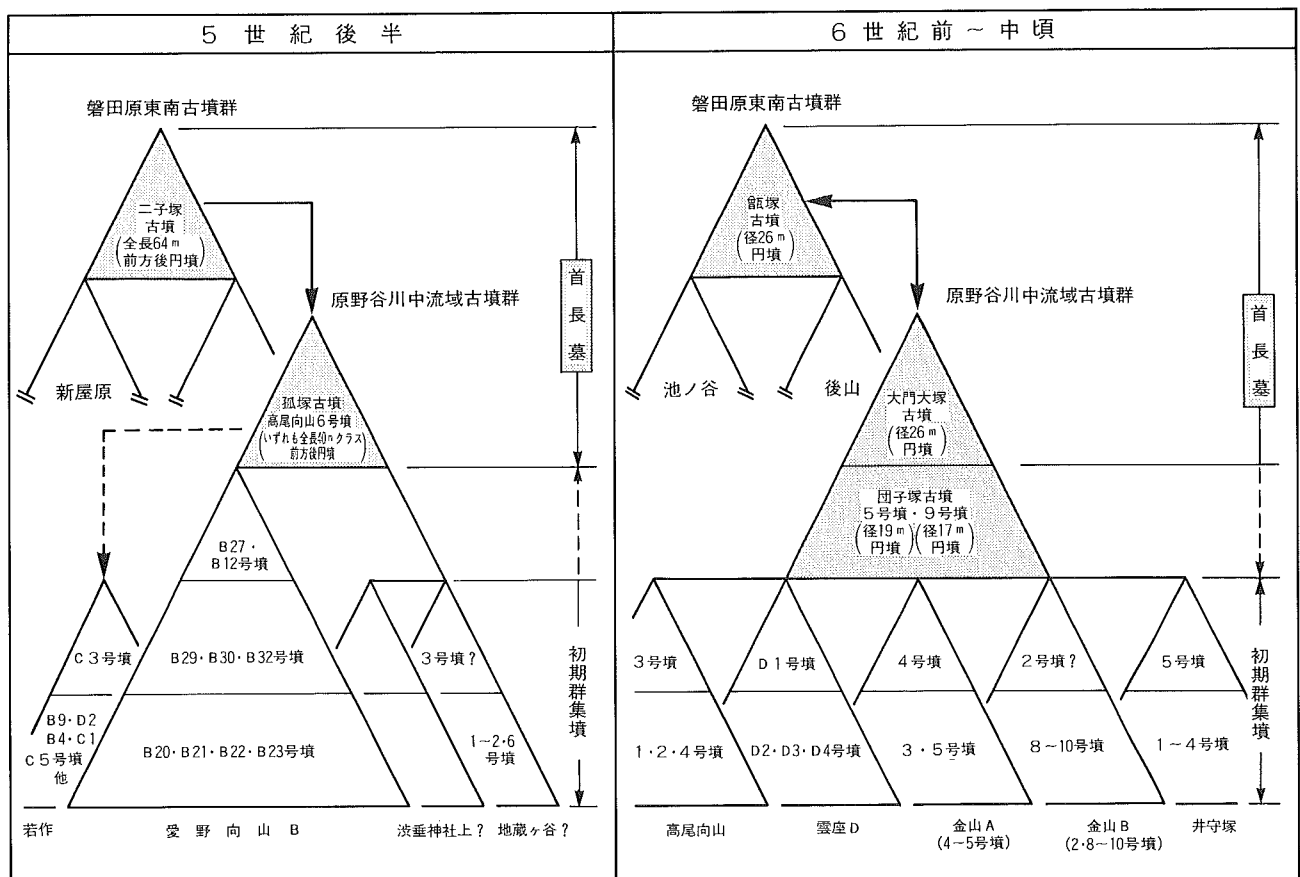
ここで金山古墳群の状況について再度確認しておこう。金山古墳群の分布を見るならば、雲座D古墳群と同じ小笠沢川流域に属する3～5号墳と、原野谷川に面した2・8～10号墳の二つの単位群に分けられる。仮に前者を金山A古墳群、後者を金山B古墳群として単位群の分類をして記述を進めたい。金山A古墳群はすでに報告したように、4号墳から初期の素環鏡板付轡や鉄製剣菱形杏葉等の馬具、直刀、鉄鏃、鹿角装の刀子等が出土し、雲座D1号墳と同じような盟主的古墳になるに疑いなかろう。しかも鉄製杏葉は雲座D1号墳出土の鉄製楕円鏡板付轡と組み合わせになる可能性が非常に高いもので、両者の古墳群の強い関係が伺われる。また、他の3号墳・5号墳の副葬品を見るならば何れの古墳からも直刀、刀子が副葬されていることから、雲座D古墳群と比べると優れた内容の単位群となっていることが理解される。

金山B古墳群では主体部が礫槨で副葬品も単位群中唯一直刀が副葬されていた2号墳以外は、8～10号墳で刀子、鉄鏃程度のものしか副葬がなされていないことを考えると、2号墳が盟主墳となる単位群であると理解される。ただし、雲座D1号墳、金山4号墳と同じように2号墳に馬具が副葬されていたかどうかは、主体部が半分以上失われていたため明らかではない。

以上のように雲座D古墳群、金山A・B古墳群の何れの古墳群も、馬具あるいは単位群中他の古墳よりも優れた副葬品をもち、さらに礫槨などの特定の主体部を有する1基の盟主墳を中心として2～4基程度の貧弱な副葬品の内容の小形古墳からなる単位群を形成していることが判明した。さらに近年発掘調査が実施された小笠沢川流域での高尾向山古墳群、原野谷川流域の井守塚古墳群でも同様の傾向を伺うことができる。

高尾向山古墳群は鉄製鏡板付轡・金銅装の辻金具・金銅装の杏葉の吊手金具（有機質の杏葉が存在していた可能性が高いもの）等の馬具、直刀、小形の直刀、鉄鏃等が副葬された3号墳、刀子や鉄鏃等が副葬された1・2・4号墳からなる単位群を形成する古墳群である。ただし、1・2号墳と3・4号墳は同一の台地上に立地するものの少しはなれた地点に位置しているので、別の単位群になる可能性もある。古墳群の築造時期は出土須恵器からTK10段階、すなわち6世紀中頃と考えられる。

井守塚古墳群は鉄製鏡板付轡・金銅装の辻金具等の馬具、直刀、鉄鏃等が副葬された5号墳の他、刀子や玉類が副葬された1～4号墳からなる単位群を形成する古墳群である。古墳群の築造時期は出土須恵器からMT15～TK10段階、すなわち6世紀前半～中頃と考えられる。



第41図 5世紀後半～6世紀中頃の首長墓と初期群集墳の相関関係構造概念図

以上のように、金山古墳群周辺の初期群集墳と首長墓を概観すると、第41図に示した通りの重層構造が見て取れるのではないと思われる。すなわち大門大塚古墳の被葬者を頂点として、その下位に団子塚5・9号墳の被葬者の首長層が存在し、さらにその下に各单位群の初期群集墳の構成員が組織されていることが理解される。さらに初期群集墳のレベルでは、おそらく首長層から馬具の配布を受けた盟主墳に埋葬された人物を中心として組織されていた状況も看守できるのである。すなわち5世紀後半の初期群集墳と比較するならば、さらに均等に組織された下部組織を持つ強固な軍事集団が形成されたことも予感させるに十分な状況が見て取れるのである。また、第44図に示した通り6世紀成立の初期群集墳は、大門大塚古墳の石室の開口方向、団子塚5・9号墳が出現した小笠沢川流域の古笠西池を中心として展開・分布するようになってきており、5世紀後半の初期群集墳とは明らかに異なる勢力の台頭を思わせる状況が見て取れる。

つぎにこの重層的な組織は、5世紀後半と同じく遠江の主導的立場を堅持しえた磐田原東南古墳群との関係がオーバーラップしてくるのである。すなわち、大門大塚古墳と甕塚古墳との関係である。甕塚古墳は墳丘規模が直径26mの円墳で内部主体が横穴式石室であり、大門大塚古墳とよく似た規模の首長墓である（磐田市史編さん委員会 1993）。また付近には、池之谷古墳群や後山古墳群等6世紀前半～中頃を築造時期の主体としそうな初期群集墳も近年発掘調査され、おそらく大門大塚古墳以下に組織されたと同じ初期群集墳の重層構造が、甕塚古墳の元においても成立していた可能性が高まってきた。

ただし、甕塚古墳は墳丘に埴輪を葺き、副葬品の内容も仿製方格規矩鏡、金銅装のf字形鏡板付轡

2種類3対・十字透かしの楕円形鏡板付轡1対・三葉文透かし楕円形杏葉3・剣菱形杏葉3・三鈴付杏葉3以上・鞍金具・鉄製楕円形鏡板付轡1対・素環鏡板付轡等の馬具、堅矧広板革綴冑破片・挂甲小札などの武具、鈴付銅製三輪玉・太刀・鉄矛・鉄鏃等の武器、耳環・多種類の玉類等の装身具、多数の須恵器などが見られ、大門大塚古墳より優れた副葬品の内容をもつことがわかる。よって、5世紀後半同様に6世紀前半～中頃においても原野谷川中流域南岸（小笠沢川流域）の首長墓である大門大塚古墳の被葬者よりも、さらに上位の首長墓が磐田原東南古墳群のなかに存在していたことがわかるのである。しかしこの状況を逆に考えると、甕塚古墳の被葬者は副葬品の内容や埴輪工人を招聘しえた点を見ると明らかに大門大塚古墳より上位の首長であることを理解しうるが、両古墳とも埴輪規模や主体部に当時最新の横穴式石室を採用している点から（5世紀後半の中期的前方後円墳体制下では埴輪規模が首長層のランク付けに係わっていたとの推測を前提とすると）、原野谷川中流域南岸に成立した首長層と磐田原東南古墳群の首長層の格差が少なくなってきた状況を示しているのではあるまいか。さらに推測を進めるならば、この状況は畿内政権の地域首長層に対する対応が5世紀代とは変化し、遠江において古墳時代前期以来つねに最高位の首長を輩出していた磐田原東南古墳群の首長層に対する、畿内政権の政治的規制が強く働いた結果だと見てとれないだろうか。

以上のように金山古墳群を中心として展開する初期群集墳は、大門大塚古墳や甕塚古墳などの首長層、あるいは畿内政権の係わりあいのもとに成立する政治的な築造物であると理解され、「群集墳」の名にふさわしい内容を示すことが明らかになったと思われる。

iii) 後期群集墳・横穴群の成立について

ii) では初期群集墳についてはすでにいくつかの成立年代の違いがあることを指摘したが、後期群集墳・横穴群にもついても存続年代にいくつかの異なる傾向が存在することを検討したことがある。ここでは、その時の基準をまず示し、金山古墳群周辺域での後期群集墳・横穴群の成立と展開がいかなる状況で推移したか整理し考察してみたい。

後期群集墳・横穴群の類型化（松井一明 1994）

I類 6世紀前半ないし中頃から7世紀にかけて築造された群集墳で、8世紀前半まで追葬が認められるものも含むが、基本的に8世紀代には築造しないものをI類とした。なお、築造の始まりが6世紀前半～中頃と古くなるものI a類、6世紀後半から始まるものをI b類と細分類した。なお、I a類の初期築造古墳は木棺直葬の古墳から形成される初期群集墳の様相を呈するとともに、Cタイプの初期群集墳の存続時期とも重複するが、後期群集墳に継続することを重視して初期群集墳の類型化からは外して考えた。

II類 7世紀前半から8世紀代にかけて築造された群集墳をII類とした。築造の終末時期が8世紀前半のものをII a類、8世紀後半まで降るものをII b類と細分類した。

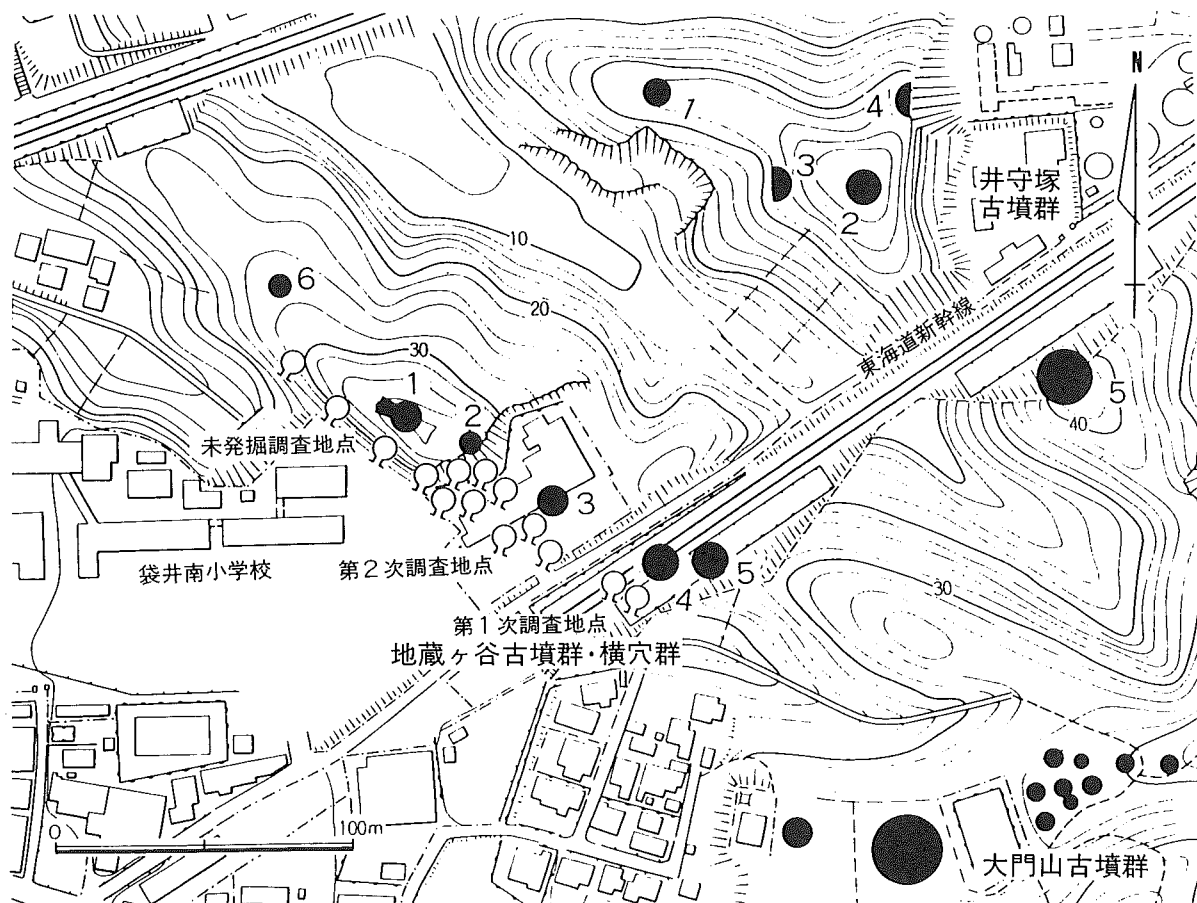
III類 6世紀代から8世紀前半までの長期に渡って築造され続けたものをIII類とした。

IV類 6世紀代のみ築造が進んだものをIV類とした。

V類 7世紀代のみ築造で、8世紀前半まで追葬されるものを含むものをV類とした。

VI類 8世紀代のみ築造されたものをVI類とした。

さて、以上の類型から金山横穴群周辺の、初期群集墳および後期群集墳・横穴群の類型化を試みると、第44図に示したの結果を得ることができた。初期群集墳の古いタイプであるB-2類の初期群集墳は唯一原野谷川水系の愛野向山B古墳群B地区で見られるに留まっており、小笠沢水系では目下のところB-2類の初期群集墳は見られない。初期群集墳の新しいタイプであるC類の初期群集墳は原野谷川水系では今回報告する金山B古墳群を始めとして、愛野向山A古墳群や愛野向山B古墳群



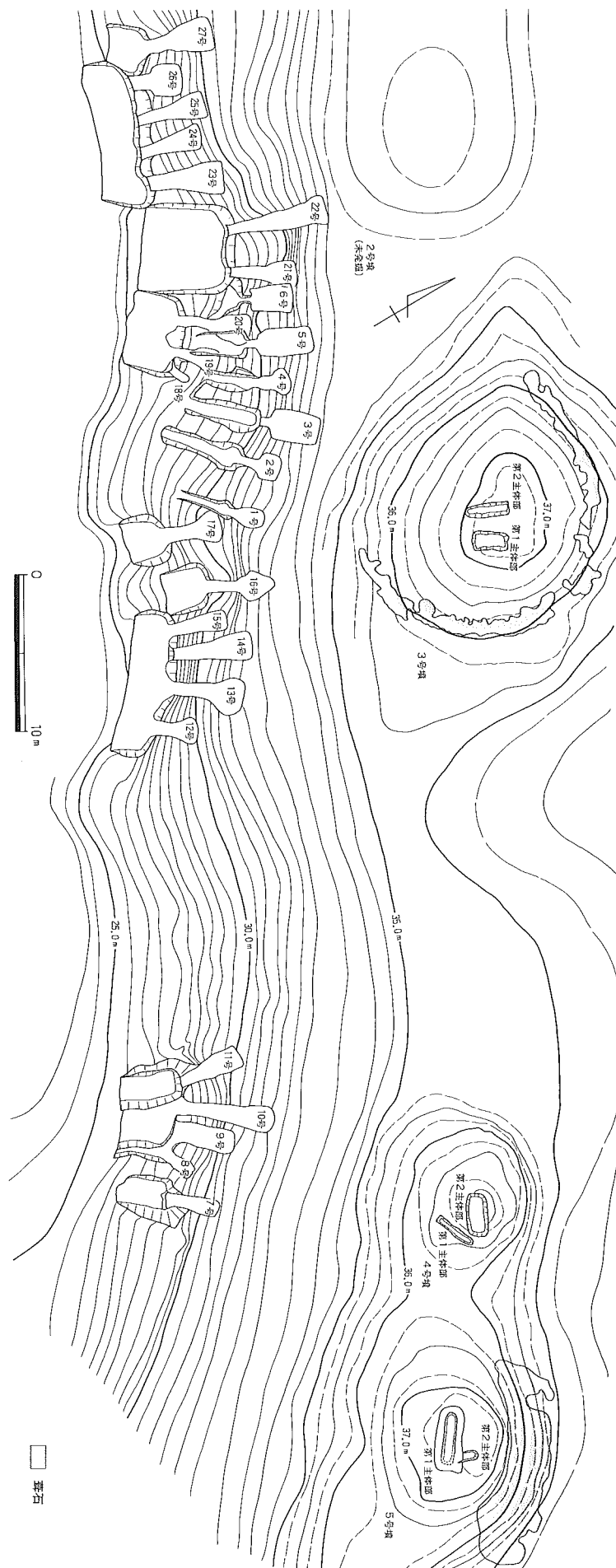
第42図 地蔵ヶ谷・井守塚古墳群位置図

A・C地区、地蔵ヶ谷・井守塚古墳群等があげられる。小笠沢川水系では今回報告する金山A古墳群を始めとして、雲座D古墳群、谷坂古墳群があげられる。

以上の状況から、初期群集墳のうち5世紀後半段階ではB-2類である愛野向山B古墳群B地区で形成が始まり、6世紀前半段階になるとC類の初期群集墳が、原野谷川水系では各舌状丘陵上に拡散するように形成されるようになるとともに、新たに小笠沢川流域にもC類の初期群集墳が分散化しつつ形成されることが理解される。

つぎに、後期群集墳・横穴群について見てみると、原野谷川水系では第43図に示した総数40基以上からなる地蔵ヶ谷横穴群がもっとも有力ものとしてあげられる。また、発掘調査はなされていないものの愛野向山横穴群が地蔵ヶ谷横穴群に匹敵する規模の横穴群ともくされている。何れも後期群集墳・横穴群I b類に分類されるものであろう。なお、原野谷川水系では今回報告する金山B横穴群と同規模の横穴群は他に見られない。横穴式石室墳としては能光寺境内古墳があげられるが、小単位群程度の古墳群と思われる。

小笠沢川水系では総数50基以上からなる長者平古墳群がまず大規模後期群集墳としてあげられる。他の横穴式石室をもつ後期群集墳としては小笠沢川上流部で10～数基からなる山本古墳群、山本山古墳群、菩提山古墳群、宝野金山古墳群等があげられる。なかでも山本古墳群1号墳からは金銅装の飾大刀、装飾須恵器（7世紀前半）が出土しており、優れた副葬品を所有する古墳も含んでいるようである。小笠沢川下流部では、6世紀前半から勢力を保っていた団子塚古墳群が有力な後期群集墳として移行している。またその周辺部では、明ヶ島10号墳に代表されるような磐田原東南縁地域の有力後期



第43図 地藏ヶ谷古墳・横穴群全体図

水系	古墳・横穴群名	I 期	II 期	III 期				IV 期		V 期	類 型
	主 体 部 種 類	後		前	中	後	未	前	後	前	文 献
小笠沢川流域	金山 A 古墳群		?								初 C
	木棺直葬墳										本 書
	金山 A 横穴群				?						後 I b
	横 穴									追葬→	本 書
	谷坂古墳群										初 C
	木棺直葬墳		?								1
	団子塚古墳群		5号墳	9号墳							後 I a
	木棺直葬・石室墳		●	●							2
	北山古墳群										後 IV
	横穴式木室			?							3
	高尾向山古墳群										後 I a
	木棺直葬・木室墳										—
	雲座古墳群										初 C
	木棺直葬墳										4
	長者平古墳群										後 I b
	横穴式石室									追葬→	5
	山本古墳群										後 I b
	横穴式石室										—
	山本山古墳群										後 I b
	横穴式石室										6
	山本山横穴群										後 V
	横 穴										6
原野谷川中流域南岸水系	地藏ヶ谷井守塚古墳群										初 C
	木棺直葬墳										7
	地藏ヶ谷横穴群										後 I b
	横 穴									追葬→	7
	金山 B 横穴群				金山 B 古墳群						後 I b
	横 穴				?					追葬→	本 書
	愛野向山 B 群 B 区	B 27号墳									初 B-2
	木棺直葬墳	●									8
	愛野向山 B 群 A 区 C 区	B 12号墳									初 C
	木棺直葬墳	●									8
	愛野向山 A 群										初 C
	木棺直葬墳										9
	愛野向山横穴群										後 I b ?
	横 穴										8
首長墓	若作古墳群										初 B-2
	木棺直葬墳										10
	小笠沢水系	高尾向山 6号墳?	団子塚 5号墳	大門大塚 団子塚 9号墳	御所森						11
	原野谷川水系	孤塚									11

の消長・盛衰図

群集墳（磐田市史編さん室 1993）と関連を持つと思われる横穴式木室を採用する北原古墳群や高尾向山古墳群が成立している。この古墳群の成立過程には、一般的な横穴式石室を採用する長者平古墳群とは同系列には扱えないものと思われる。おそらく前節で記述した通りC類の初期群集墳が成立した経緯を引き継いだ、6世紀前半の政治的変革の影響を大きく受けた有力な勢力の古墳群として成立していると考えたほうが良いのかも知れない。また、さらにこの古墳群は磐田原東縁の有力後期群集墳の被葬者層とも関係をもっていたと考えられるのである。

さて、小笠沢川流域では今回報告する金山A横穴群のような横穴群についてはむしろ数は少なく、山本山横穴群があげられるのみである。山本山横穴群は横穴式石室を採用する山本山古墳群と近接した位置に所在している。さらに、発掘調査の結果からみると古墳群のほうが6世紀代に収まり、横穴群は7世紀代になると築造され時期的な差があることが判明している（袋井市教育委員会 1978）。

以上の点からみると、おおむね原野谷川水系では横穴群が主体、小笠沢川水系では後期群集墳が主体的に分布する地域といえる。原野谷川水系では愛野向山横穴群と地藏ヶ谷横穴群の2大横穴群に集約され、小笠沢川水系では中流域に長者平古墳群が1大後期群集墳として成立し、下流域に6世紀前半の首長墓的な性格を持ちその配下に系列化されそうな団子塚古墳群、北原古墳群、高尾向山古墳群が成立していることが看守できた。

さて、こうした後期群集墳・横穴群の成立と展開過程には集落群の動向が関係していることは、自明の理であるが、残念ながら集落遺跡の発掘調査がまったくといっていいほど進んでいないため、安易に考察を進めることはできない。しかしながら、周辺地域の古墳時代集落の若干の傾向は明らかになりつつあるため、その傾向を紹介することにより当地域の後期群集墳・横穴群との相関関係について予察を試みてみたい。

まず、原野谷川水系であるが、原野谷川北岸の自然堤防上に西から袋井宿遺跡、久津部遺跡、国本遺跡、坂尻遺跡、南岸に下貫名遺跡が成立していることがわかる。坂尻遺跡以外は発掘調査が進んでいないためはっきりした状況は分からないが、断片的に出土している土器からいづれの遺跡も5世紀後半～6世紀くらいから7世紀代まで存続する集落らしい。坂尻遺跡は、現在判明している資料からだと5世紀後半～7世紀前半段階での原野谷川水系の集落の中では最も有力な遺跡である（袋井市教育委員会 1992・1994他）。とくに6世紀末段階では、人工の溝によって区画された大形掘立柱建物が見つかり、6世紀代の小首長層の居館ではないかと推定された。よって、坂尻遺跡が愛野向山B古墳群の被葬者層の集落とも考えられるが、後期群集墳・横穴群でみると菅ヶ谷横穴群の方が至近距離にあるため、愛野向山B古墳群・横穴群とは別古墳群・横穴群の可能性が高いと思われる。とするならば、現在知りうる限りでは断片的資料の中では国本遺跡が有力視される。距離的にも近く国本遺跡などが愛野向山B古墳群・横穴群の集落とも考えられる。地藏ヶ谷横穴群については、原野谷川水系に面した掛之上遺跡などが注目される。掛之上遺跡では6世紀代の竪穴住居のほか7世紀代と目される掘立柱建物群が発掘調査で判明しており、有力集落あるいは居館集落になる可能性が高い遺跡である（袋井市教育委員会 1990）。しかしながら、低地部でも最近6世紀～7世紀の集落遺跡である袋井宿遺跡～下貫名遺跡などが発見され、これらの遺跡の状況がわかってきたらもう少し墓地と集落との相関関係が明らかとなるだろう。

小笠沢川流域では大門大塚古墳周辺での大門遺跡の成立が大きく関係していると考えられる。大門遺跡では発掘調査で大形の総柱掘立柱建物が見つかり（袋井市教育委員会 1983）、掛之上遺跡と共に6世紀代の居館集落になる可能性の高い遺跡である。おそらく大門大塚古墳や団子塚古墳群に関係した集落といえそうである。段丘上の高乾の地に立地するという立地条件の良い大門遺跡対して、低

地部の柳原遺跡などの存在が近年知られるようになってきた。おそらく6世紀代からの一般農民の集落と考えられ、長者平古墳群など小笠沢川上流域の後期群集墳との関係を指摘できたら幸いである。

以上のように、原野谷川水系・小笠沢川の両水系とも後期群集墳・横穴群に対応する集落がおぼろげながら推定できるのだが、発掘調査が進んでいないため具体的資料に欠けこれ以上の考察を進めるには今後の資料の蓄積をまつほかないだろう。

このように、各水系の後期群集墳と横穴群という一見対峙する墓制を採用する理由は、おそらく水系の異なる集落の事情に大きく左右されていたと思われる。すなわち、小笠沢川水系の集落については団子塚古墳群や大門大塚古墳に見られるように6世紀前半代から首長層共々磐田原古墳群東縁の集団と関係をもったことから横穴式石室や横穴式木室を採用し、原野谷川水系では坂尻遺跡を始め原野谷上・中流域あるいは掛川市域の逆川水系に展開する横穴群を採用する集落群との関係で理解されるのである。その具体的違いについては、すでに本文中あるいは考察で明らかにしてきたとおり後期群集墳と横穴群を比較検討するならば、C類の初期群集墳から系譜がたどれる墓域の設定場所、築造時期の盛衰、古墳祭祀の形態、あるいは古墳群の単位群の形成過程、副葬品の内容などなどいづれをとっても同一の方向性を示し何ら違いはないのである。とするならば、当地域においては横穴群を帰化人あるいは他地域からの新興勢力の開発者の墓制としての位置付けを与えるよりも、例えば西遠江と東遠江という大きなエリアのなかでの各集団の擬制的な相関関係を、他者に示すための政治的配慮が働いた結果と考えたほうがより事実に近いのではないかと結論付けておきたい。

iv) まとめ

まず、金山古墳・横穴群の周辺部で5世紀後半に初期群集が原野谷水系の愛野向山B古墳群を中心として成立した歴史的背景を考えてみたい。遠江では、5世紀中頃圧倒的な規模をもって成立した磐田市堂山古墳（全長113m）の後、5世紀後半には二子塚古墳で見られるように前方後円墳は小形化していることから、遠江の磐田原南東縁地域の首長がもっていた圧倒的権力は崩壊し始めたと考えられる。それにともない、下部組織に属していた初期群集墳の被葬者層の台頭も始まり、さらに狐塚古墳や高尾向山6号墳で見られた小地域の首長層とのつながりをより強め、そうした構造の中から軍事的組織の整備を行ったと思われるのである。また、こうした下部組織にまで及んだ軍事的な編成作業は、おそらく畿内王権に対するものではなく、稲荷山鉄剣銘文に象徴的に見られるように畿内王権が東海地域以東に行った東国政策の動きの中でとらえることはできないのだろうか。初期群集墳のなかに馬具や三環鈴など、畿内からもたらされたと考えられる副葬品をもつものがあったりすることから見ても、初期群集墳の被葬者層が地方首長層を通じて畿内王権と直接関係をもっていたのではないかと推測されるのである。

このように5世紀後半成立したの初期群集墳は、発展的に後期群集墳・横穴群へと系譜がたどれ、金山古墳群周辺の6世紀後半に成立する後期群集墳・横穴群は、政治的背景の異なる2つの勢力が存在していたと考えられた。2大勢力の政治的背景とは、小笠沢川水系の集団に対しては磐田原南東縁古墳群・太田川流域の勢力が、原野谷川水系の集団には原野谷川中・上流域全体の集団の勢力が影響を与えていたと推測されるのであり、今回分析の対象とした地域がまさにこの2大勢力の接点にあたっていたと理解されるのである。

この2大勢力は、おそらく中遠地域で6世紀後半～7世紀代に勢力を確保していた曾我の国造と久努の国造の勢力圏に関係した状況として理解されるならば、極めて示唆に富んだ考古学的事実を提示していると考えられるのである。近年、この推測を傍証し得る古墳群の発掘調査がなされた。すなわち、掛川市教育委員会の手により実施された堀ノ内古墳群である。堀ノ内古墳群の所在する地域では、

すでに過去の調査で宇洞ヶ谷横穴、あるいは至近距離に存在する山麓横穴において金銅装の馬具や飾り大刀等きわめて質の高い副葬品を所有する横穴の発見がなされ（掛川市教育委員会 1971 静岡県教育委員会 1983）、当地域では数少ない後期古墳の首長墓地帯として注目されていた場所でもあった。今回の発掘調査でも横穴式木室を内部主体とする円墳（堀ノ内13号墳）から、銅鏡や金銅装の馬具などが発見され（前田庄一 1993）、山麓横穴から宇洞ヶ谷横穴の系譜に連なる首長墓と考えられるものである。いずれも出土須恵器から6世紀後半～末の年代を示すことから、多く見積もっても2世代程度の首長層の墓所であったと思われる。7世紀代の首長墓が見られないのが気になるところであるが、曽我の国造の年代に最も近い時期を示す首長墓として注目される考古学的資料である。さらに内部主体に注目してみると、横穴と横穴式木室が混在していることが特筆される。おそらく、磐田原南東縁に分布する横穴式木室墓に関係した状況と、横穴という異なる墓制を採用した2面性を持ち得ていたことが理解されるのである。この2面性は首長の系譜が横穴のみでは成立し得なかったことを証明しているのだろう。このように堀ノ内古墳群の発見で原野谷川中・上流域及び逆川水系では、早くも6世紀後半に曽我の国造の系譜を遡る首長層が台頭していたと考えられるのである。

いっぽう、太田川水系に勢力をもっていたと推測される久努の国造の墓所については、考古学的資料の面からはまったくわかっていない。堀ノ内古墳群で横穴式木室の採用がなされていた状況から見ると、有力な横穴式木室を採用する後期古墳が集中する磐田原南東縁地域の古墳群のなかに存在する可能性が高いのではないかと推定してみたい。おそらく、この地域には堀ノ内古墳群のような副葬品の内容をもつ6世紀後半～末の首長墓群が存在し、内部主体はおそらく横穴式石室か横穴式木室であると推測してみたいのだがいかなるものであろうか。

以上のように金山古墳・横穴群周辺の2つの異なる墓制が存在する背景に、曽我の国造と久努の国造という異なる政治勢力が存在した結果の現れと考えてみた。しかし、この関係を遠江全域に広げて考えてみた場合すべてあてはまるのかどうかは今後の資料の蓄積を待つしかないと思うが、首長とその構成員の支配関係だけで異なる墓制を採用するとは到底思えない。この点については、もう少し流域ごとの古墳群の分析を進めないといけないのは言うまでもないことであるが、報告書の考察という性格もあるため問題点の指摘に留めておき、今後の資料成果の蓄積をまちたい。

このように、金山古墳・横穴群の周辺に展開する、初期群集墳、後期群集墳、横穴群あるいは首長墓の状況は一見複雑な様相を呈するが、本節で整理してみたとおりの所謂群集墳や横穴群の成立を考えるうえで極めて示唆に富んだ地域であることが理解されるのである。すなわち、重ねて強調したいのだが、初期群集墳あるいは後期群集墳・横穴群ともに政治的な背景から出現してきていることの手掛かりを与えてくれているのである。さらに、今回の考察では推測の域に留まってしまったが、こうした横穴式石室（木室）と横穴という外見上明らかに異なる墓制の違いが出現する一つの原因としては、国造の勢力圏に関連した結果と考えてみたのである。今後とも、袋井地域の群集墳や横穴群の分析を進めることにより、さらに古墳時代の人々の姿を明らかにできうるものと確信し本節の考察のまとめの言葉としたい。

最後になりましたが、本考察をまとめるについて例言に芳名をあげさせていただきました方々に色々と教示を受けました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

【 参考文献 】

- 大谷純仁 1965 「谷坂古墳群」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』静岡県教育委員会他（文献1）
- 平野和男他 1965 「地藏ヶ谷古墳及び横穴群」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』静岡県教育委員会他（文献7）
- 鈴木敏則 1984 「群構成について」『半田山古墳群A小支群・半田山Ⅲ遺跡』浜松市遺跡調査会
- 前田庄一 1985 「宇刈横穴群の特徴について」『宇刈の横穴－宇刈横穴N群82～85号穴発掘調査の概報－』袋井市教育委員会
- 前田庄一 1993 「堀ノ内古墳群」『静岡の原像をさぐる』静岡県教育委員会他
- 松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』（文献8）
- 松井一明 1994 「山田原古墳群に見る群集墳の終末」『山田原遺跡群Ⅰ』袋井市教育委員会
- 白澤 崇 1995 「地藏ヶ谷横穴出土の把手付椀について」『静岡県考古学研究 No.27』静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』（文献5）
- 袋井市教育委員会 1972 『袋井市雲座D単位群発掘調査概報』（文献4）
- 袋井市教育委員会 1978 『山本山古墳群』（文献6）
- 袋井市教育委員会 1983 『大門遺跡－大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳』
- 袋井市教育委員会 1987 『愛野向山A－2・3・4号墳』（文献8）
- 袋井市教育委員会 1988 『愛野向山A－8号墳 愛野向山墳墓群 愛野向山Ⅳ遺跡』（文献8）
- 袋井市教育委員会 1990 『若作遺跡 若作古墳群』（文献10）
- 袋井市教育委員会 1990 『大門遺跡Ⅴ－大門Ⅰ遺跡第5次発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1992 『団子塚遺跡－遺構編－』（文献2）
- 袋井市教育委員会 1992 『坂尻遺跡－平成3年度貸倉庫建設に伴う緊急発掘調査概報－』
- 袋井市教育委員会 1993 『袋井の前方後円墳』（文献11）
- 袋井市教育委員会 1994 『坂尻遺跡－遺構編－大和ハウス工業(株)中部工場内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会他 1994 『団子塚九号墳出土遺物保存処理報告書』
- 掛川市教育委員会 1971 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』
- 磐田市史編さん委員会 1993 『磐田市史 史料編1』
- 浅羽町教育委員会 1994 『北山遺跡』（文献3）
- 浅羽町教育委員会 1992 『団子塚遺跡(1)』（文献2）
- いわき市教育委員会他 1985 『龍門寺遺跡』

※（ ）内の文献番号は第44図の文献番号と一致する。

第2節 古墳副葬土器の組成について

i) はじめに

金山横穴の玄室内は築造後、比較的早い段階で開口部が土砂によって閉塞され、埋葬当時の状況を良好に示していた。しかし、横穴に限らず横穴式石室や静岡県内に多く分布する所謂木芯粘土室においてさえも、その構造の特性から追葬を可能としている。追葬については、先学が指摘しているように、先に副葬した遺物を移動させる「かたづけ」の行為を伴うことが多い。この「かたづけ」が多ければ多いほど、一時期の埋葬に伴う副葬品の組成の区別を困難にしている。今回の金山横穴においても、確実に初葬時・追葬時の副葬品の組成を区別できるものは少ない。このことを逆に取れば、追葬の不可能な埋葬形態を追えば、良好な副葬品の組成を見いだせるわけであるが、残念ながら金山横穴の築造された前後の6～7世紀代は、先の条件を満たす埋葬形態、つまり木棺直葬を主体部に有する古墳の資料がほとんど存在していない。

こうした状況の中、資料収集の段階から不確定な要素が多く介在し、分別を困難にしているわけであるが、一時期の副葬土器の組成を推測し、これを時代ごと地域ごとの軸にのせて分析していくことによって、古墳時代の主体部の副葬品として土器がどのように扱われていたかの一端を知ることができると考えられる。

分析に際しては、まず追葬のなるべく無い主体部を選択した。埋葬施設については、横穴式石室、横穴、木芯粘土室を対象とし、その中でも主体部・玄室内出土の土器の器種に注目した。このため、器種ごとの出土量については今回特に問題とせず、有無についてのみにとどめた。先に触れたように「かたづけ」行為によって一時期の副葬品組成の判別を困難にしているため、時間軸を廃して、一主体部から出土したものを全部、一資料として扱った。このため、初葬時・追葬時の副葬組成が一資料中に混在するという難点がある。これについては資料中の古相の土器と新相の土器から判断した時間幅のある組成パターンの採用された時期とした。このため、同組成パターンの資料が多ければ多いほど時間幅を相対的に判断できるということになる。

土器組成の枠組みは、壺と瓶類と坏類と甕という四つの大枠を設定し、細目は瓶類内を平瓶・提瓶・横瓶・フラスコ形瓶に、坏類内を坏（坏身・蓋を含む）と高坏に分けて、全体として8項目の器種を組成の基本とした。この項目設定については、概ね古墳時代後期の全時期に存在する器種として選定した。対象とした地域は静岡県の西部地域を中心とし、これらの古墳の築造年代は6世紀の中葉から8世紀の前葉位である。

ii) 古墳主体部副葬土器の組成

前述したとおりの枠組みを基に県内の西・中部地域の100基あまりの古墳を抽出し、器種組成を観察したところ、約半数以下の40のパターンに分けることができた。第1表に示したものは、これを解りやすくまとめたものである。表の左の番号一つが組成の一パターンを示すことを表しており、器種項目に該当するものがあれば「甕」で表すという表現を行っている。ただし今のこの段階では1から40のパターンの配列順序に意味付けがなされておらず、ランダムな状態である。このため100からなる資料が、半数になっただけで扱にくいものとなっているため、これを更にグループ分けすることとした。その基本は、古墳時代の後期を通じてほぼ全時期に存在する、壺・坏・甕の3器種である。この3器種を基に以下の四種類の組合わせを作成した。（第45図参照）

パターン	主体部副葬土器組成						使用時期			該当古墳名
	壺	平瓶	埴瓶	横瓶	フ瓶	高杯	6世紀	7世紀	8世紀	
1	●				●	●				白砂ヶ谷D-15号 伊庄谷横穴B-2号 伊庄横穴B-9号
2	●	●			●	●				清水ヶ谷3号横穴 井庄谷横穴28号 波田1号 土橋横穴3号
3		●			●	●				伊庄谷横穴29号
4		●			●					伊庄谷横穴30号 土橋横穴6号
5	●	●		●	●	●				牧ヶ谷2号 新井平4号 女ヶ谷28号 駿河山2号
6	●	●	●		●					平尾野添横穴B-b-5
7	●				●	●				観音堂横穴1号 観音堂横穴16号 池谷1号 金山横穴A1号 山ノ神1号
8					●	●				観音堂横穴2号
9	●	●	●		●					観音堂横穴14号
10	●				●	●				土橋横穴8号
11	●			●	●	●				白砂ヶ谷D-6号
12	●				●	●				白砂ヶ谷D-5号 牧ヶ谷4号
13	●				●					伊庄谷横穴29号 白砂ヶ谷D-7・8号 白砂ヶ谷D-9号 白砂ヶ谷D-13号 伊庄谷横穴27号 平尾野添B-c-3 土橋横穴4号 金山横穴B7号 三ツ池2・4・5号
14	●				●					白砂ヶ谷D-11号 平尾野添横穴B-b-2 観音堂横穴19号
15	●					●				白砂ヶ谷D-14号
16	●	●			●	●				北山2号
17	●	●			●					権現山2号 土橋横穴5号
18		●	●		●	●				権現山3号
19	●	●			●	●				高草4・24号 観音堂横穴6・15号 女池ヶ谷9号 金山横穴A2号

パターン	主体部副葬土器組成						使用時期			該当古墳名
	壺	平瓶	埴瓶	横瓶	フ瓶	高杯	6世紀	7世紀	8世紀	
20		●				●				屋敷山1号・南室
21	●	●			●	●				高草6号 越ヶ谷B-11 白砂ヶ谷C-1号 二保2号 姪子森
22		●			●	●				高草7号 金山横穴B10号
23	●					●				高草9号 越ヶ谷B-7号 鶴田1号 観音堂横穴13号 天神山3号
24					●	●				高草14号
25	●	●				●				高草15号 越ヶ谷B-3号
26	●				●	●				高草18号
27						●				高草19号
28					●	●				越ヶ谷B-4号
29		●				●				伊庄谷横穴30号
30	●	●				●				越ヶ谷B-2号 白砂ヶ谷C-2/D-9号 白砂ヶ谷D-10号 平尾野添横穴B-b-1 古坂北2号 女池ヶ谷2号
31		●				●				白砂ヶ谷D-1号 白砂ヶ谷D-3号
32		●	●			●				押越2号
33	●	●	●			●				押越4号 金山横穴B9号 伊庄谷横穴B-5号 新林1号
34	●	●	●			●				大門大塚
35	●	●				●				字洞ヶ谷横穴
36		●			●	●				山ノ神2号
37	●	●	●			●				女池ヶ谷4号 女池ヶ谷21号
38	●				●	●				女池ヶ谷12号 女池ヶ谷20号 金山横穴A5号
39	●	●	●			●				伊庄谷横穴B-10号
40	●	●	●			●				賤機山

第1表 静岡県内における古墳主体部副葬土器の組成パターン

A類…壺類+坏類+甕+ α

※壺類は「長頸・短頸・台付・直口・広口」等の各種を含む。

B類…壺類+坏類+ α

坏類は「坏蓋・坏身・高坏」等を含む。

C類…坏類+甕+ α

D類…坏類+ α

こうして煩瑣なパターン群もA類に該当するものが13基、B類に該当するものが11基、C類に該当するものが6基、D類に該当するものが9基より成り立っていることが判明した。厳密には、各類の器種項目の最後に示した「 α 」の部分には、最初に器種項目として設定した大枠の内の残りにあたる瓶類の何れかが該当することが多い。あえて瓶類を類別から外したのは、陶邑古窯址群の器種消長からも窺えるように（田辺1966）、瓶類の出現と消長には時期に限りがあり、必ずしも全時期を通じて存在するものではないからである。逆に言えば、今回対象とした古墳の時期には比較的瓶類が多いために「 α 」の部分に必然的に該当する確率が高いと言える。

iii) 組成の特徴

ここで分類したA～Dのグループを通じての組成の特徴と個々のグループの特徴について触れることとする。まず最初に全パターンについて言えることとして組成中に瓶類が存在した場合、四項目の瓶類の中において一器種までは存在しても、三器種以上になることは稀であるということである。具体的に言えば平瓶と提瓶の組み合わせが存在しても、平瓶と提瓶と横瓶という三者は併存する可能性は非常に少ないということである。一器種ないしは二器種で組成がなされる場合が大半であるという規則性が観察できる。

また同じく瓶類に関わることであるが、平瓶・提瓶・横瓶・フラスコ形瓶の四器種の内、その使用に偏りがあることに気付く。つまり、平瓶と提瓶の占有率が非常に高く、平瓶が四割、提瓶が三割を占め、両者では七割を占めるという傾向がある。（第2図参照）

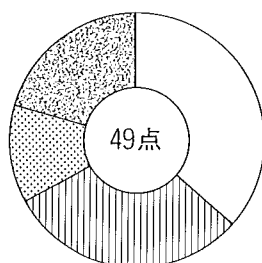
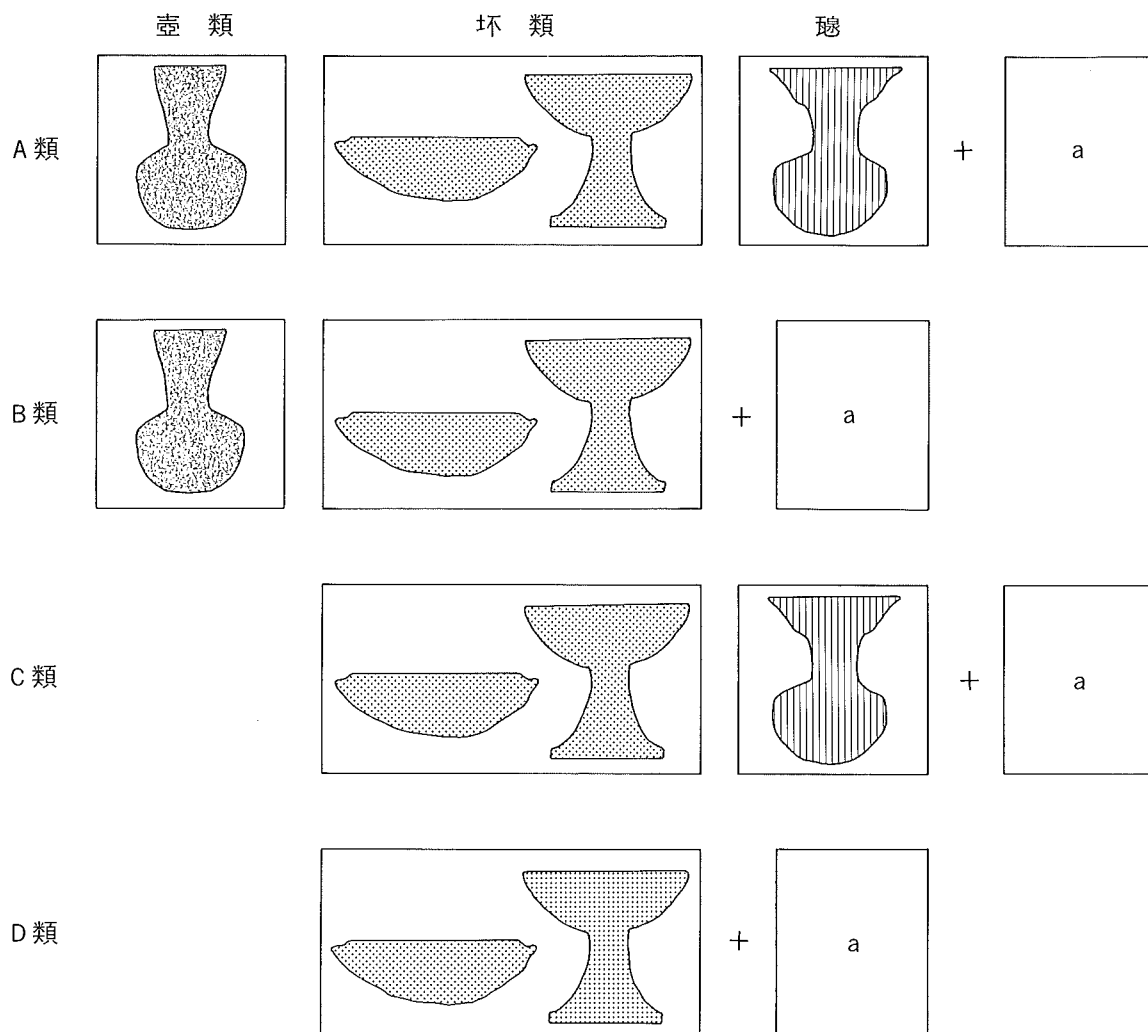
個々のグループの特徴としては何れのグループも基本的に坏類を有することがあげられ、これを中心に据えながら、壺の有無によって大きくA・B類とC・D類に分けら。A類とB類またC類とD類の区別は、甕の有無によってなされると言い換えることもでき、坏類の次に壺と甕が組成のポイントとなっている。

今回は4種の区分しか行っていないが、詳細に各分類を観察するとA類内において瓶類を2種以上組成中に取り入れるグループ（パターン5・6・33・37・39・40）と瓶類が1種以下のグループ（パターン1・2・11・12・16・26・30）に分けることができる。またB類内も坏のみのグループ（パターン9・13・17・25）と坏・高坏の二器種を備えたグループ（パターン19・21・23・29・34・38）に分けることができ、同じようにC類内も坏のみのグループ（パターン3・18・31）と坏・高坏を備えたグループ（パターン10・28・36）に分けられる。（今回は詳述しないが、細分に際して森井雅彦氏に協力いただき、PC9801NSRで「統計解析ハンドブックfor win」・共立出版株式会社のソフトを使用し、クラスター分析〔デンドログラム・ワード法〕を行った。分類の妥当性のチェックにその成果の一部を利用させていただいている。）

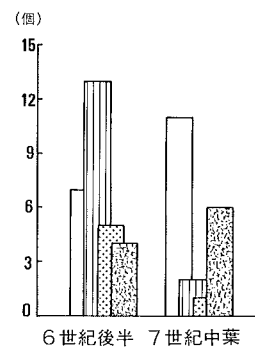
以上の細分は可能であるが、資料数も少なく現段階でその持つ意味合いについて論及できるだけのものを持ち合わせておらず、今回はA～D類以上の分類は行わないこととする。

iv) 各組成の年代

はじめに述べたように今回の土器組成を観察するに際して、最も問題となるのがその採用された時期である。一時期の確実な資料の抽出が困難なこともあり、相対的な判断に拠らなければならない。



	平瓶	18点	36.7%
	提瓶	15点	30.6%
	横瓶	6点	12.2%
	フ瓶	10点	20.4%



第45図 組成分類概念・瓶類内の占有率・瓶類内における時期による組成の変化図

そこで、資料の大半が6世紀の後葉から7世紀の後葉に集中し、しかも追葬を伴うという条件であるが、以下に示すような分類を行った。

つまり、採用時期に幅を持っているものの、時期の平均を取ると7世紀の中葉前後に中心を置くグループと6世紀の後葉に中心を置くグループが存在し、この数値を基に新・古のグループに二分しすることとした。

第2表は前述したグループ分けを基に作成したものである。これによれば、6世紀の後葉前後に中心を置くと考えられるグループに該当するものは、A類ではパターンの16・40・2・11・33・1・37・39が、B類ではパターンの34・35・17・23が、C類では3・10・18・31が、D類では32・4・22・20・24がある。もう一方の7世紀の中葉に中心を置くグループは、A類では5・30・26・12・6が、B類では19・21・9・29・13・25・38が、C類では36・28が、D類では7・14・8・27がそれぞれあてはまる。

勿論以上のようなグループ分けをしているものの、個々のパターン内においてもその資料抽出の段階において、より古相を示すものや新相を示すものが混在しており、その最大幅の中の平均を取り、その数値の比較に基づいて観察した結果である。

v) 時期による組成の変化

先の項で新・古の二グループに分けたものの器種組成について比較を行い、その時期ごとの変化について若干触れておく。時期ごとの変化とは言うものの、相対的なものであるため多少の時期の混在もあることを改めて踏まえた上で、大きく観察した場合次の点が指摘できる。

それは瓶類内の変化である。この瓶類も細かくは、平瓶・提瓶・横瓶・フラスコ形瓶の4つに分類したが、それぞれの組み合わせを見ると、ある傾向のあることが解る。つまり、第45図に示したように6世紀の後葉のグループでは提瓶が13例あったものが、7世紀中葉の段階では2例となる。これとは対照的に平瓶は6世紀後葉段階で7例であったものが、7世紀中葉段階では11例と、その数を増やしている。

上記のことから導き出されることは、瓶類の中において6世紀中葉前後には提瓶の使用が目立つが、7世紀中葉ごろには平瓶の使用が中心となるということである。つまり「提瓶」から「平瓶」への使用意識の変化である。以上の流れは、東海地方の瓶類について観察された宮下氏が、平瓶の系譜について触れられ、「平瓶を単純口縁をもつ提瓶から転化したものと考えることが可能である。これは口頸部の比率が一致することからも確認し得る。」と指摘されていることと合致し（宮下 1984）、使用状態と形態の系譜の双方から瓶類の変遷を辿ることができたと言える。

vi) 他地域の古墳との比較

ここまでについて、少しづつではあるが6世紀の後半から7世紀代の古墳主体部への土器の副葬に対する組成パターンが見えてきた。次にそれ以前の古墳資料を検討することによって、どのように組成に変化があったのかをより詳しく観察することができると考えられる。但し、県内の西・中部に限らず、6世紀前葉から中葉にかけての資料が少なく、一概に比較の対象とならないが、現段階での見通しとして県外の数例の資料と、続けて県内の資料を観察することとする。

まず初めに三重県の亀山市に所在する井田川茶臼山古墳である。直径20m前後の円墳に両袖式の横穴式石室を内蔵する。副葬品は非常に豊富であるが、主体部に副葬された土器の組成は先に分類した内の「パターン2」に該当し、A類に当てはまる様相を示している。特殊な器種として器台を含む点が注意される。

続いて岐阜県上石津町に所在する二又1号墳である。当墳は直径15mの円墳で片袖式の横穴式石室

比較的古相を示すグループ（6世紀後半）

比較的新相を示すグループ（7世紀中葉以降）

A類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
16	●		●				●	●
40	●	●	●	●		●	●	●
2	●		●			●	●	●
11	●				●		●	●
33	●	●	●			●	●	●
1	●					●		●
37	●	●		●		●	●	●
39	●	●	●		●	●	●	●

A類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
5	●	●			●	●	●	●
30	●	●				●	●	●
26	●				●	●	●	●
12	●					●	●	●
6	●	●	●			●		●

B類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
34	●		●	●		●	●	
35	●		●			●	●	
17	●		●			●		
23	●					●	●	

B類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
19	●	●				●	●	
21	●	●			●	●	●	
9	●	●	●			●		
29	●	●		●		●	●	
13	●					●		
25	●	●				●		
38	●				●	●	●	

C類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
3			●			●		●
10		●				●	●	●
18			●	●		●		●
31		●				●		●

C類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
36		●			●	●	●	●
28					●	●	●	●

D類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
32			●	●			●	
4			●			●		
22		●			●	●	●	
20			●				●	
24					●	●		

D類

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
7		●				●	●	
14		●				●		
8						●	●	
27						●		

その他

	壺	平瓶	提瓶	横瓶	フ瓶	杯	高杯	甗
15	●							●

第2表 時期別に見た組成表

を内蔵している。副葬土器は「パターン2」で、分類のAに該当する。特殊な器種として器台と脚付連結壺がある。

同じく岐阜県の関市には陽徳寺裏山1号墳があり、直径10mの帆立貝形の墳形に両袖式の横穴式石室を内蔵している。副葬土器は「パターン33」で、分類のA類に該当する。特殊な器種として子持器台と角坏がある。

愛知県豊田市の豊田大塚古墳は直径30mの円墳で、羽子板形の平面形態を有する横穴式石室を内蔵している。副葬土器は、先の二又1号墳と同じく「パターン2」で、分類のAに該当する。特殊な器種としては脚付連結壺や脚付連結坏がある。

ここで県内に目を移してみると、まず磐田市の甕塚古墳が挙げられる。直径26mの円墳で裾部には埴輪を巡らしている。主体部は片袖式の横穴式石室で、副葬土器の組成は「パターン33」で、分類のA類に属する。特殊な器種として器台がある。

続いて袋井市の大門大塚古墳は直径26mの円墳で、詳細な平面形態は後世の攪乱によって不明であるが、横穴式石室を内蔵している。副葬土器の組成は「パターン34」で、分類のBに属する。特殊な器種としては、有蓋脚付短頸壺がある。この蓋の頂部には甕もしくは甕形壺を配した所謂装飾付須恵器の範疇に属するものが付く。

以上、僅か6例に過ぎない資料であるが簡単に列挙した。何れの資料にも共通することは、今回副葬土器の組成を理解するために分類したAからDの4種類の内のA類（壺+坏類+甕+ α ）に属するものが大半を占め、唯一例外は静岡県の大門大塚古墳がB類に属するだけである。この大半を占めるA類の具体的内容は「 α 」の部分に瓶類が該当し、個々の器種としては提瓶がこれに当たることが全ての古墳で観察された。また、脚付連結壺や脚付連結坏に代表されるような装飾付須恵器もしくは、器台が何れの古墳にも副葬されていることが共通項として見られ、こうした器種も先に述べたA類の構成要素の内の「 α 」に属していると言える。

次に個々の微細な組成を示す「組成パターン」を比較すると、井田川茶臼山古墳と豊田大塚と二又一号墳が「パターン2」に、陽徳寺裏山1号墳と甕塚古墳が「パターン33」に該当し、大門大塚古墳が単独で「パターン34」を形成している。以上を見て明らかなように、僅かな資料内の比較であるが、非常に個々の組成内容まで共通項を有していることが理解できる。

まとめてみると、6世紀の前葉を中心とした古墳主体部の土器副葬の組成は、壺+坏類+甕+提瓶に加え、器台や装飾付須恵器で構成されることが多いと言える。特に装飾付須恵器においては、同一器種を連結することが目立つが、このことよりもむしろ器台との共通性から、他の器種とは隔絶した一際大きく・高い脚を付けるという要素が求められたものと推測できる。更に、「組成パターン」にも共通性が見られるなど、かなり画一化した土器副葬の規則性があった可能性が指摘できる。

vii) 金山横穴にみる土器副葬の状況

ここでは金山横穴の主体部における土器の副葬状況について、先の分類に照らして観察していく。今回発掘調査によって確認された横穴の数は総数16である。このうち、副葬状況のはっきりしているもの8基について観察を行った。まず先の「副葬土器の組成分類」に当てはめると、A類に該当するものはB1・9号横穴である。B類に該当するものはA2・5号とB4・7号横穴である。D類に該当するものはA1号・B10号横穴である。C類は存在しないものの、ほぼ各類とも平均的に存在している。

続いて、「組成パターン」で比較すると、「パターン7」にA1号横穴が、「パターン11」にB1号横穴が、「パターン19」にA2号横穴が、「パターン22」にB10号横穴が、「パターン25」にB4号横

穴が、「パターン33」にB 9号横穴が、「パターン38」にA 5号横穴がそれぞれ属している。

以上を見る限り、特に偏った傾向を示す状況は見いだせない。但し、今回踏み込んで観察を行っているので、他の資料との比較が困難であるが、金山横穴の各主体部において、土器以外の副葬品を観察するとA 1・3号横穴やB 1・2・3・9号横穴には、大刀・鉄鏃・刀子などの副葬品があり、基本的に馬具を副葬していないなど、やや副葬品に目立ったもの無い中であって、他の横穴を凌駕するものの存在が見いだせる。加えて、玉類の出土の少ない金山横穴において、A 5号・B 3号横穴から出土していることは、これらの横穴の特殊性が僅かながら観察できる。

この金属製品を中心とした、当横穴群の中における比較的豊富な副葬品を有する主体部は、平面形態の観察を行った場合、その規模の差にも比例していることが良く解る。つまり、A 3号・B 3号・B 9号横穴等に代表されるように、数基からなる単位群の中において、平面規模が大きく、且つ、その群の形成の契機となる横穴である可能性が高いものが、豊富な金属製品等の副葬品を有しているということである。残念ながら、こうした代表的な横穴の土器による組成の良好な資料が得られず、断定できないが、ひとつの方向性として、先に触れたB 1号・B 9号横穴等、他の横穴より比較的豊富な副葬品を有する主体部のグループに属するものが、「土器の組成分類」のA類に属しており、当類が他の三分類よりも幅広い組成を示し、その豊富性を特徴とすることと合致していると言える。言い換えれば、群形成の契機となるような中心的横穴において、その副葬時の土器組成として、基本器種の全てを備えた完全なかたちの、土器の副葬を執り行う可能性が比較的高いのではないかということである。これらの主体部に続く横穴は、その土器の副葬に際して、A類を続けて採用する場合もあろうが、金山横穴では比較的規模の小さな主体部が続く可能性が高く、こうした横穴の主体部への土器の副葬の組成は、B・C・D類などの壺や甕をその組成中から欠落したタイプのものが採用される確率が高いと考えている。

以上の事柄は、勿論、追葬資料の混在によって、組成に結果としてバリエーションが出てしまった場合も当然考えられ、他の多くの資料検討を必要とし、詳細については今後の課題としたい。

viii) 土器の器種による機能と組成

古墳の主体部より出土した土器の組み合わせを壺・瓶類・坏類・甕という四つの器種から観察したことは前節までで重ねて述べてきた。ここでは、古墳時代の土器器種の中で中心的な存在である「壺・瓶類・坏類・甕」に甕を加えて、これら5種類の器種の個々に持つ機能について検討を行い、合わせて相互に結び付いて形成される「組成」について考えてみる。

まず、甕であるがこの器種は他の四器種に比べ最も法量が大いことを特徴とする。先学も指摘しているように（池田 1967）、古代には酒の形成過程において甕の中で醗酵した結果、米が酒として変化していくが、その変化の神秘性は、米そのものというよりはむしろ、容器自体に神秘性を感じていたということが、説話等から読み取れる。こうしたことから甕は「貯蔵」という機能を果たしていたことが解り、「貯蔵」の内容物は穀物であり、水性のものであったことが多分に予測できる。

壺は先の甕に比べやや法量が小さい。長頸・短頸・直口・広口等の種類があり、これらに加えて脚の付く器形も存在し、非常に豊富な種類を有した器種であることを特徴とする。甕同様、その器形から「貯蔵」の目的を中心としながらも、手に持って比較的簡単に移動することが可能で、細かな動きにも対応できることから、反面においては「注ぐ」という機能を有している。また、高坏形器台と合わせて使用されることもあり、この場合には「供献」の意味合いが強いと考えられる。

瓶類は、提瓶・横瓶・フラスコ形瓶・平瓶等何れも口頸部を有しており、液体を「貯蔵」とともに、「注ぐ」機能を有している。このことは、平瓶の器形自体が「貯蔵」と「注ぐ」という両面性

を兼ね備え、口頸部を器形全体の端に装着していることから明らかである。また、底部が丸く安定感の無いものが多く、持って使用することに重点を置いた器形と言える。

甕は頸部を有しながらも、器体に孔を穿っており、静岡県内の郷ケ平9号墳出土の埴輪には先の孔に竹等の管を差し込んだ状態の表現が観察でき、液体を注ぐための工夫のなされた器種であることが良く解る。

坏類は大きく坏身・坏蓋のセットと高坏の二種類に大別できる。僅か乍らに残存した内容物を観察すると貝類や魚骨が非常に多い（木村 1990）。器種としては、坏身の中に食物遺存体が残存していることが、圧倒的に多いが、何れにしても坏・高坏共に「盛る」ための用具、つまり「供膳」の用具として使用されていたことが推測できる。また、液体そのものは残存しないので断定はできないが、土師器に比べ格段の保水性を持つ須恵器の特性と坏自体の器形からすれば、液体を「受ける」用途も想定できる。

以上5種類の器形について、その機能の概略を述べた。ここで整理してみると、甕と壺は主な機能として「貯蔵」がある。また一方で壺には「注ぐ」という機能の存在もある。この「注ぐ」機能を備えた器種は他に、瓶類・甕がある。特に「注ぐ」ことに注目すれば壺より瓶類は頸部に対する工夫が見られ、更に甕においては完全に注ぎ口を有している。こうしたことから、壺から瓶類、そして甕へとより機能分化が進んだ器種として捉えることができる。言い換えれば、甕に至って最も「注ぐ」ことに徹した器種と言える。

ここで5器種の機能を鑑みながら液体の取り扱いについて考えると、貯蔵を甕で行い、分配して壺ないしは瓶類に入れ、これを甕に移して坏に注ぎ入れるという一連の流れが想定できる。この内、特に壺・瓶類・甕の流れを土器組成分類のAからDにあてはめ観察すると以下のようなことが解る。つまり、A類においては壺・瓶類・甕という一連のより機能分化した器種を備え、「注ぐ」という行為に対応している。BとC類は瓶類を中心としてやや簡略化したかたちで対応しているが、より細かな分化を目指しているとするれば、瓶類と甕を有するC類の方が進んでいると言える。D類に至っては最も簡略化した形態を持っているものの、瓶類という「貯蔵」と「注ぐ」行為の二面性を有した器種の存在によって、器種の不足を補っている。

ix) まとめ

以上の事柄をまとめると、静岡県内の中・西部地域の古墳主体部への土器副葬の様相は、6世紀前葉から中葉にかけて高坏形器台と壺、もしくは装飾付須恵器等を中心として瓶類、坏類、甕を完備したバランスの取れた土器組成を示し、多様な機能からより限定された機能までの器種を備えた組成として捉えることができた。言葉を変えれば、どのような葬送が行われたのかは断定し難いが、個々の器種の用途が明確化され、より分化した使用のされ方をしていたものと推定できる。その中心には先に述べたように、壺→瓶類→甕へと連なる器種の用途の分化から読み取れるように、液体を使用する葬送があったものと判断される。

この均整のとれた組成と器台や装飾付須恵器を有した古墳も、限定された古墳、つまり各地の首長墓的な古墳に多く見られた。しかし、県内において6世紀中葉以降こうした古墳も衰退し、それとともに、土器組成も変化した。

壺と高坏形器台とセットを成し使用されていたものが、器台を失い壺のみの単独で利用されるようになる。この6世紀中葉から後葉にかけての時期を「壺としての独立」の時期と見て取れる。これと前後する時期には瓶類にも変化が現れ、提瓶を中心に使用していたものが、平瓶を利用ようになる。この変化はひとつには、提瓶が本来的な形態からして「提げ持つ」携行するものであることから、

「貯蔵」と「注ぐ」機能の二面性を有しているが、平瓶はこの機能をより明確にし、「注ぐ」機能を重視した結果であると言える。口頸部を器体の中央から端部へ移行し、やや傾斜させている点は、先の点を明確に示している。壺が本来的には「貯蔵」と「注ぐ」機能を有しながらも、器台との関係からも解るように、もうひとつの機能として「供献」的な役割をその初期には持っていたものと考えられ、器台の衰退と共に徐々に本来的な機能（貯蔵・注ぐ）へと向かい、このことが機能的に見て同じような役割を果たす提瓶を刺激し、形態変化をもたらし、結果として平瓶へと移行するのではないかと考えられる。

6世紀後葉の時期は、器種自体の変化と共に組成にも変化が現れ、土器組成分類で示したようなB～D類のような簡略化した組成を成立させる。しかし、7世紀代になってもA類のような壺・瓶類・坏類・甕を完備した組成も存在し、今回の資料の分析だけでは証明しきれなかったが、組成による身分等の階層差がそこにはある可能性を指摘しておきたい。

我が国に須恵器が伝来し、古墳の墳丘部を中心に使用されていたものが、主体部が木棺直葬という埋葬方法から横穴式石室へと変化していく過程で、主体部内への須恵器の副葬を可能とした。石室の大型化と副葬品の増加も、やがては衰退し、石室も小型化して行く。こうした状況の中でも、坏類は副葬の量こそ変化するものの、確実に主体部へと副葬され続け、これに壺もしくは瓶類が付加される組成は静岡県内の古墳時代後期の基本的パターンであると言える。

x) おわりに

県内の資料を中心に、古墳時代後期の古墳主体部の土器副葬の組成について考えてみた。最初に述べたように所謂「かたづけ」行為による特定時期の副葬品の抽出が困難で、その打開策として限界を承知しながらも敢えて方向性を探るため検討を行った。組成の使用時期の年代幅の特定や四種類に分類した組成がどのような意味を持つのかに対する検討など、不明瞭な点が多い。良好な古墳群内の資料を検討すると共に、地域ごとの比較を進めることによって本論の当否も今後明らかになると考えられる。

【 参考文献 】

- 田 辺 昭 三 1966 『陶邑窯址群 I』 平安学園考古学クラブ
宮 下 知 良 1984 「須恵器瓶類について」『日本古代文化研究』創刊号
池 田 源 太 1967 「瓶尊と古代人の情緒」『末永先生古稀記念古代学論叢』
木村幾多郎 1990 「古墳出土の動物遺存体（上）－食物供献－」
『九州文化史研究所紀要』第35号

【 抄 録 】

フリガナ	カナヤマコフンゲン カナヤマオウケツゲン					
書 名	金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ					
副書名	袋井市考古資料集第2集					
編集著者名	松井一明・白澤崇					
編集機関名	袋井市教育委員会					
所 在 地	〒437 静岡県袋井市新屋一丁目1番地1					
発行年月日	1996年3月25日					
フリガナ 所収遺跡名	カナヤマコ フンゲン カナヤマオウケツゲンエイゲン ビイゲン 金山古墳群 金山横穴群A群・B群					
フリガナ 所 在 地	シズオカケンフクロイシアイノ トヨサワ 静岡県袋井市愛野・豊沢					
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 44′ 19″	137° 56′ 43″	19720400 ～ 19720630 19911200 ～ 19920228	1500.0 m ²	中学校建設 公園建設
22216	171・ 173～ 176					
所収遺跡名		種別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
金山古墳群 2～5・8～10号墳		古墳群	古墳時代	古墳7基	馬具・直刀・鉄鏃 刀子・須恵器	初期群集 墳
金山横穴群 A群・B群		横穴群	古墳時代	横穴16基	須恵器・土師器 耳環・直刀・鉄鏃	後期横穴 群

袋井市考古資料集第2集

金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ

－袋井の群集墳と横穴群を考える(1)－

発行年月日 1996年3月25日

編集・発行 袋井市教育委員会

〒437 静岡県袋井市新屋1-1-1

☎0538-43-2111

印 刷 株式会社 開 明 堂

〒430 静岡県浜松市中沢町1-1

写 真 图 版

(1) B 群横穴、2・8～10
号墳遠景（北より）



(2) B 群横穴全景（南より）

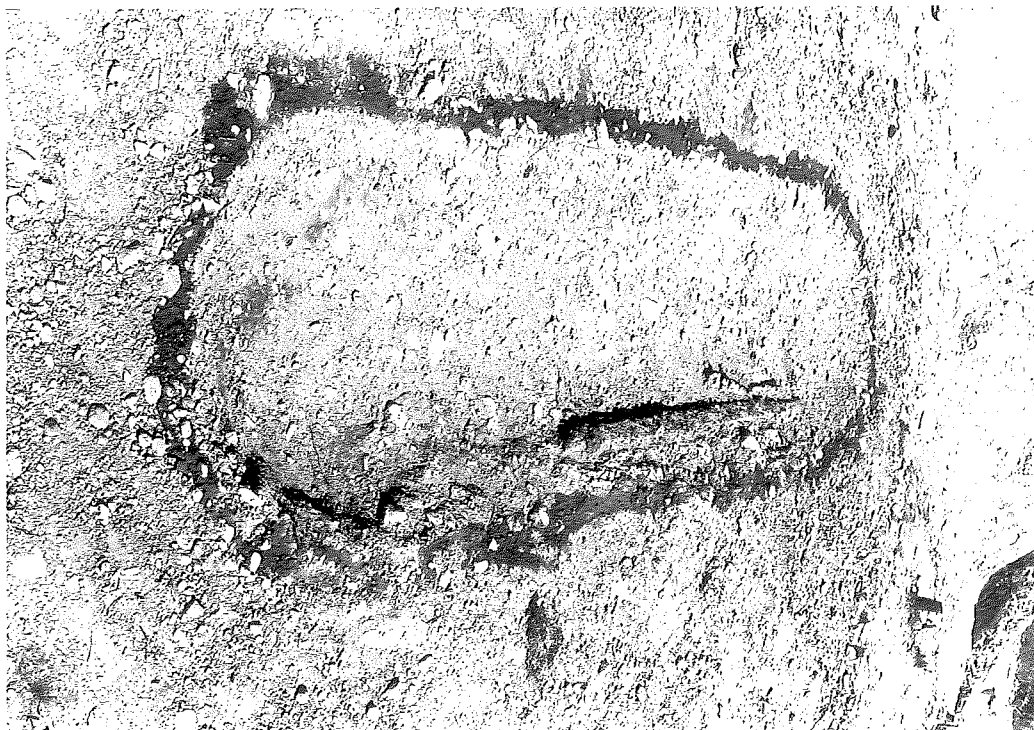


(3) A 群横穴、3～5 遠景
（南より）





(1) 3号墳全景（西より）



(2) 3号墳主体部（東より）



(3) 4号墳全景（奥5号墳、東より）



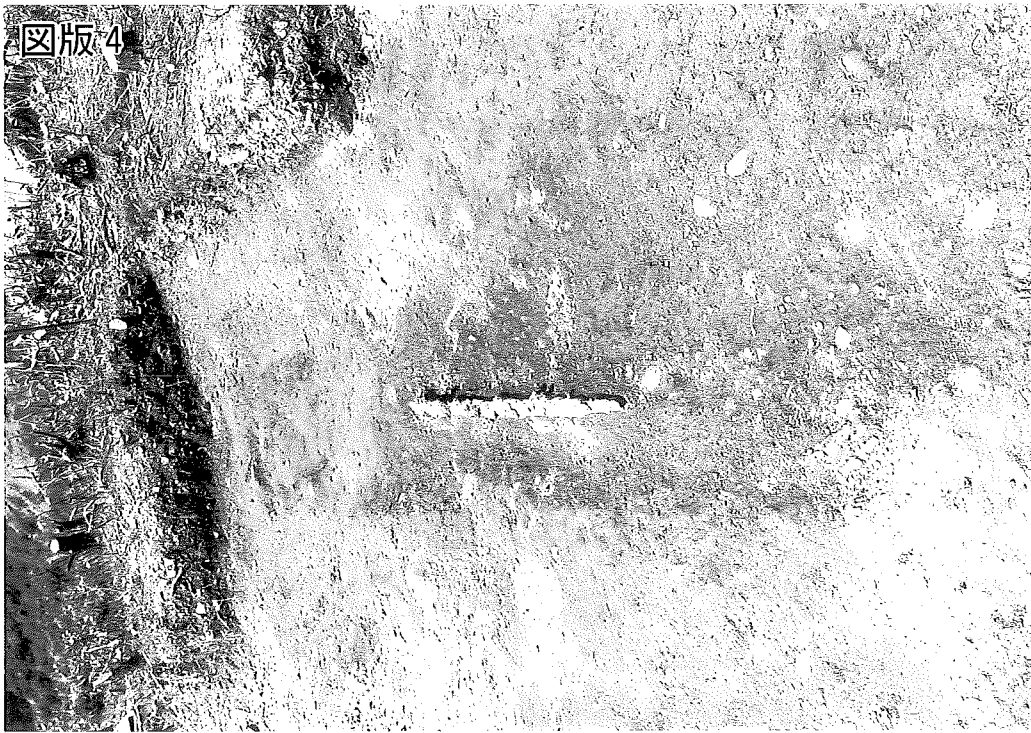
(1) 4号墳主体部（西より）



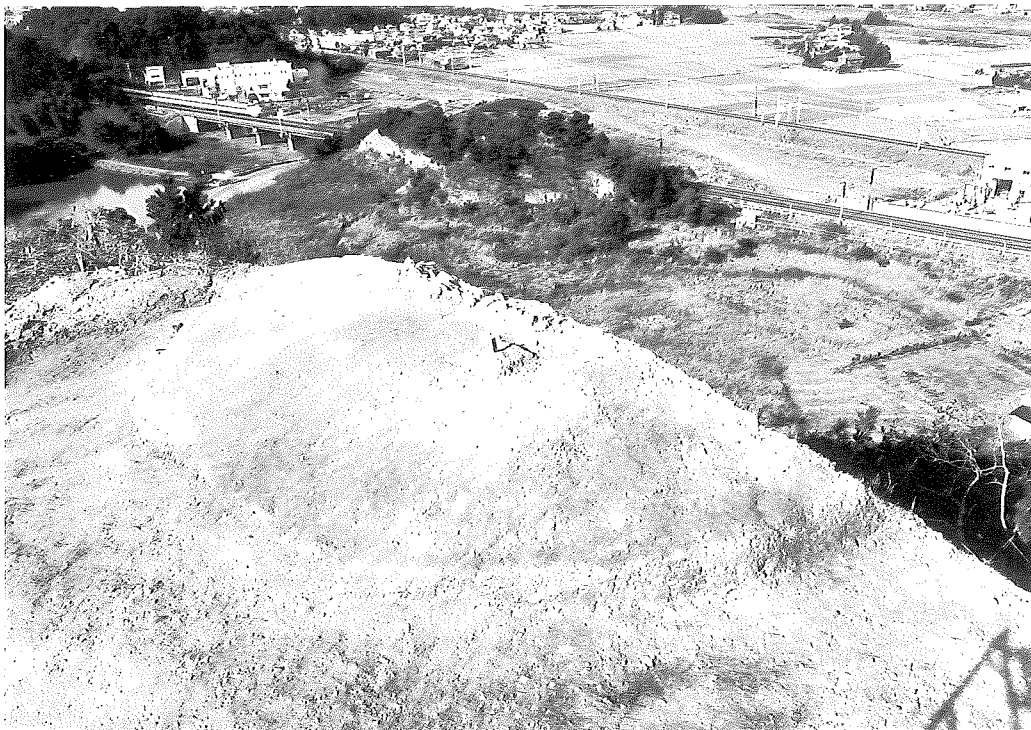
(2) 4号墳主体部出土馬具・
鉄鏃



(3) 5号墳主体部（礫擲？、
東より）



(1) 5号墳主体部（東より）



(2) 2号墳全景（東より）



(3) 2号墳主体部（礫櫛?、東より）



(1) 8号墳全景（西より）



(2) 2号墳主体部（南より）



(3) 9号墳全景（方墳？、西より）



(1) 9号墳主体部(小口礫積み、
西より)



(2) 10号墳全景(南より)



(3) 10号墳主体部(南より)



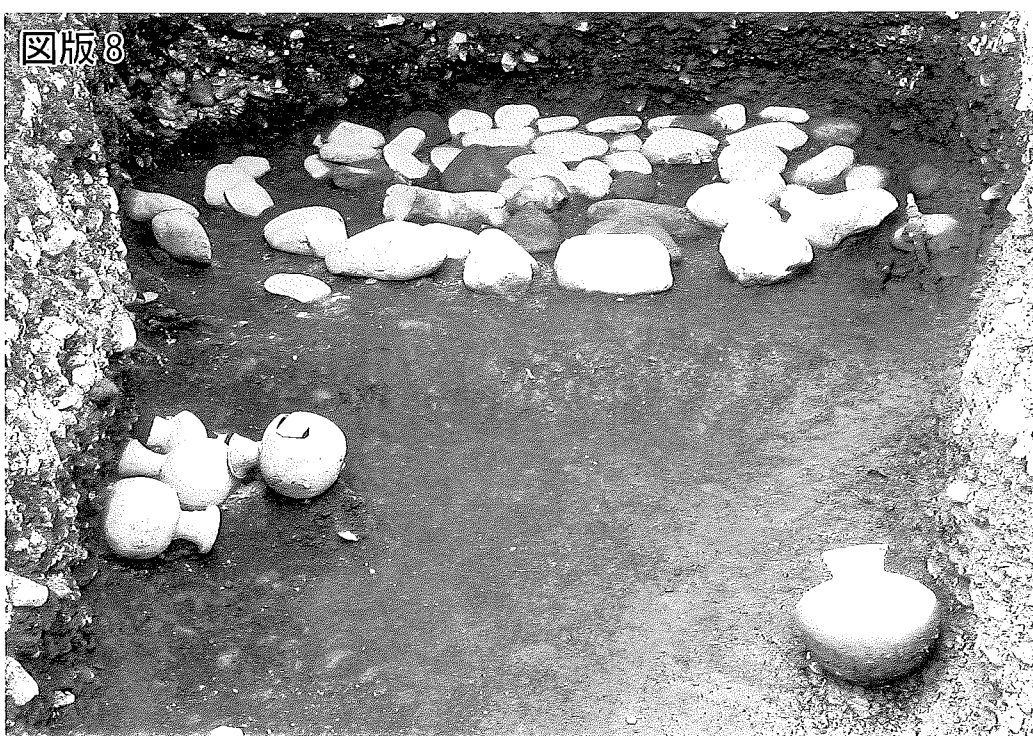
(1)A群横穴（手前1号横穴
奥5号横穴、一つの墓前
域からなる。）



(2)A 1号横穴内部（鉄刀や
平瓶が出土）



(3)A 2号横穴内部(棺座石)



(1)A 3 号横穴内部（フラスコ
瓶や鉄刀出土）



(2)A 4 号横穴内部（人骨多数
遺存）



(3)A 5 号横穴内部（須恵器多
数出土）

(1) B 1 ～ 8 号横穴全景（3
つの墓前域からなる。
南より）



(2) B 1 ・ 2 号横穴全景（墓
前域を共有する。南より）



(3) B 3 ・ 4 号横穴（墓前域
を共有する。南より）





(1) B 5～7号横穴（墓前域を
共有する。南より）



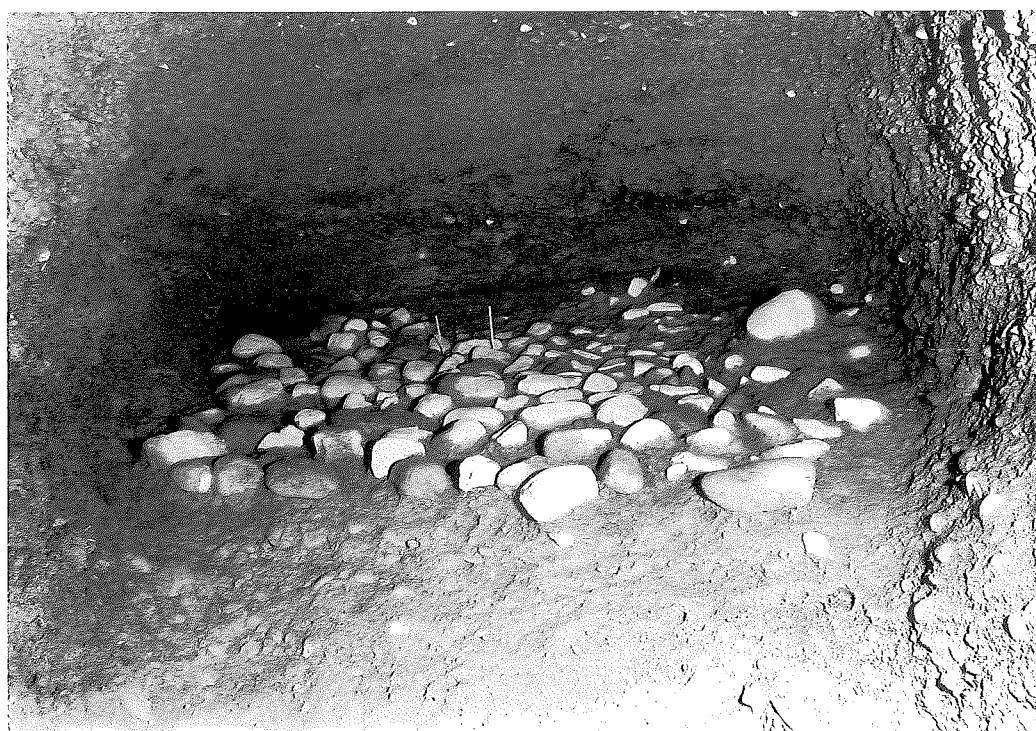
(2) B 6号横穴（1基単独で存
在、南より）



(3) B 9～11号横穴（山頂部
近くに存在、墓前域を共有
する。南より）



(1)B 1 号横穴内部（鉄刀や
竈出土）



(2)B 2 号横穴内部（大きめ
の石の敷石）



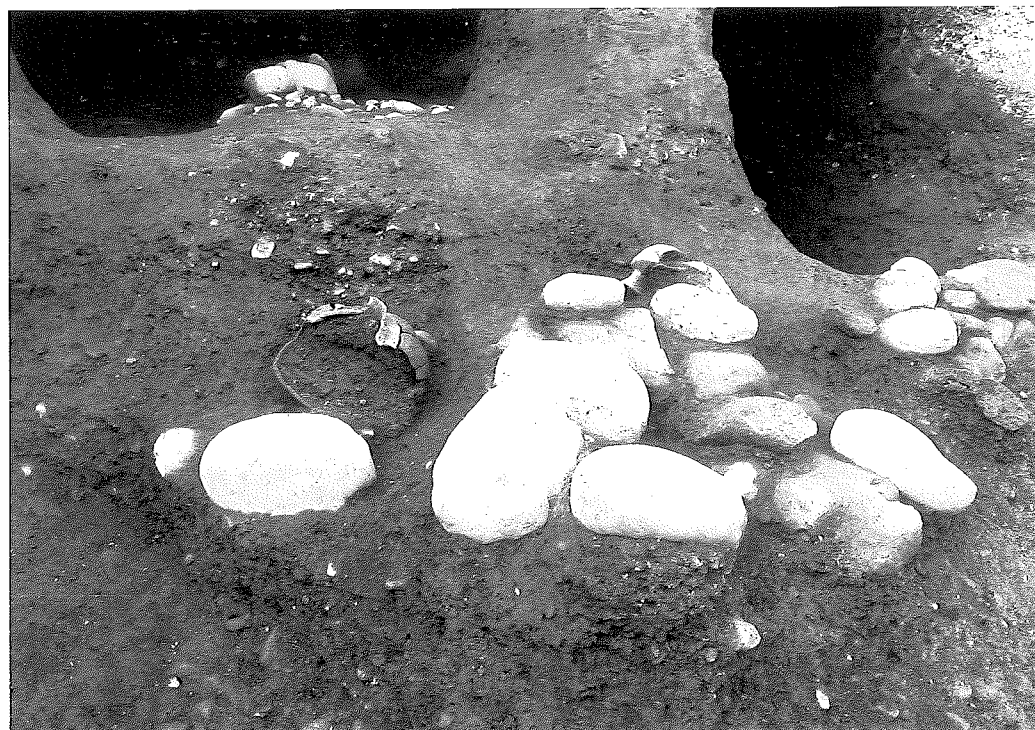
(3)B 3 号横穴内部（鉄刀や
竈出土、小さめの石の敷
石）



(1)B 4 号横穴内部（盗掘を受けている。）



(2)B 5 号横穴内部（造り替えられており敷石も動いている。）

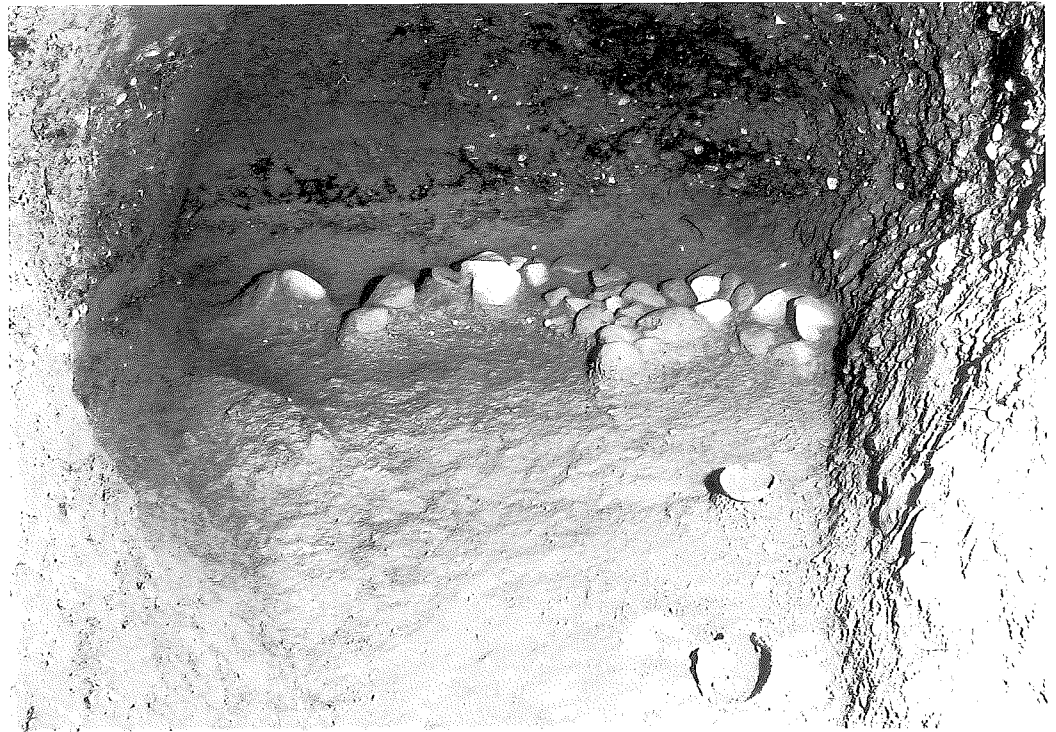


(3)B 5 号横穴墓前域（大形甕や平瓶出土）

(1) B 6 号横穴内部（大形の
石の敷石、フラスコ瓶出
土）



(2) B 7 号横穴内部（土師器
多く出土）



(3) B 7 号横穴羨道部遺物出
土状況（瓶と土師器坏出
土）





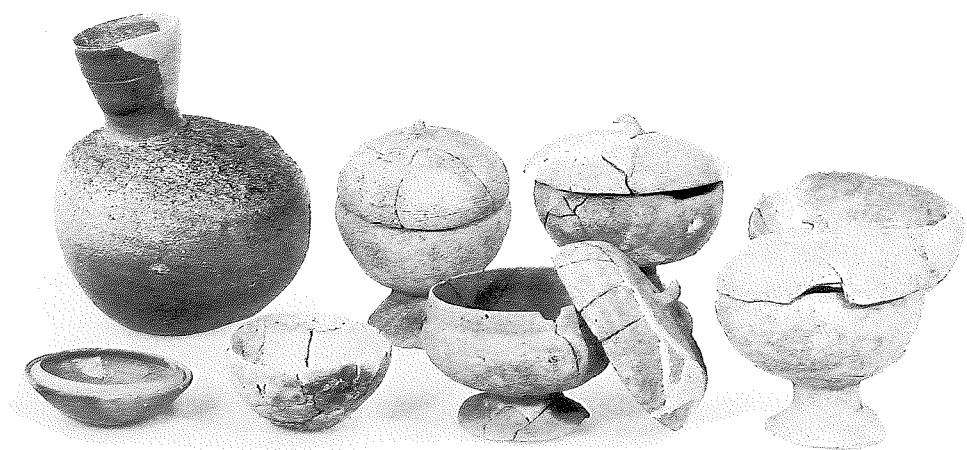
(1) B 7 号横穴内部（敷石がほとんどない。平瓶出土）



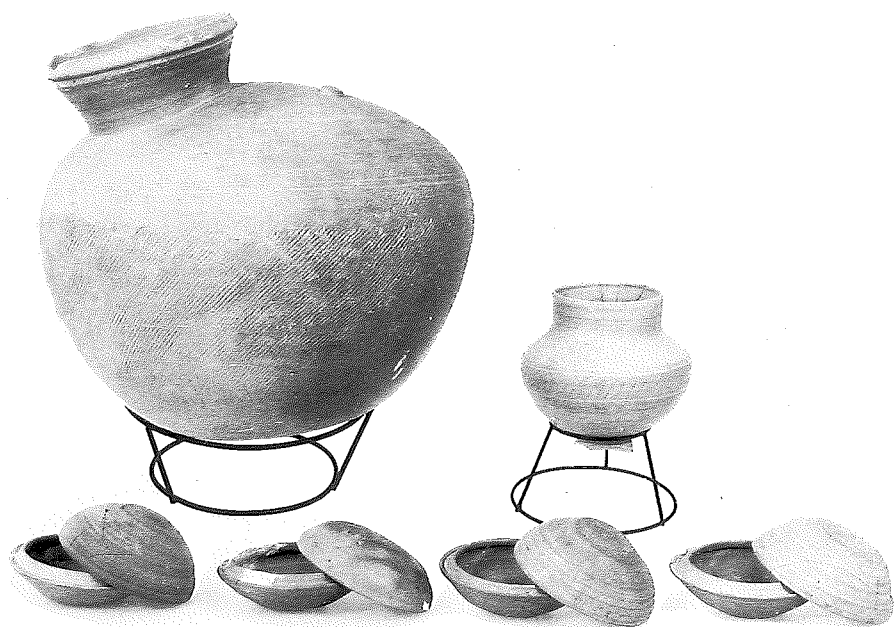
(2) B 9 号横穴内部（人骨や鉄製品多数出土）



(3) B 10 号横穴内部（小形横穴、須恵器出土）



(1) A 1 号横穴出土土器



(2) A 2 号横穴出土土器



(3) A 3 号横穴出土土器



(1)A 5 号横穴出土土器



(2)B 1 号横穴出土土器



(3)B 2 号横穴出土土器



(1)B 3 号横穴出土土器



(2)B 4 号横穴出土土器



(3)B 5 号横穴出土土器



(1)B 6 号横穴出土土器



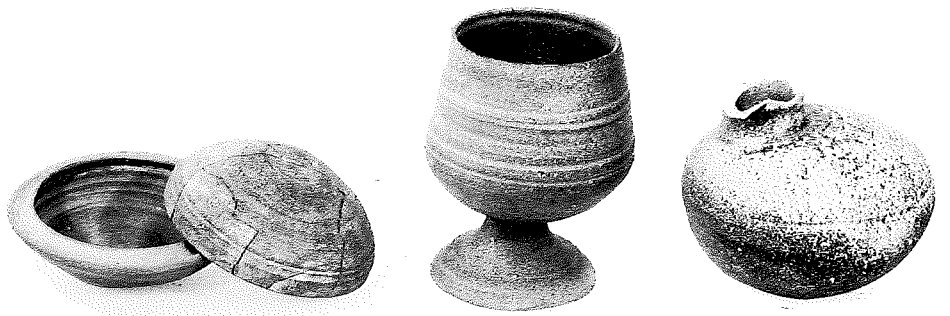
(2)B 7 号横穴出土土器



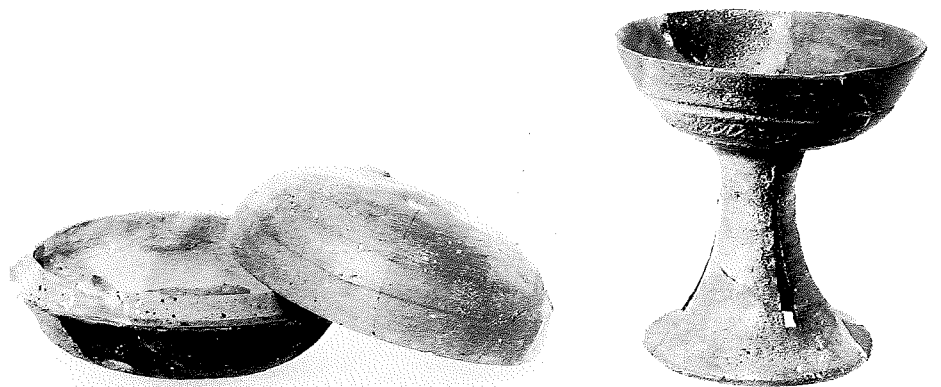
(3)B 8 号横穴出土土器



(1) B 9 号横穴出土土器



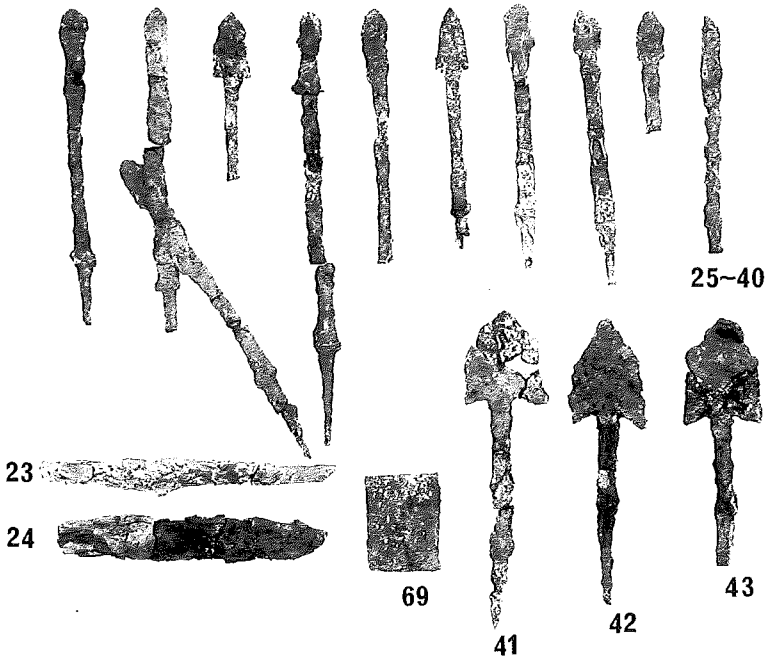
(2) B 10 号横穴出土土器



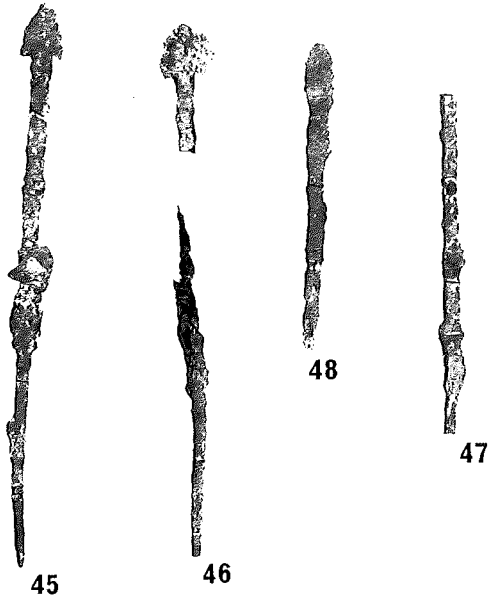
(3) 4 号墳出土土器



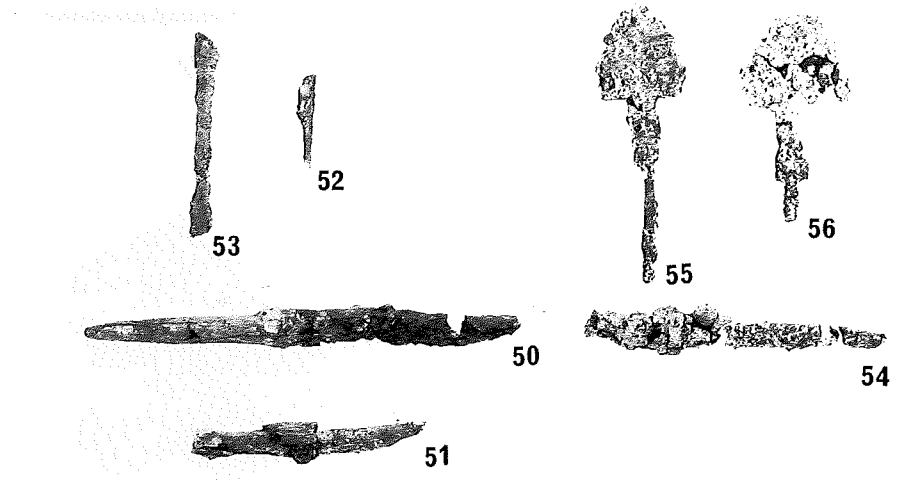
(1) 9 号墳出土土器



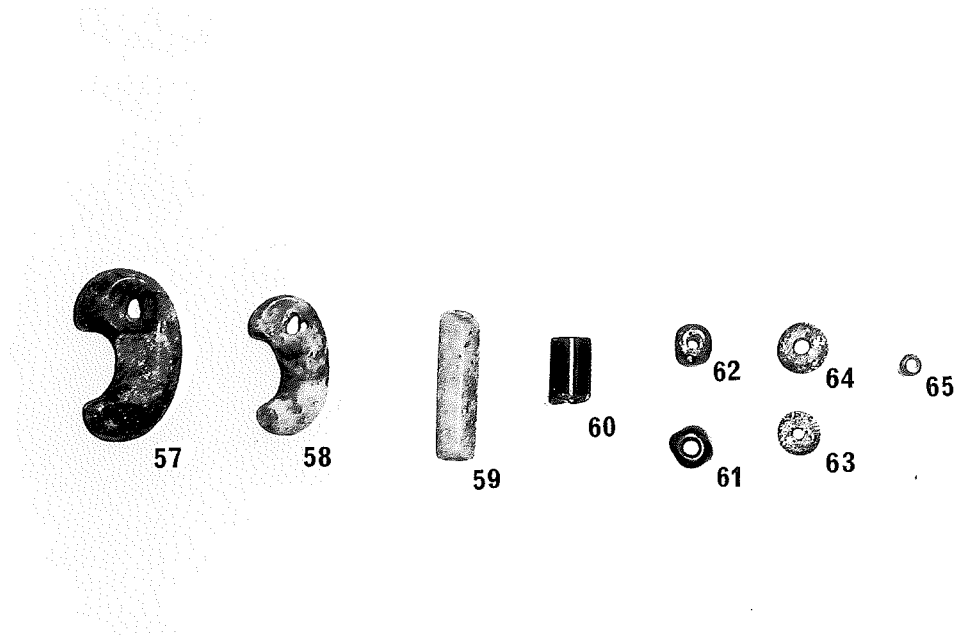
(2) A 1 号横穴出土鉄器



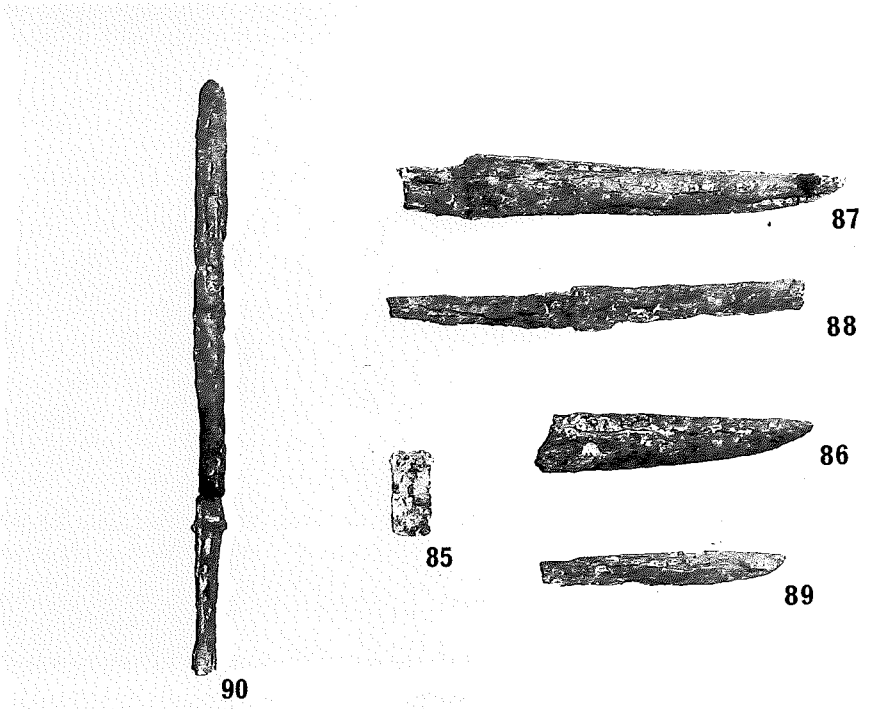
(3) A 3 号横穴出土鉄器



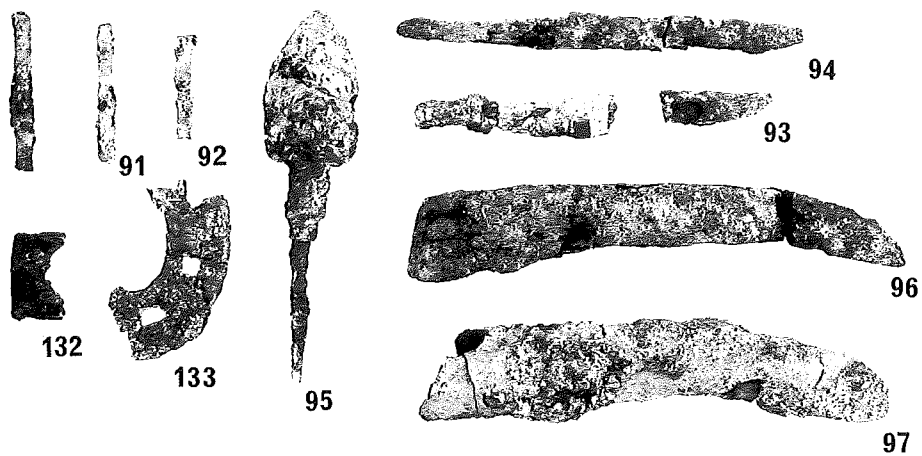
(1) A 4・5号横穴出土鉄器



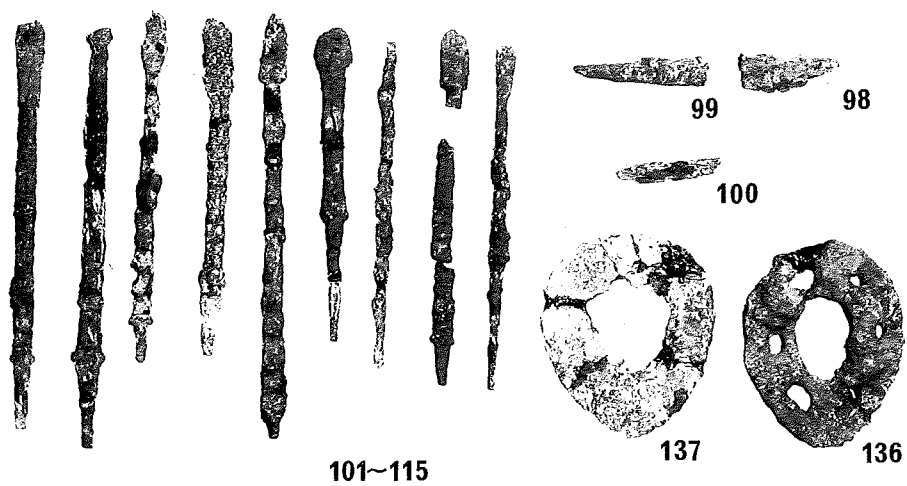
(2) A 5号横穴出土玉類



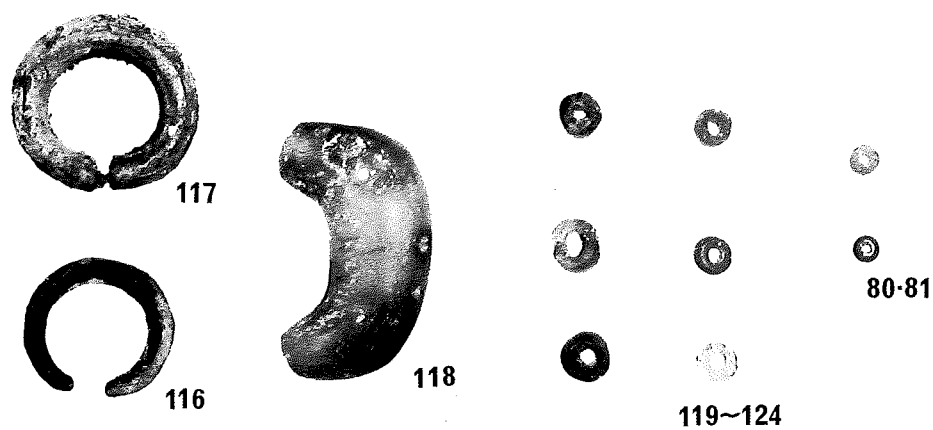
(3) B 2号横穴出土鉄器



(1) B 3 • 7 号横穴出土鉄器



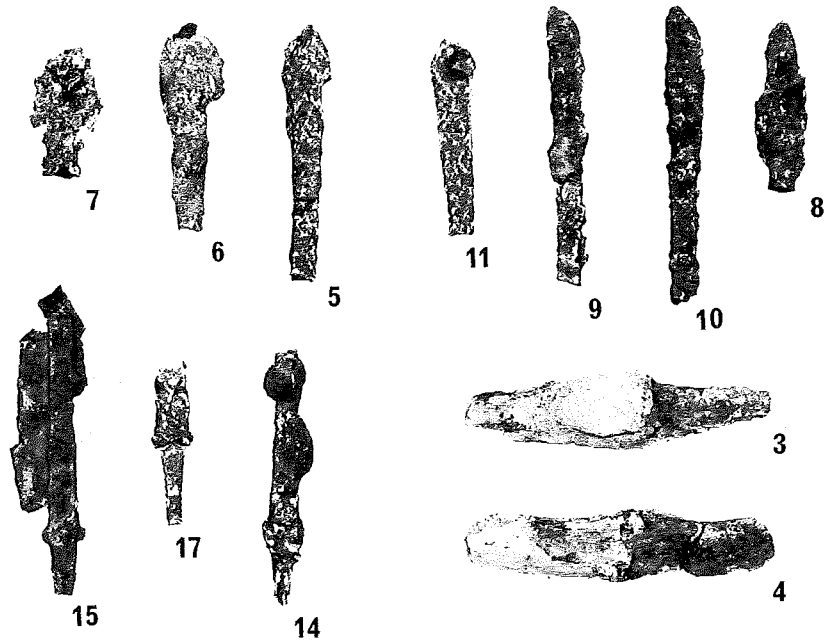
(2) B 9 号横穴出土鉄器



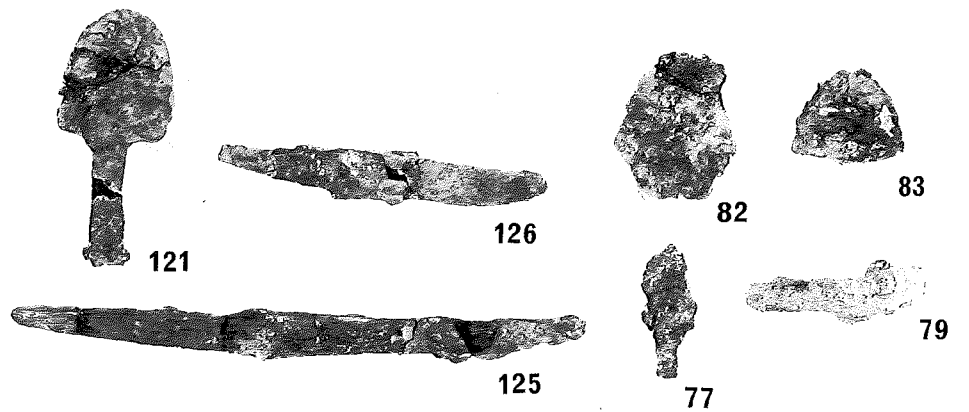
(3) B 3 号横穴 • 9 号墳出土玉類



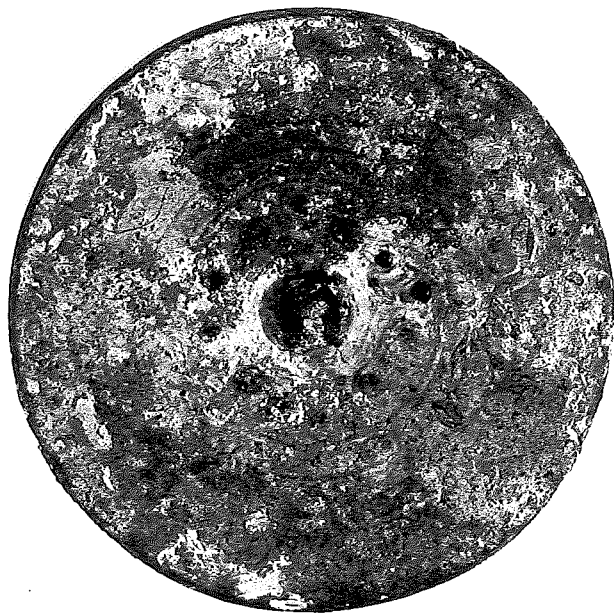
(1) 4号墳出土馬具



(2) 4号墳出土鉄器



(3) B10号横穴・2・9・10
号墳出土鉄器



(1) 波垂神社上古墳出土鏡



(2) 愛野向山B古墳群（南より）



(3) 地藏ヶ谷横穴群（西より）